ヘヴィーオブジェクト 外なる神

「……狂ってる」
ギガントハスラー。それは四つの世界的勢力が各々自慢のオブジェクトを持ち込み、総勢八機入り乱れて行う巨大な合同軍事演習。もちろん演習なんて名ばかりで、実際は本物の殺し合いだ。オブジェクト八機のバトルロイヤルを前に、お姫さまことミリンダ＝ブランティーニは額に手を当てて、もう一度呟く。
「まったくかんぺきに狂ってる」
一方のクウェンサーは、完全にぶんむくれたお姫様の機嫌を取り戻せと使命を帯びる。失敗はオブジェクトの支援中断を意味するぞ！　新型兵器の見本市へ決死のデートに挑む彼の運命はいかに。
そして前人未踏のお祭り騒ぎの裏側では、「邪神の名」を冠する男が蠢いているらしく……。近未来アクション！

か-12-62

ヘヴィーオブジェクト 外なる神

鎌池和馬

電撃文庫

9784048654524

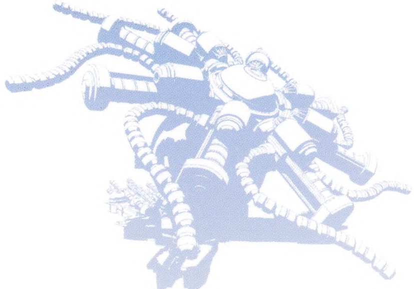
1920193005905

ISBN978-4-04-865452-4
C0193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価：本体590円
※消費税が別に加算されます



鎌池和馬

本日のレプリカント的観察日記。花！　天敵を避けて特定の虫だけを呼び寄せる専門家ですが、人間が見ている色と虫が見ている色は感覚が違うので、意外と未解明な部分も多いのだとか。使いこなせば大規模な虫害も思いのまま？

【電撃文庫作品】

とある魔術の禁書目録①〜㉒
とある魔術の禁書目録SS①②
新約 とある魔術の禁書目録①〜⑬
ヘヴィーオブジェクト シリーズ計10冊
インテリビレッジの座敷童①〜⑧
簡単なアンケートです
簡単なモニターです
ヴァルトラウテさんの婚活事情
未踏召喚：// ブラッドサイン①〜③
とある魔術のヘヴィーな座敷童が簡単な殺人妃の婚活事情

イラスト：凪良

バンダイナムコのゲーム『アルトネリコ』シリーズのキャラクターデザインをつとめる。電撃文庫では『シャープ・エッジ』『F』（著／坂入慎一）、『アプラクサスの夢』（著／高橋弥七郎）などを担当する。個人サークル『S.E.C』でも活動中。
http://www.sec.or.tv/

電撃文庫3000タイトル突破!!
大感謝フェア 抽選で合計2,000名様以上に当たる特大プレゼント!

特賞 5ポイントで応募

電撃文庫&
電撃文庫MAGAZINE 1年分（2016年1月～12月発売分）……10名様

3000タイトル賞 3ポイントで応募

著者サイン入り棚プレートセット……40名様

大感謝賞 2ポイントで応募

特製しおり15枚セット……2,000名様

フェア期間中に発売される電撃文庫および電撃文庫関連本についている応募券で素敵なグッズをゲットしよう!　応募方法と応募券は反対側のオビ折り返しをチェック!
※賞品についての情報は、フェア公式サイトをご確認ください。

電撃文庫3000タイトル突破!! 大感謝フェア

豪華賞品プレゼント実施中!
応募締切／2015年11月30日（月）※当日消印有効

詳しくはオビ折り返しをご覧ください。

電撃文庫

『ヘヴィーオブジェクト』アニメ化記念 鎌池和馬キャンペーン

「ヘヴィーオブジェクト」アニメ化記念 鎌池和馬キャンペーン

オビに左記のキャンペーンロゴが印刷されている対象商品を購入いただいた読者の方に、抽選で各賞をプレゼントいたします。
キャンペーン対象商品の詳細は鎌池和馬10周年! 公式サイトをチェック!
http://kamachi10th.dengeki.com/

A賞 応募券9枚：著者直筆サイン入り複製原画4枚セット
（ヘヴィーオブジェクト、とある魔術の禁書目録、インテリビレッジの座敷童、未踏召喚://ブラッドサイン）
（第一弾締切:3名様、第二弾締切:3名様、合計6名様）

B賞 応募券5枚：『ヘヴィーオブジェクト』出演声優4人のサイン入りアニメポスター
（第一弾締切:5名様、第二弾締切:5名様、合計10名様）

C賞 応募券3枚：特製図書カード 1000円分
（鎌池和馬作品のイラストを使用）
（第一弾締切:50名様、第二弾締切:50名様、合計100名様）

鎌池和馬キャンペーン 応募要項

応募方法

対象の商品についている応募券を必要枚数集めて（A賞は9枚、B賞は5枚、C賞は3枚）郵便はがきの裏面に貼り、①郵便番号・住所、②氏名、③年齢・性別、④電話番号を記入の上、下記の宛先までお送りください。

応募方法

第一弾応募締切　2015年12月31日（木）※当日消印有効
第二弾応募締切　2016年3月31日（木）※当日消印有効
宛先……〒102-8584 東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス 電撃文庫編集部
『鎌池和馬キャンペーン』係

※オビに本キャンペーンの応募券がついている書籍のみが対象となります。※お一人様何点でも申し込みは可能ですが、ハガキ1通につき1口しか応募できません。1通での複数口の応募は無効となります。※第一弾の抽選から外れたご応募は落選となり、第二弾の抽選には入りません。※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。賞品の発送は、第一弾締切につきましては1月下旬、第二弾締切につきましては4月下旬の予定です。※応募された方の個人情報は、賞品の発送および個人情報を含まない統計的な資料の作成目的のみに使用いたします。※キャンペーンへの応募、賞品の発送先は日本国内限定となります。※賞品を譲渡（転売・オークション出品を含む）しないことを応募・当選の条件とさせていただきます。

応募券
電撃文庫
鎌池和馬キャンペーン
ヘヴィーオブジェクト
外なる神
※コピー不可

電撃文庫3000タイトル突破!! 大感謝フェア応募要項

応募方法 郵便ハガキに、あなたの住所・氏名・年齢・電話番号・ご希望の賞を記入し、対象商品から切り取った応募券（コピー不可）を必要ポイント数貼って、下記宛先までご応募ください。

●宛先／〒102-8584　千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス
電撃文庫編集部「電撃文庫3000タイトル突破!!大感謝フェア」係

応募締切／2015年11月30日（月）※当日消印有効

キャンペーン対象商品の詳細は公式サイトをチェック!
http://dengekibunko.dengeki.com/3000/

※お一人様何口でもご応募は可能ですが、応募は必ず1枚のハガキにつき1口でお願いします。※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。※賞品について、譲渡・転売しないことを応募・当選の条件とします。※応募者の個人情報はこのキャンペーンの実施の目的のみに利用し、その他の用途には一切利用いたしません。※応募者多数の場合は抽選になります。　※応募・発送は日本国内に限ります。
※賞品は2016年1月以降発送予定です。

ヘヴィーオブジェクト 外なる神

BUN 3000 応募券 1ポイント（コピー不可）

ヘヴィーオブジェクト
外なる神

鎌池和馬

電撃文庫3000

ヘヴィーオブジェクト　外なる神

鎌池和馬

電撃文庫

3000

DENGEKI BUNKO

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI
イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO

結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィーオブジェクト HEAVY OBJECT

The Outer Gods 外なる神

INDEX

000010　序　章

000012　第一章
地獄の蕾が開く季
　　>>白海方面北極航路争奪戦

000104　第二章
すくすく育つ陰謀論
　　>>カリバ方面合同軍事演習

000204　第三章
咲き誇る第六の軍隊
　　>>ソベラニア方面動乱介入

000320　終　章

【メビウスインフィニティ】MOBIUS INFINITY

『資本企業』が運用する陸戦専用第二世代のオブジェクト。多国籍合同軍事演習『ギガントハスラー』に参加したオブジェクトの中でも突出して高い破壊力を持ち、『最も脅威の高い』機体と目されている。

球体状本体の背面上部に備えられた三門の主砲は、正面から垂直まで自由に角度を変える事も可能な超大型レールガン。推進装置は静電気式を採用しており、五つの輪を重ね、花弁のような形状を取る。

主砲の砲弾には姿勢制御用の翼があり、真上、超高高度まで射出した砲弾を『メビウスの輪』のようにターンさせる事で相手を頭上から撃ち抜く戦法を好む。レールガンの運動エネルギーと超高高度の位置エネルギーを掛け合わせたその一撃は、隕石の衝突実験にすら匹敵する破壊力を生み出す。

Designed by Hirokazu Watanabe(2725 Inc.)

HEAVYOBJECT
name/Milinda=Brantini
sex/female
place of birth/unknown
age/14
height/1.55m
weight/39kg
body size/79.56.80(cm)
hair color/blond
eye color/sky blue
class/First Lieutenant
belong/37th C.M.B
post/Elite
name/secret
sex/female
place of birth/
New York.Chesapeak
age/secret
height/1.63m
weight/48kg
body size/98.61.84(cm)
hair color/blond
eye color/brown
class/Captain
belong/Sky Dog(br)3rd C.E.B
post/Elite

HEAVYOBJECT
正統王国第三七機動整備大隊を指揮する上官
フローレイティア
「ようしみんな戦争だ!! 久しぶりに体を動かして溜まったストレスを解消する事にしよう」
オブジェクトの設計士を目指す戦地派遣留学生
クウェンサー
「だけどチャンスはいくらでもある。それなら、当たるまでやれば良い」
有名『貴族』の嫡男にしてレーダー分析官の不良系軍人
ヘイヴィア
「やれやれ。結局最後はギャンブルかよ」
本名不明、正体不明のホワイトハッカー
ヨグ＝ソトース
「だが、それにしたってこの方法は間違っている」
反体制勢力のコピー兵器工場を束ねる工場長
ニュースメーカー
「俺達には俺達の勝利があるんだ。極光冠の敗北を、『第六の軍隊』へと繋げてみせる」
『邪神』の名を冠する謎の諜報員
ニャルラトホテプ
「ウェルカムトゥザホーム。ようこそ、地獄と化したソベラニア方面へ」

俺は逃げない。
もうやるべき事は全て終わらせた。
今さら、『この先』を思い描くほどの夢もない。

―とある『邪神』の呟き―

HEAVY OBJECT
The Outer Gods
ヘヴィーオブジェクト
外なる神

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

ウィークリーミリタリーニュース・四月三日付特番『勃発！　ソベラニア動乱!!』

モニカ　「歌って殺せる戦場アイドルレポーターのモニカですっ！　今回はパナマ運河近郊で発生したソベラニア動乱について、専門家のお話を伺いたいと思います。軍事コメンテーターはもちろんこの方！　オブジェクトの戦術指揮によって数々の歴戦を制した元大佐にして解説のカリスマ、ミスター・キャサリーヌさんです！　ミスター!!」

キャサリーヌ「こんな淑女に向かってミスターじゃないわよ拳で顔面整形されたいの？」

モニカ　「うるせえケツアゴ眼帯無精ヒゲ。さっさと本題に入りましょう。今回、『資本企業』の侵攻作戦により正式に勃発したソベラニア動乱ですが」

キャサリーヌ「元々、ソベラニア方面はいわゆる空白地帯で、オブジェクトも保有していないわ。多数の第二世代を持て余している『資本企業』とケンカをしたってろくな事にならないのは目に見えているわね」

モニカ　「しかし、同方面は軍隊を持たない永世中立国で、それ故に大国側から侵略戦争を仕掛ければ、『資本企業』は国際社会から非難されるはずでした」

キャサリーヌ「ところが、ここ最近の調査ではソベラニア方面の中に秘密裡の訓練キャンプが発見されたとあるわね。しかも正規軍ではなく、ゲリラ戦やテロ活動、破壊工作などを得意とする、『安全国』への攻撃を企図した特殊コマンドのものだわ」

モニカ　「『クリーンな戦争』に逆行する流れですね。ソベラニア方面はパナマ運河に面している事から分かる通り、北上すれば『資本企業』の本国がある位置づけです」

キャサリーヌ「悪目立ちして臨検ですぐバレる戦術兵器より、無人のガススタンドで非人道兵器を作る腕を持つプロが浸透する方が怖い。本格的なテロ攻撃の前に『本国』を直轄管理する七つの巨大企業体、７ｔｈコアが直接掃討作戦を展開させる。……まあ筋は通っているけど」

モニカ　「けど？」

キャサリーヌ「そうなると、交通の要衝であるパナマ運河は誰のものになるのかしら。ただの憶測を話すのは良くないけど、この動乱、どうにもきな臭い匂いがするのよねえ」

モニカ　「おおっとう!!　まさかの陰謀論ですか!?　そういうのは視聴者がぐっと身を乗り出してきてくれますよ!!」

キャサリーヌ「……ま、陰謀のない戦争なんてありえないんだけどね」

モニカ　「期待した気持ちを返せ!!　このケツアゴ!!」

第一章　地獄の蕾が開く季節　〉〉白海方面北極航路争奪戦

1

「はっはっ」
短く、荒い呼吸が続く。
瓦礫に埋もれた街だった。屋根のある建物などとうになく、四方の壁を保っている構造物もまた希有なほど。最低限の『箱』としての形すら保てず、人類の失敗を示す記念のモノリスのように、一面、あるいは直角に二面ほど、壁だけが取り残された『元鉄筋コンクリート』だけが荒野に立ち並んでいる。
そんな場所を、クウェンサー達『正統王国』軍の兵士達は逃げ回っていた。
呼吸は完全に乱れ、まるで喉が渇いた犬のような吐息が続く。
「はっはっはっ!!　はっはっはっはっはっはっはっ!!」
背後から、建物の建材が崩れた事で発生する粉塵が入道雲のように迫る。しかし彼らは知っ

ている事を。
それこそ明らかに人間のものとは違う『光る眼』を持つ何者かが、大挙してこちらに迫ってきている。その見えざるカーテンの奥から、明確な『視線』が突き刺さるのを。尋常ならざる、
ガシャガシャガシャガシャ!!　という金属音が連続する。
その正体を知る者はいない。粉塵の中へ引きずり込まれた者は死ぬからだ。
ただ一つの例外もなく。
「ちくしょう……」
クウェンサーは飢えた犬のように舌を出しながら必死に走る。途中、足を止めずにプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を後方へ投げ捨て、無線機を使って起爆させる。
耳をつんざく炸裂音が発生したが、粉塵は晴れない。その奥にいるモノもまた、進軍を止めない。
「ちくしょう!!　何なんだありゃあ!?　明らかに人間を喰ってる……いや、卵を産み付けて苗床にしているぞ!?」
脅え、足がすくみそうになるクウェンサーの腕を、誰かがぐいっと引っ張った。黒い髪のイケメンが、耳元で叩きつけるように叫ぶ。
「足を止めるな!!　ランディングゾーンまで逃げ切ればヘリに拾ってもらえるんだ!!」
バタバタバタバタバタ！　と空気を叩く音がクウェンサー達の頭上を通過する。

『正統王国』軍の輸送ヘリだった。側面のカーゴドアは大きく開かれ、地上支援用のガトリング銃『クロコダイル』が突き出ていた。

無線機から悪友へイヴィアの怒鳴り声が飛んでくる。

『頭低くしたまま走れ!! 上から撃ち下ろすが、絶対に足を止めるんじゃねえぞ。遅れたヤツは拾えねえんだ!!』

ヴヴヴ――――――――――――――ツッツ!! という連続性を失った音の塊が撒き散らされる。可変ギアを切り替え、最高域である毎分八〇〇〇発設定で七・六二ミリ弾が粉塵の中で蠢く大量の影へと叩き込まれていく。

オレンジ色の火花で埋め尽くされた。

昆虫にも甲冑にも似た異形のシルエットはそれでも動きを止めない。

地上を走るクウェンサー達へと迫る。

大きな音や閃光は、それだけで人間を本能的に萎縮させる効果がある。落雷しかり、スタングレネードしかり。真上から撃ち下ろされる『クロコダイル』もまた、そうした効果が少なからずあった。味方からの援護射撃と分かっていても怯みそうになるクウェンサーの腕を、傍らのイケメンが掴む。引っ張る。引きずるようにしてなお走る。

視線の向こうに、不自然な蛍光ピンクの煙が立ち上っていた。

距離は二〇〇メートルほど。スモークグレネードで目印をつけた合流地点、ランディングゾ

ーンだ。すでに脱出用のヘリは待機していた。というより、機体が数十センチほど地面から浮かび上がっている。パイロットが恐慌状態にあるのか、完全な勇み足だ。置いていかれる。

その恐怖が、クウェンサーを突き動かす。走りながら両腕を大きく上に掲げて振る。

悲鳴と共に、すぐ後ろを走っていた兵士達が粉塵に追い着かれ、呑み込まれた。もう振り返っていられない。クウェンサーとイケメンはとにかく全力で走る。腰の高さほどある瓦礫へ身を乗り上げ、滑るように前へ。さらに駆け出し、どうにかこうにかランディングゾーンへ辿り着く。

「待てよ！　待ってくれ!!」

粉塵はすぐそこまで迫っていた。

そしてヘリは耐えきれないといった感じで離陸を始める。

クウェンサーとイケメンはヘリの最下部、接地脚を掴み、鉄棒のようにぶら下がる。ヘリは勢い良く上昇し、二人は命綱もなしに空中へ放り出される。その軍用ブーツの底を撫でるように、灰色の粉塵がランディングゾーンを埋め尽くしていった。

「何とか……なったのか？」

最初にイケメンが這い上がり、もたつくクウェンサーに手を貸して機内へ引きずり上げる。

瓦礫の街からは、同じように何機ものヘリが飛び立っていた。すぐ近くでは相変わらずヘイヴ

イアが身を乗り出してガトリング銃『クロコダイル』を撃ち下ろしている。

無線機から通信が入った。

『こちらウィングマスターより各機、熱処理ミサイル着弾まで二〇秒。機内から振り落とされたくなければカーゴドアを閉じるかハーネスで体を固定しろ！　衝撃に備えろ、炸裂するぞ!!』

標的を破壊するというより、空間そのものを圧搾するような、不気味な蠕動があった。

灰の一色で埋め尽くされていた地上部分が、別の色で塗り替えられていく。それは炎のオレンジ色だ。実に二キロ四方もの面積が爆炎に埋め尽くされていったのだ。

横風の煽りを受けた紙飛行機のように、クウェンサーとイケメンを乗せたヘリが大きく揺さぶられる。開きっ放しのカーゴドアから投げ出されそうになったイケメンの腕を、何とかしてクウェンサーが掴む。

「……終わった、のか」

半分機外へ身を乗り出したまま、イケメンは呆然と呟いた。

あまりの大爆発により、粉塵は消え去っていた。

所々に、黒ずんだ塊が散乱しているのが分かる。灰色のカーテンの向こうで蠢いていた『ヤツら』だ。その成れ果てだ。ヘイヴィアがガトリング銃を撃ち下ろすが、もう逃げ回る事もない。あれは完全な死骸だ。

それが分かって、ようやくクウェンサーは顎の辺りに溜まっていた汗を手の甲で拭った。
ひとりでに、笑みがこぼれた。
だが。
「ちょっと、待て……」
イケメンがぽつりと言った。
首の向きがおかしかった。誰も彼もがヘリから地上を見下ろして戦果を確認していたのに、彼一人だけが全く逆の……真上へ目をやっていたのだ。
直後に、全てを影が覆い尽くした。
まるで周囲一帯の地形全てが、大きな屋根で覆われたかのように。
そこにあったのは。
イケメンが呆然と眺めていたのは……。
「『ヤツら』の……母艦？」

2

四月。

戦争国・白海方面の大平原に、野太い中年男性の声が響き渡る。

「はいカ————————ッット!! だめっ、もう全然だめっ!! 全部最初からやり直し! 馬鹿じゃねえの、そこのエキストラ!! 主演より目立ってんじゃねえぞ!! 張り切ったってギャラは増えねえよ!!」

何を叫んだって肉声なんぞ届くはずもないし、どうせ全部無線機を通して意思疎通しているはずなのだが、映画監督のジェームズ=ハネムーンはメガホンに口をつけて叫び、メガホンをぶんぶんと振り回し、メガホンで近くにいた下っ端の助監督の頭を引っ叩き、とにかく一人で大忙しなのだった。

……ちなみに言うまでもないが、周りはみんな辟易している。

できるだけCGを使わずナマの演出でがんばるっ!! が信条らしいが、一回NGが出るたびに膨大な爆薬や煙幕を敷設し直さなくてはならないのだから、時間的にも金銭的にも労力的にも超々々大変なのだった。

適当な所に着陸した輸送ヘリから地面へ降りながら、クウェンサーは他の兵士達同様吐き捨てるように呟く。

「……というか全長一〇キロとか馬鹿じゃないの? そんなのもう有害物質しこたま詰め込んで大気圏からノーブレーキで突っ込んだだけで病んだ氷河期だっていうの……」

「おいよせよ」

別のヘリから降りてきたヘイヴィアが合流してくる。
「『軍の全面協力で映画撮影しています』なんてよ、どう考えたって戦時広報、上の上の上の上のお偉いさんの肝いりだろうぜ。下手に唾吐くと目に見えてるよりデカいもんにまでケンカ売っちまう事になるぞ」
なので、爆薬の敷設時もクウェンサー達『エキストラの皆さん』は休憩できる保証はない。やってもやらなくても税金から出る給料は同じなのに、延々と作業に付き合わされる羽目に陥る事もある。
「それだって『資本企業』だの『情報同盟』だのの映画ビジネスが猛威を振るい始めたせいで、『正統王国』が悪者になっちゃうって慌ててマスコミとかエンタメに窓口開放したんでしょ？　もう駄目、全然駄目。何が駄目って後追いばっかりしたって差は埋まらないっていうのが分かっていないトコが駄目！　先を読んで相手の道を塞ぐような『次の一手』を投じない限り、何やったって焼け石に水だっての!!」
「うっわ怖ええ、俺は唾吐いてねえぞー。お偉いさんとケンカして僻地に飛ばされるなら一人でなー」
ちなみにここ最近『安全国』のクイズ番組などで、罰ゲームとして若手芸能人が覆面で人相を隠した特殊コマンドに強襲され、ドアや窓からスタングレネードを投げ込まれるのも同様の理由である。

と、そこへ主演男優というか軍服が異様に似合わないキラキラでサラサラの黒髪イケメンが接近してきた。

彼は油性ペンを片手に、

「ふふふ子猫ちゃん達、そうカリカリしないでくれたまえ。どうだろう、ここは僕のサインに免じてモチベーションを上げていただくというのは」

「待って、これ官給品!!　バックパックに直接書くなよ、しかも油性!?　やだー、買い取りになっちゃうってー!!」

「……つーか、野郎相手でも子猫ちゃんって言うタイプかよ。俺は距離を取るぞー」

サインと聞いてあちこちに散らばっていた兵士達がわらわらと寄ってきた。なんだかんだで知名度のある俳優であり、ハプニング込みで『良い刺激』を演出する手腕にも長けているらしい。

どさくさに紛れて自分のサインを勝手に書き込んで怒られていたクウェンサーは、ヘイヴィアに向かってこう尋ねる。

「そういえばお姫様は?」

「相変わらずだよ。宇宙巡洋艦がオブジェクトを一発で吹っ飛ばすってストーリーボード眺めてからむくれっ放し。今も『ベイビーマグナム』ん中に引きこもってんじゃねえの?」

よそから見れば『名優と全面協力の兵士達が和気あいあいとしている』ように見えるのか、

大きなカメラを手にしたスタッフ達も寄ってきた。メイキング用の素材でも確保しようとしているのかもしれない。

「はい行きますよー、笑って笑って！　三、二、一」

……撮影されたその一枚は、のちに映画界の片隅で語り草となる『伝説』を残す。

何しろ笑顔の兵士達数十人が、まるで息を合わせたように中指を突き立てていたからだ。

3

「ちがーう!!　爆薬はただ一斉に吹き飛ばしゃ良いってもんじゃねぇんだ！　向こうから、こっち向けて、迫ってくる!!　だからウェーブを作るために着火時間にラグを持たせるんだっ！　何で説明しないと分からないんだ馬鹿ども、観客はすぐ気づくんだよそういうの!!」

年甲斐もなくぎゃーぎゃー騒ぐ監督の横では、フローレイティアもフローレイティアで頭を抱えていた。

実を言うと、彼女達第三七機動整備大隊はこうしている今も軍事作戦中である。破壊すべき目標は設定してあり、すぐにでもオブジェクトを差し向けて戦闘行動を取るべきだった。

場所は『正統王国』ボルガ方面と北欧禁猟区に挟まれた、戦争国白海方面。

冬の間はマイナス三〇度以下の吹雪に支配された凍土だったのだが、四月に入って状況が一

変してしまったのだ。
平たく言えば、雪解けによって一〇〇キロ以上、見渡す限り底なし沼のような泥濘地になってしまったのである。
……こうなると陸戦、海戦でフロートを換装する『ベイビーマグナム』の静電気式推進装置としてはよろしくない。戦車や装甲車をずぶずぶ沈めるほど深い泥沼をどうやって乗り越えるか。今はその『待ち』の時間なのだ。
（とはいえ、黙ってくつろいでいると監査部がうるさい。国民の血税使ってお花見でもしてんのかって言われるのは面倒だ。……だから重要度の低い懸案事項の消化係を押し付けられたんでしょうけど……）
「大体ね、軍の全面協力なんていうのは付加価値なんだよ」
体型の割には神経質そうな口調で、映画監督のナニナニさんは呟いている。
「予約特典とか季節限定とか、初恋とか処女とかと一緒。あくまで底上げなんだ、そもそも商品ができなくちゃ話にならないんだ。それを、何で、こう、こんな所で、足を引っ張られなくちゃ、ぶつぶつ……」
「あーこいつ殴りたい」
「はい？」
いえいえ、とフローレイティアは顔面の全筋肉を駆使して笑顔の形をキープする。

イメージ戦略の一環として『軍は良い人なんだよ☆「正統王国」は正義の味方だよ☆』というう鳥肌モノの情報操作を行う国策だというのに、ここで大暴れして余計なエピソードをつけたら台無しだ。だからフローレイティアはモデルのように尻を振って歩き、コンパニオンのように笑顔を作って、背筋を伸ばして胸を張ってややバストを強調しなくてはならない。……情報将校から三日三晩かけて本作戦の合理性について説明を受けていなければ、今頃この中年オヤジはヘリからロープで逆さに吊るされ、泥濘地を引きずり回されていたはずである。

と、情報端末から呼び出し音が鳴った。

画面を見ると、どっかの『安全国』でゴルフでも嗜んでいらっしゃるであろう少将サマからだった。

『あー、平和ボケに付き合わされる気分はどうかね？　私なんかは議会で年中そんなのばかり相手にさせられている訳だが』

「殺すより活かす方が難しいという教訓を得ています。ええ現在進行形で」

『平和は尊く、その維持にはたゆまぬ努力が不可欠だ。軍人が決して忘れてはならない初心というヤツだな。そこで爪と牙を抜いてニッコリ笑顔でネクタイを緩めてブラウスのボタンを上から三つまで外し、監督さんのご要望通り胸を寄せてカメラの前に立てる忍耐力まで獲得できれば、君も「戦場に出ない高級軍人」への道が開くかもしれんのだがね』

「僭越ですが、ぶっ殺すぞサー」

『はっはっは、やはり君は現場向きだなあ。ではお勉強の時間もそろそろ切り上げても良いだろう』

「と、おっしゃいますと？」

『君達から提案されていた、例の「打開策」だがな。……承認された。キリの良いところで作業を中断して次の現場に向かえ。戦争が待っているぞ、少佐』

思わずフローレイティアはキリッとした顔で敬礼していた。

「愛していますサー」

『はっはっは、そいつは少々気安いな。あと半世紀若ければときめいたかもしれんが』

「奥方にそうお伝えしておきますサー」

『君は七〇過ぎた老人の本気の泣き顔を見たいのかね？』

4

「ふう……」

お姫様は『ベイビーマグナム』を整備用の巨大設備の中へゆっくり入れると、エレベーター状のトンネルを潜(くぐ)ってコックピットごと外へと飛び出す。

整備兵達がすぐにでもわらわらとオブジェクトへまとわりつき、余計な映画撮影(さつえい)でさんざん

こびりついた泥や煤を専用のノズルから放たれる高圧液体洗剤で落としていく。
全天候・全環境に対応したマルチロールの第一世代なのでちょっとやそっとで不具合を起こす事もないのだが、わざわざ本物の戦争の前にエラーが起こる可能性を〇・一%でも残しておく必要もないのだろう。
そしてお姫様より一段下の整備用足場では、ブシュワアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!　という炭酸飲料を数百倍に膨らませたような轟音と共に、クウェンサー＝バーボタージュが全身泡まみれになっていた。
「……なにしてるの?」
「なぶあっ、ちょ、これ、どぶやって止みぇびゃぶわあああああああああっ!?」
お姫様はタブレット端末片手にあちこちへ指示を飛ばしていた婆さんの方へ目をやったが、特にクウェンサーを助ける気もないらしい。戦地派遣留学生に任せられる仕事はやはり『あってもなくても構わないレベル』のものに限られるのだろう。
なのでお姫様も気にしない方向にした。
「ああもう、シャワーでもあびたい……」
操縦士エリートの纏う特殊スーツは優れた防刃・防弾効果を持つ他、高度な体温調節機能なども有する。砂漠も密林も南極もこれ一丁、というのだからその凄まじさが分かるというものだ。……ではあるが、そこはそれ、やはり気分の問題というものはきちんと残る。

と、そんなお姫様の声を聞いていたのかいなかったのか、
「ばるもるがるべるぼるどるむるぞる⁉」
「ぶふっ、ちょ、クウェンサー⁉」
右に左に飛び回る暴れん坊ノズルを押さえきれなくなったクウェンサーの手から、大量の泡立ちが階上のお姫様の方にまで襲いかかってきた。
顔へもろに真っ白な泡を喰らって視界をやられたお姫様は咳き込みかけるが、そこで足元の感触がつるりと消える。
そのまんま球体状本体の表面を滑り落ちる。一段下のクウェンサーへと激突していく。
揉みくちゃになってクウェンサーは金網状の床の上へ押し倒される。
「えほっ、けほっ」
「もがっ……お姫様、あぐ、ちょ、これ……」
傍で見ていた整備兵の婆さんが目を剝いて『馬鹿野郎‼　戦争を終わらせるつもりか⁉』と叫んでいたが、当の本人達はそれどころではない。
第一に、尻餅をついたお姫様の臀部がクウェンサーの顔を下敷きにしていた件。
第二に、ラブコメ時空と違って人間一人分の全体重を頭蓋骨に受けると人はどうなるのかという件。

危うく鼻の穴から脳髄が出るとこだった、とクウェンサーはのちに語る。
だが今は大量の鼻血の原因を誤解されないよう努めて説得せねばフルボッコ送りかもしれないのをどうにかするのが先決なのだった!!

5

「ようしみんな戦争だ!! 馬鹿ども、頭を使う愛想笑いには疲れただろう。久しぶりに体を動かして溜まったストレスを解消する事にしよう」
会議室に多くの兵士達を集め、檀上のフローレイティアはそう切り出した。
背後の壁一面に、プロジェクターで地図が表示される。いくつもの光点が追加され、それらを矢印が繋いでいく。
「今回の目標はオブジェクトの撃破ではない。この白海方面の深部で発見された、反体制勢力のコピー兵器工場を破壊する。サイバー攻撃だの色仕掛けだのであちこちの軍から漏洩された兵器技術が、ここで具体的な形に整えられて各国のテロ組織に流れている訳よ。『凍土の虎』『ウッドストック』『裏切りの使徒』……まあ、取引先はそうそうたる顔ぶれね。あまり派手にやらかしたので上から目をつけられた、というのが正しいかもしれんが」
いくつかの兵器の写真や図面が出てきた。……が、それを眺めている戦地派遣留学生のクウ

エンサーの顔色は特に変わらない。拳銃、アサルトライフル、手榴弾、携行ロケット砲……。『安全国』の都市部なら大事件を起こせるだろうが、オブジェクトの開発に繋がりそうなものはなさそうだった。

「現在、四月の雪解けでこの白海方面の大部分は深い泥濘地と化している。ざっと一〇〇キロ四方。背後は北極海だが、新航路については世界的勢力間の利権が絡み過ぎて手を出せない。下手をすると別の戦争を呼びかねないって訳。従って、今のままでは『ベイビーマグナム』は進軍できない。これが一番の問題ね。泥濘の深さを鑑みれば、戦車や装甲車も使い物にならない」

暇なので、クウェンサーは手を挙げてみた。

「なら、攻撃機や爆撃機でも飛ばせば良いのでは？」

「そうしたいのは山々だが、あちこちに散らばってる光点を見ろ。この紫色のヤツよ」

言いながら、フローレイティアはペン型のレーザーポインターでプロジェクターの画面を指した。紫色の光点は三〇から五〇はありそうだった。

「こっちの動きに気づいた工場側が、倉庫の肥やしになっていた兵器類をヘリに吊って、泥濘のあちこちに降ろして配備しているらしい。いわゆる高射砲だな」

小さなウィンドウが追加される。

動画ファイルの中で蠢いているのは、幌のない中型軍用トラックの荷台にボルトか溶接で半

ば無理矢理取り付けられた、全長四メートル、直径一二センチ程度の巨大な金属円筒とゴチャゴチャした台座だった。斜めに大空へ突き付けられたその砲塔は、『物騒なレッカー車』のような印象を与えてくる。

クウェンサーは眉をひそめて、

「深い泥にこんなの置いたって、すぐに沈んじゃうんじゃあ？」

「木材で井桁を組んで、無数のポリタンクを縛り付けて浮力を確保しているらしい。砲撃した途端にひっくり返るリスクもあるが、元々正規軍ではないからな。正しい兵器の扱い方なんて知らないんでしょう」

フローレイティアは煙管を咥え直しつつ、先を続ける。

「この高射砲、狙いは甘い……というか、まともな照準装置がないと言っても過言ではないんだが、弾頭部分はサーモバリックだ。平たく言えば直径八〇〇メートルを爆炎が埋め尽くす。旧時代のＡＢＭのようなものだな。大雑把にバカスカ撃つだけで、航空機は全滅してしまうという訳ね。面を埋め尽くす攻撃だと、飽和攻撃なんかで無理矢理乗り越えるのも難しいだろうな」

「……巡航ミサイルとか弾道ミサイルでも？」

「ＡＢＭ相当と言っただろう、マッハ五だろうが八だろうがアウト。狙って当てると言うより空一面に巨大な壁を作って敵機に正面衝突させる方がイメージは近い。実を言うと地対地ミ

サイルに凝固剤を積んで空中散布し、泥濘地を固めてオブジェクトを通行させようとしているんだけど……どっちみち、このサーモバリック高射砲『ラフレシア』を沈黙させない限り道は開けない」

今度はヘイヴィアが発言した。

彼は引きつった笑みを浮かべながら、

「いやいやいや。直径八〇〇メートル大の爆炎を生み出すサーモバリックをバカスカ打ち上げるんでしょ？　そんなもんで狙われたら、近づく前に消し炭にされちまうって……」

「幸運な事に、高射砲『ラフレシア』は射角制限があって水平射撃はできない仕様よ。曲射についても想定された機構じゃないはず。井桁とポリタンクで浮かべたトラックの荷台に固定してあるから、砲身を水平にして台座をグルグル回すと運転席にぶつかるし。ただ、不用意に近づくと自爆紛いの最後っ屁を喰らうリスクはある。よって、一つ一つの高射砲は狙わない」

新しい矢印が増えた。

「全ての高射砲は中央からの電気指令で発射される。高射砲の周りにいるのは弾込め係と周辺警備だけね。よって、途中の高射砲は無視して、中央の兵器工場へ向かってもらう。携行ミサイルの一斉射撃で指揮車両を吹き飛ばせば、砲は止まるの。後は凝固剤を山ほど積んだ地対地ミサイルが泥濘地を固めてくれる。オブジェクトの大掃除が始まるぞ」

底なし沼のようになっている広大な泥濘地は、戦車や装甲車では進めない。泳いで進む訳に

使えばスムーズな移動が可能となるはずだ。
もいかない。だが、例えば空気の力で船体を浮かばせる、水陸両用のエアクッション船などを
「ちなみに」
フローレイティアはさらに付け足した。
「このコピー兵器工場に、最近合流した重要人物がいる。通称はヨグ＝ソトース、本名は不明。激化するサイバー攻撃に対抗する形で電子シミュレート部門の人員増強を図った際に紛れ込んできたホワイトハッカーだが、実は『資本企業』の工作員ではないかと『黒軍服』の調査対象リストに載った人物よ。ヨグ＝ソトースが最後に接触していたのは、無影爆弾の図面だった。こいつがコピー兵器工場で組み立てられると状況は厄介になる」
「無影爆弾？」
聞き慣れない単語にクウェンサーが眉をひそめると、フローレイティアは新たな資料を表示させる。
直径三メートルほどの、真っ黒なサッカーボールのような形状の兵器だった。
「原理は簡単。ヘリウムを詰めた巨大風船に爆弾をくくりつけて空に飛ばす。姿勢制御は可能である程度のレーザー誘導もできるが、主動力はない。基本的には風に乗るだけ。ただし外殻には高度なステルス加工が施されているため、レーダーなどには表示されないのよ。目視による確認、なんて簡単にすり抜けられるしね。主となるエンジンがついていないって事は、熱源

を探知する事もできないし……」

やれやれ、と彼女は軽く頭を振り、

「つまり極めてゆっくりとしか進めないが、確実に防空網を潜り抜ける爆弾って事ね。これに、さっきのサーモバリックを搭載されると、『安全国』への直接攻撃のリスクが高まる。そうなる前に、そんなカードをちらつかせられる前にケリをつけたい」

第一の目標はサーモバリック高射砲『ラフレシア』を束ねる指揮車両の爆破。

第二の目標はコピー兵器工場に合流したハッカー、ヨグ＝ソトースの撃破。

「ヤツらも居場所の割れたアジトにいつまでも籠るつもりはないでしょう。逃走防止のために北極海を押さえたいが、あそこは利権が複雑で思うように掃海も進まない。資材や商品を運ぶ時に使う潜水艇にでも乗り込まれたら雲隠れは必至。計画が前倒しされたのについても、期限が迫っているからだと思ってくれて結構よ」

ヨグ＝ソトースは二〇代前半くらいの女性だった。ハッカーという世界において、これが若輩なのか年配なのかはクウェンサーには判断がつかない。

もう一人、重要人物として軒を連ねているのが工場長。『ニュースメーカー』などと記載されている中年男性だ。本名がないという事は、何度か顔を整形したり、死亡を装って身分を消したりしているのだろう。当然、やましい事をしない人間には必要のない歩みだ。その過程でどれだけの人間が血を流したかは想像もしたくない。

「工場長ニュースメーカーとヨグ＝ソトースの個人情報は渡すが、生け捕りは無理に狙うな。ボーナス欲しさに命を落とすのも馬鹿らしい。上からの小言は私が引き受ける。身の危険を感じた場合は、各個の判断で殺害しても構わん」

「……いやに弱気ですね。何かあったんですか」

「よせよクウェンサー、月に一度のあれに決まってんじゃねえか」

先端にオレンジ色の火を灯す煙管を投げつけられたヘイヴィアはその場でのた打ち回った。

無視してフローレイティアは答える。

「例のハッカー様のおかげで、上は絶不調だ。北極圏をカバーする衛星監視網が軒並み妨害されてて使い物にならない。おそらくクローン衛星だと睨んでいるが、電子シミュレート部門が原因を特定、無効化するまでには時間がかかる。つまりチェス盤を上から眺める目が使えないのよ」

「クローン衛星、ですか？」

「ハードウェアクラックの代表例。軍事衛星の近くに似たような周波数の電波を使う衛星を寄り添わせて、単純に通信を妨害したり、こちらの信号を傍受したり、逆に不審な信号をこっそり混ぜたりする。おそらく四〇センチ四方の小型民用衛星に擬態させて、『資本企業』辺りのエレベーターを使って軌道上に投下したんでしょう。……簡単に言えば、画面上の光点はあてにならないって訳。さっきの高射砲の位置も『概算』だ、常に現場でも観測を怠るな」

鬼ごっこやかくれんぼにおいて、上空からの支援のあるなしは結果に雲泥(うんでい)の差をもたらす。深い泥濘(でいねい)に足を取られ、広大な交戦区域に隠れる標的を虱潰し(しらみつぶし)に捜すのは確かに骨が折れるだろう。捜索(そうさく)が全て終わる前にタイムアップとなり、標的が雲隠れしてしまう可能性も高い。もちろん、功を焦(あせ)れば思わぬ不意打ちを受けるリスクも高まる。

「一応、参考までに。その生け捕りボーナスっていうのは何なんです？」

クウェンサーが慎重に質問すると、フローレイティアはあっさりと白状した。

「そうね、私の一存で叶(かな)えられる範囲だとすると……三段重ねのハンバーガーと山盛りのフライドポテト、炭酸飲料にチキンナゲットのセットかな？」

「もう死ねって命令してくださいよ今すぐに!!」

……味のない石鹼(せっけん)みたいなレーションばかり喰わされている兵士達にとって、それは死んでも生け捕りにしろと命令しているようなものだった。

6

そんな訳で。

退屈で退屈でストレステストの一環だったんじゃねえのかと疑いたくなるほどの映画撮影協力を切り上げ、クウェンサーとヘイヴィアの馬鹿(ばか)二人は戦場へ放り出されていた。

一〇人ワンセットで小型のエアクッション船に詰め込まれ、ドロドログチャグチャの泥濘地の上を疾走していく。

一面が茶色い泥で埋め尽くされている割に、特有の腐ったような匂いはあまりない。春先の雪解けとはいえ、やはり活動する微生物の数は少ないのかもしれない。

「……上から見るとそんなに大した事なさそうなんだけどなあ」

「よせよ、干潟どころの話じゃねえぜ。どぷんと浸かったらそのまま一気に胸の辺りまで沈んじまう。間抜けな話だが、足一本突っ込んだら自力で這い上がるのは無理だろうな。汚ねえ泥の中で死ぬのは悲惨だぜ。微生物が寄りつかねえから、ピラミッドのミイラより奇麗なまんま取り出されて博物館にでも飾られるぜ」

見ろよ、とヘイヴィアは親指で適当な方向を指した。

見渡す限り、地平線の向こうまで茶色い泥で覆われた平面のあちこちに、明らかに人工物と思しき直線的な突起がいくつもあった。あった、というよりは、沈んでいた、という方が近いか。それはこの泥濘地を無理に横断しようとした戦車や装甲車、またはその乗員を助けようとしたトラックなどの成れの果てだ。

車輪や履帯が見えているものは一つもない。

ひどいものになると、かろうじて金属製の屋根が覗いているだけの場合も珍しくない。いいや、本当の最悪はきっと、完全に泥の中へ沈んで、発見すらできない車両だろう。

「雪道なんかと一緒でさ、タイヤを動かしている内は滑らねえんだ」

ヘイヴィアは、ここが北極圏である事を忘れてしまいそうなくらい生温い風を頬に受けながら言った。

「だから安心すんだ。聞いていた話と違うじゃん、俺らならやれるじゃんってな。そんで中ほどまで進んで、ちょーっと方向転換とかで速度を緩めた瞬間に沈み始める。『正統王国』軍側かコピー工場側か知らねえが、こいつはかなりの命を呑み込んでやがるぜ」

クウェンサー達が乗っているエアクッション船は一隻だけではない。四〇から五〇もの船体が、大きな逆V字を描く形で編隊を組んで泥濘地を通過していく。

空も空で狂っていた。

ただでさえ精神に重たくのしかかるような分厚い雲。そこに明確な異物があった。数百、いや数千。見渡す限り、直径数メートル大の球体がふわふわと浮かんで、壁やカーテンのように灰色の空を埋めていたのだ。一つ一つにデカデカと描かれた目玉のマークが、より風景のサイケ度を増している。

クウェンサーはうんざりした顔で、

「……あれが問題の無影爆弾ってヤツなのか……？」

「一通り自分の頭使ってから質問しようぜ。見りゃ分かんだろ、ただの球体じゃステルス性なんて微塵もねえ。技術転用で量産した阻塞気球ってヤツじゃねえのかな。単純に爆弾つきの風

船だ。航空機やミサイルの行動の自由度を奪って、その隙間から高射砲で攻撃する。天空の壁ってヤツさ」

ヘイヴィアはむしろ、敵のやり口に呆れているような口調だった。

「二万五〇〇〇とか三万メートルとか、超高高度から偵察だの爆撃だのをやらねえ訳だぜ。あいうタイプの航空機は高さを稼げる代わりに小回りが利かねえからな。爆弾だらけの大空に突っ込んだら回避もできずに風穴を空けられちまう」

ふうん、とだけクウェンサーは答えた。

オブジェクトが出てきたり、コンビナートにあるような巨大機械が出てこない限り、彼のメカ心（笑）は滾らないらしい。

陸も空も奪われた閉塞感満点の戦場で、『学生』は呑気に言う。

「これって何のための戦争なんだっけ？」

「北極航路。地球温暖化で白熊が絶滅するかしねえかの瀬戸際だっつーのに、そいつをビジネスチャンスと睨んだ馬鹿者達のお祭り騒ぎってヤツだ」

「ようは、新しい航路だの海底油田だの開発基地にするために、邪魔者を一掃しましょうって話なんでしょ。……でもこれ、ゲリラだのテロリストだの掃討した程度で何とかなるの？どっちみち、この泥じゃ資材も重機も沿岸部に運べないような気がするんだけど、港の整備なんてできるのかなあ」

「こんなトコに本気で港を作る気はねえだろ。テロリストは軍人じゃなくて犯罪者だ。面と向かって『民間人』をオブジェクトで皆殺しにするってのも言葉が悪い。だから目的をすり替えてんだろ、せっかくの新航路を大量の機雷で汚染されるリスクを潰せりゃ何でも良いのさ」

ちなみに北極航路にご執心な『安全国』ボルガ方面は、この戦争国に駐留する『情報同盟』のオブジェクトを蹴散らすために大部隊を派遣している。向こうにとってこんな作戦は脇道で、いちいち本気を出すのは面倒臭いが、脇腹を刺されるのも厄介だ、くらいにしか考えていないはずだ。

「……結局今回も雑用係か。まったく、オブジェクトの出てこない戦場なんて出て行って何の得になるんだか……」

「周辺警戒だよクウェンサー。そのくだらねえ雑用で死にたかねえだろ」

「この状況で襲撃？　どうやって？　この泥の中じゃ兵隊は歩けない、サーモバリック高射砲『ラフレシア』は射角制限があって水平射撃はできない。戦車や装甲車も泥の中。ほら、これなら相手だって……」

言葉は最後まで続かなかった。

バゴッ!!!!!!　と。

いきなり、泥に沈んで擱座していたはずの戦車の砲口から火が噴いたからだ。

「うわあ⁉」

「くそっ、まだ生きてやがったか⁉　いやこれは……」

　エンジンを噴かす。三基もの巨大なプロペラがエアクッション船を強く押し出し、擱座した戦車の横をすり抜けていく。

　正確に捕捉するように。

　装甲車の上部に取り付けられた機関砲や戦車の砲塔が、予想以上に滑らかな動きでこちらに狙いを定めてくる。

「……アクシデントでこうなったんじゃねえ！　最初っからこういう砲撃陣地だったんだ‼　くそ、これじゃ三六〇度全方向から狙われちまう‼」

　爆発音が炸裂し、すぐ隣を走る別のエアクッション船がオモチャのように宙を舞った。一〇人の兵士達が泥の上へと叩きつけられていく。躊躇し、引き返し、回収している余裕はない。クウェンサー達も現在進行形で照準されている。

「スモーク‼」

　ヘイヴィアの叫びと共に、バシュシュッ‼　とエアクッション船の側面からジュースの缶ほどの大きさの円筒が一〇から二〇ほど、扇状に放たれた。それは空中で小さな爆発を起こし、不自然なくらい真っ白な煙の壁を作り出す。キュパッ‼　と綿菓子のような壁をまとめて引き

裂くものがあった。狙いを逸らされた戦車砲の砲弾だ。
そうしている間にも、ヘイヴィアは肩に提げていた携行式ミサイルの準備を進める。
横からクウェンサーは叫んだ。
「俺は何をすれば良い⁉」
「できる事がなけりゃ丸まってろ‼」
怒鳴りながら、ヘイヴィアは発射筒を肩で担いで照準を覗き込む。
泥の中に半ばまで沈んだ……いいや、自らの意思で『沈めた』戦車の砲塔もまた、ぐるりと回る。
発射は同時だった。
まず初めにクウェンサー達を乗せたエアクッション船が大破し、横倒しに泥の中へと突っ込んでいく。遅れて着弾したミサイルの爆風が戦車の内部にまで食い込み、車内を炎で埋め尽くす。何トンもある砲塔全体が冠水時のマンホールの蓋のように、真上へと浮かび上がった。
「がァあああああああっ⁉」
クウェンサーには、いちいち確認している時間はなかった。
口の中いっぱいに鉄の味が広がる。ずぶりという柔らかい感触が全身を包む。投げ出された体は、すでに腰の辺りまで泥の中へと沈んでいた。下半身はまともに動かない。どれだけ腰をひねっても、腕を振り回しても、たったの一歩分の移動さえままならない。

しかも、こうしている今も確実に体は沈み続けている。
冗談抜きに、頭のてっぺんまで埋もれて窒息死するかもしれない。
「く、そ……何か……!!」
闇雲に腕を振り回し、そこで指先が硬い感触を捉えた。
エアクッション船から剝離された外殻だ。ホテルなどにあるサイドテーブルくらいの大きさの、複合素材の板だった。
どうにかして手繰り寄せ、両手の掌を板に押し付ける。『沈まない取っ掛かり』を得る。腕立て伏せでもするように、無理矢理に体を真上へ引っこ抜き、上半身を板の上へと乗り上げる。
ボディボードのような格好で、腕と足を使って泥をかき、何とか前へ移動する。
「ヘイヴィア！　それにみんなも!!　何でも良いから浮き輪の代わりになるものを見つけろ、じゃないとそのまま沈んでいくぞ!!」
その声を聞いて、泥の上へと投げ出された兵士達もばらばらと動き始めた。エアクッション船の破片、折れた枯れ木、用途不明なポリタンクなどなど。あちこちに落ちていたものを使って、何とか浮力を確保していく。
クウェンサーと同じようにボディボードにも似た動きで泥の上を進むヘイヴィアは、無線機に向けて叫んでいた。
「データリンクの支援を!!　まだ動く戦車とガラクタを熱源で選り分けてください！　後は

オブジェクトからの砲撃も……ライフルの照準情報渡せば長距離砲撃だってできるでしょう⁉」

『クローン衛星のせいで天空の目は使い物にならない！　各個の判断で撃破しろ‼』

「くそったれ、それを何とかするのがアンタ達の仕事だろうが‼　現場じゃ今も砲弾が飛び交ってんだぞ！　一発でも当たりゃ俺らはバラバラだ‼」

『支援要請に欺瞞信号を突っ込まれた場合、お前達の頭の上にお姫様の主砲が落ちてくるのよ。それでも良いのか⁉』

　周りの兵士達はエアクッション船から浮き輪の代わりとなる装甲板などを毟り取りつつ、それに乗って泥をかき、戦車や装甲車の陰へと逃げ回る。だがその盾すら信用ならないのだ。すぐにでも砲塔がぐるりと回るかもしれないし、リード線をつけた砲弾が車内で遠隔起爆されるかもしれない。

「ヘイヴィア、ヘイヴィア！　ないものねだりしても状況は変わらない。俺達でやれる事をやるしかないんだ」

「この状況でどうしろってんだ⁉　この泥ん中にどれだけ装甲車両が沈んでやがると思ってる。こっちはミサイルも撃っちまったしよ‼」

　こうしている今も、少し離れた場所ではエアクッション船が泥の中の装甲車から銃撃されたり、返す刀でガトリング銃『クロコダイル』の斉射を浴びせたりしている。クウェンサー達

は砲撃陣地の奥深くへと誘い込まれている状態なのだ。正面からはもちろん、真横や真後ろから戦車砲を撃ち込まれるリスクさえある。一ヵ所に留まっていて良い事は何もないだろう。

「ムツゴロウの気持ちだ……」

「くそったれ、これでも俺は『貴族』だぜ？　砲弾飛び交う戦場で泥かき分けて進むなんて絶対間違ってる……。もうちょっと、こう、スキー板でも履いて優雅にお散歩とかできねえのかよ」

底なし沼にはまるよりは全然マシだが、それでも、這いずる形で自分の体重を引きずり回すのはかなり堪える。粘度のせいか匍匐前進よりずっとキツい。

「……つーか、どこまで行くんだよ？　あっちもこっちも戦車だの装甲車だらけだろ。自力で動き回る事はできなくたって、武装も装甲もそのまま生きてやがる。両手で持てる火力だけじゃ太刀打ちできねえぞ」

「ヘイヴィア、アサルトライフルは使えるな。銃口に泥が詰まって暴発、なんて間抜けなオチはやめてくれよ」

「銃弾で装甲兵器を抜けってのか!?」

「違う。火力は空にあるんだ」

「あん？　ついにビキニアーマー装備のジャンヌダルク様でもご降臨なさったか!?」

「……ヘイヴィア、俺は真顔でビキニアーマーとか叫ぶ人はあまり信用しないようにしている

んだけど、『貴族』ってみんなそういうものなの？」
うんざりしたように『学生』は言う。
「あの、気持ちの悪い目玉の群れ」
クウェンサーはうつ伏せになったまま、真上を指差した。
「阻塞気球だっけか？　爆弾つきの風船が数百数千って浮かんでいるんだ。あれを落とせば爆弾の雨が降る。そして戦車も装甲車も一番脆いのは上部だ。……携帯端末で布陣をダウンロードしろ。衛星は危ないから端末同士を直でリンクして、ひとまず実測の報告を結びつけた分だけで良い。味方の位置、気球の位置、戦車や装甲車の位置。味方だけを外した上で、気球と装甲兵器に重なる所を撃ち抜いて落とすんだ。後は少しずつ範囲を広げていこう」
「確かに、目玉の布陣はランダム性が高い。数万メートルから五〇〇メートルくらいまで。ものによっちゃあ普通のライフルで落とせるものもあるかもしれねえ」
ヘイヴィアはごくりと喉を鳴らして、
「だけど爆弾は運任せで落ちてくるんだぜ。風の流れだの空気抵抗だので真っ直ぐには落ちてこねえ。そう簡単に爆弾の雨を浴びせる事なんかできんのかよ」
「ああ、一発二発で狙うだけなら、きっとホールインワンより難しい」
クウェンサーは小さく笑って、
「だけどチャンスはいくらでもある。それなら、当たるまでやれば良い。一〇〇発落とせば一

回くらい当たるだろ。俺達は、最低限味方の上に落とさなきゃ良いんだ」
「やれやれ。結局最後はギャンブルかよ」
吐き捨てるように『貴族』は言った。
それから、
「……なら、負ける道理はねえわな。こちとらカード勝負なら成金野郎から別荘奪うくらい訳はねえんだしよ」

7

ドガドガドガドガッ!!　という爆発音が連続した。
双眼鏡で確認するだけでは分からない。だが薄っぺらな液晶画面を覗き込めば分かる。明確に阻塞気球の数が減っている。合わせて、地上では擱座し放棄された戦車や装甲車に偽装した砲撃陣地から悲鳴のような報告が立て続けに送られてくる。
傍受した軍用無線の信号は暗号化されており、その内容までは分からない。だが飛び交う頻度は飛躍的に増しており、こちらに向かってくる軍が酷く高揚しているのは窺えた。
まるで、突破口を見出したような。
たった一つのアイデアへ、アリのように集団が群がっていくような。

「予想の通りだ」
ニュースメーカー。世界中のテロ組織やゲリラ集団が盗(ぬす)んできた情報に物理的な形を与えて再配布するコピー兵器工場のまとめ役たる中年男性は、低い声で吐き捨てるように呟(つぶや)いた。
「春の泥濘(でいねい)には救われたが、倉庫の在庫をばらまいた程度では『正統王国』を退けられん。計画通りに進めるぞ。稼いだ時間で『フライングフィッシュ』はどれだけ整備できた？」
専門分野においては頑固でこだわりを持つ、しかし一般に公開されている風貌(ふうぼう)よりはずっと優しげなその男は眉間(みけん)に似合わない皺(しわ)を多数刻んでいた。
身に着けている服装もまたこの工場で生産した軍服ではあるのだが、そうと分かっていても、工場用の作業服のように見えてくる。本質的に、人を傷つけて何かを奪う人間ではないのかもしれない。
「四八基(き)です」
答える部下もまた、線の細い文学青年といった出(い)で立ちだった。
「残りはロケットモーターの調整が間に合いません。液体燃料の注入が終わる頃には『正統王国』軍が到着してしまいます」
「それだけあれば十分な混乱に突き落とせる」
「サーモバリックも駄目(だめ)でしたが……」
「分かっていた事だ。うちの技術力じゃ二〇発に一発起爆(きばく)すれば御(おん)の字だ。それを悟られない

ように芝居を続けてきたんだろうが」

高射砲『ラフレシア』もまともに機能する状態ではなかったし、核地雷のようにサーモバリックを工場の周辺に敷設できなかったのもそのためだ。たとえ二〇発に一発でも、実際に爆発すれば多くの兵士が死ぬ。だが『失敗を伴う』という情報が敵方に洩れれば、相手は間違いなく楽観論に現実逃避し、そのまま突撃してくる。バリケードとしては機能しない。

「ロケットモーターは？」

「もちろん出撃機については万全です」

「なら大丈夫だ、それ自体が威力を生む。サーモバリックにこだわる必要はない」

ニュースメーカーは、わずかに沈黙した。ロケットモーターを抱え込む事の意味を、そこから導き出されるであろう結果を、少しだけ考えた。

やがて、

「志願者のリストアップも終わった。俺は『取引先』の情報を完全に消してから合流する」

「ニュースメーカー」

横から、やや低めのトーンの声で、女性が声を掛けた。

既製品の、白地に蛍光ピンクのスキーウェア。北極と聞いてそのイメージだけで選んできたのだろうが、明らかに服選びを失敗しているのは額の汗を見ればすぐに分かる。長い金髪を無理矢理にニット帽の中に押し込んだその女性は、見るだけなら女子大生か、新入社員のような

印象があった。
　実際には違う。
　ヨグ＝ソトース。『正統王国』軍のホワイトハッカーであり、同時に『資本企業』の諜報機関に属している工作員だ。
「ここまでしてもらう必要はないよ。元々、できる範囲での協力をお願いしていたはずだ。もう、明らかにその範疇を超えている」
「潜水艇が沿岸に到着するまで、まだ三〇分はかかる。時間を稼がなくてはならん」
「だが、それにしたってこの方法は間違っている」
　彼女はゆっくりと背後を振り返った。広大なスペースには、全く同じ型の『兵器』が数十も並べられていた。
　戦争の時代に生まれ、多くの兵器の技術情報に触れてきたヨグ＝ソトースからしても、それは異質の一言に尽きた。おそらく、実際に仕事場で組み立ててきた工員達にしても同じだろう。本心から『あんなもの』に乗りたい人間なんているはずがない。
「ニュースメーカー、君には教えたはずだ。心理作戦の本質は恐怖の増大であって、殺しはそのための手段に過ぎない。こだわる必要はないんだ。社会不安を増大させて行政機能を麻痺させられるなら、ビルの壁やガードレールを大量のシールで埋め尽くしたり、マンションのドアにスプレーで意味深な落書きを繰り返すだけでも構わない。君達がこれからやろうとしている

事は、明らかに非効率を極めている」
「だが阻塞気球に目玉を描くくらいではヤツらは止まらん」
「いや、効果は出ているよ。心理作戦は、当人が思っているよりも深いところで作用するものなんだ。これから段階を踏んで彼らの心を揺さぶり続ければ、流血なく部隊を混乱で壊滅できるはずだよ」
「悪いが、もう砲撃陣地の方では犠牲が出ている。一線は越えているんだ」
ニュースメーカーは静かに答えた。
それが意図して感情を押し殺しているのは、誰の目にも明らかだった。……おそらくは、口に出している当人を除いて。
「ドラマや映画を思い浮かべてみろ。喜怒哀楽、最も人の心を刺激するのは人の死だ、嘆かわしい事にな。敵が死ねば嬉しい、病弱の娘が死ねば悲しい、主人公が死にそうになれば恐怖する、ヒロインが死にそうになれば怒りが湧く。……オールマイティに、全てを誘発できる。そして今求められているのは即効性だ。多少分かりやすいくらいがちょうど良い」
「しかし!!」
「ヨグ＝ソトース。お前さんは港湾部に向かって迎えの潜水艇を待て、そのための時間は俺達で稼ぐ。その頭の中にある機密情報は、俺達のガラクタ工場なんかじゃ再現しきれなかった。もっと使えるヤツと合流しろ。それで世界は大きく変わる。変えられる」

「……」

こんなはずじゃなかった、と彼女は心の中で呪った。

彼らの目的は分かりやすい。思想としてはいわゆる北極圏由来の緩衝派。ステンドグラスのように砕け散った世界地図は、あやふやな紳士協定が破られれば即座に『戦争国』と『安全国』の垣根が消失する危険な状態だ。担保となるのは『だって、それで数十年も大丈夫だったから』に過ぎない。だから両国の間に明確な緩衝地帯を設けて、大都市が直接戦場になるリスクを少しでも減らそう。そういう平和的なものの見方ができるはずの集団だった。

……もっとも、『大国』側からすれば、緩衝地帯を設ける事で利用可能な土地が狭まる事、緩衝地帯を行き来する犯罪組織が勃興すると大量の武器や麻薬が流入し、また人身売買の中継地点に利用されるおそれがある事などから現実的ではないの一言で切り捨てられているが。

両者の主張は迎合せず、そうなれば抑圧される側は言葉を超えた手段に頼るしかなくなる。

雲隠れをするために、踏み台を設ける必要があった。だからヨグ＝ソトースはその見返りとして、彼らに『殺しに頼らず切り札を構築する方法』を教授した。

ヨグ＝ソトースの技術情報は彼らの手に余るのは分かっていた。実用化できる兵器はほとんどない。だが『高度な軍事機密情報を持つ人物と接触した』事自体が、彼らの格を一つ上げる。後は情報の操作によって、流血なく強力な交渉カードを持つのに繋がるはずだった。ハッタリ、という無視のできないカードを。

それだけだった。

なのに。

「分かっているさ」

中年のニュースメーカーは、自嘲するように小さく笑った。

「だが結局、こんな方法を選んじまう。これしかなかったんじゃない、数ある山札の中から、この一枚を選んじまう。どんなに言葉を重ねたって、俺達もまた薄汚れたテロリストに過ぎなかったって訳だ。平和主義のお前さんとは住んでいる世界が違う」

「ニュースメーカー……」

「ここじゃ色んな武器を作った。それを世界中にばらまいた。呑気な『安全国』は混乱したが、どうにもしっくりこねえ。裏方に徹する方が安全で確実だって、頭では分かっていてもな。どうしても、胸の辺りにスッと落ちてくれねえんだ。世界を変えると嘯きながら、自分自身で矢面に立たなかったって事がな」

それは彼の本心なのか。

あるいは、意識的に切り替えられる、恐怖を抑え込むための戦闘思考の一つか。

「お前さんは生きろ。ここでくたばるのはもったいない」

会話はそれだけだった。

打ち切られた。

ヨグ＝ソトースは明確に一本の線を引かれ、分厚いガラスのようなもので空間を隔(へだ)てられる感覚がした。ニュースメーカーは背を向け、『兵器』の方へと歩いていく。もはや届かないその背中が、大きな声で宣言する。

「我らは極光冠(きょっこうかん)！　北極圏(けん)とそこに連なる北半球の平和と安寧(あんねい)を願う者なり!!」

第一陣。

異質極(きわ)まる兵器の搭乗者(とうじょうしゃ)達に向けて、首謀者(しゅぼうしゃ)として男の声を聞かせる。

「我らはここで散ろうが、その行いは各地に沈む潜在的(せんざいてき)同志を『第六の軍隊』として確実に突き動かす起爆剤(きばくざい)となる。我らは決して一人ではない。ならば前を向け。まだ見ぬ仲間のため、既存の五つに囚(とら)われぬ第六の枠(わく)を提示する事で、彼らに明日への道を切り開くぞ!!」

まるでファストフードのハンバーガーのように分かりやすく、そして内部に得体のしれない熱を持った声明を耳にしながら、ヨグ＝ソトースは居並ぶ『兵器』の群れへ改めて目をやった。

フライングフィッシュ。

ロケットモーター搭載型エアクッション船。戦闘機(せんとうき)も弾道(だんどう)ミサイルも手が届かなかった彼らが、有り合わせの設計図をツギハギして生産した、時速八八〇キロで地上すれすれ数十センチの所を滑走(かっそう)する悪夢の兵器。

主な武装は、二〇ミリの重機関銃(じゅうきかんじゅう)と八〇ミリの多連装ロケット砲(ほう)。

そして……。

8

クウェンサーとヘイヴィアが頭上の阻塞気球を撃ち落としにかかると、周りでも似たような動きがあった。空から爆弾の雨が降ってくる。……時には『正統王国』の兵士まで吹き飛ばされそうになったが、それで泥の中に沈めてあった砲撃陣地のほとんどが壊滅してしまった。

運良く残った少数については、携行式のミサイルなどを撃ち込む事で対処している。

「負傷者はひっくり返ったエアクッション船の方に乗せろ。エアクッションだ！　戦車だの装甲車だのの残骸の方に乗せると砲弾の誘爆に巻き込まれちまう!!」

ヘイヴィアは装甲板の残骸をボディボードのように腹で押さえつけながら、あちこちに向かって叫んでいた。

似たように泥の上で浮力を確保していたクウェンサーは、うつ伏せのままやや遠くに目をやる。

「……思ったより早く終わるかもしれないな」

視線の先には、立ち上る黒煙があった。

クウェンサー達が狙っていたのは戦車や装甲車などだったが、あちこちに落下した阻塞気球の爆薬は、サーモバリック高射砲『ラフレシア』の方でも被害を拡大させているようだった。

あれが使えなくなれば、巡航ミサイルを飛ばせる。
空からばらまかれた凝固剤は速やかに泥濘地を固く締め、『ベイビーマグナム』に通行証を与える。そうなれば後はパーフェクトゲームしかない。
そんな風に考えていた時だった。
異様な音が響いてきた。
「なんだ……？」
車やバイクのエンジンとは違う。もっと甲高い、笛のような音。耳をつんざく高音域の爆音に顔をしかめたクウェンサーは、地平線の向こうから、横一列に並ぶ複数の影がちらつくのを確かに見た。
そして、確認した時にはすでに間近に迫っていた。
速い。
ゴッ!!　と、空気の塊を伴う編隊が、彼らのすぐ横をすり抜けていった。一瞬遅れて両耳に激痛が炸裂し、肺を無理矢理膨らませたような鈍い痛みが胸の中からじわじわと広がる。
「ぎゃあ!?」
「ちくしょう……！　何なんだあのゲテモノ、エアクッション船か!?」
方角から見ても、明らかに工場側の兵器だろう。
だがクウェンサー達を素通りした。ヤツらの目的は別にある。

「フローレイティアさん!!　阻塞気球のせいでレーダーは光点だらけかもしれませんが、その下を何かとんでもないのが走り回ってる。おそらく狙いは整備基地ベースゾーンだ！　迎撃準備を!!」

無線機に向かって叫んでいる間に、第二陣が来た。

渡り鳥の群れのような、Vを逆さにしたような一列。そのエアクッション船に重機関銃や多連装ロケット砲などの兵器が搭載されているのを見て、『正統王国』軍兵士達の間に、驚き以外の明確な恐怖が宿る。向かってくる敵に対し、アサルトライフルやグレネード砲を突き付ける者もいた。

幸い、相手はただ真正面から突っ込んでくるだけなので、莫大な速度に反して狙い撃つのはそう難しくもない。

爆発があった。

ただし大きい。大き過ぎる。せいぜい『手榴弾をもっと遠くに飛ばす』くらいしか考えられていないグレネード砲では絶対に起こせないほどの、派手な爆発があった。花火大会の事故のように、数十メートル単位で爆炎が、さらにその外側まで衝撃波が席巻する。

うつ伏せになり、装甲板を腹で押さえていたはずのクウェンサー達まで大きく宙へ浮かされ、底なし沼のような泥の上へと叩きつけられていく。

「ばァ、がっ!?　……どういう、事だっつの？　誘爆でも起きたってのかよ……」

「くそ、違うぞ、これは、何かが違う！　くそっ!!」

とにかく体が沈んでいくのを避(さ)けるため、近くにあった枯(か)れ木を掴(つか)みながら、クウェンサーは泥だらけの顔で吐(は)き捨てるように言う。

遠方でバラバラに散らばったエアクッション船の残骸(ざんがい)の方へ目をやる。

湿(しめ)った泥の上に落ちても、なおオレンジ色の炎を残す残骸。爆発しそうなものはいくらでもあった。弾薬(だんやく)に、ロケットモーターの燃料。だが頭の中でどう整理しても、安定性が低すぎる。武装されたエアクッション船には不要な、わざと安全を欠いた構造だった。ジグソーパズルの中に、明らかに違うものが混じっている。

「嘘(うそ)だろ、おい……」

「どうしたんだよクウェンサー」

「冗談(じょうだん)じゃないぞ。ヤツら、こんな馬鹿(ばか)げた兵器を実戦投入してきたっていうのか!?」

9

クウェンサーからの報告も、整備基地ベースゾーンの大型ドップラーレーダーの補助を受ける必要もなかった。

『ベイビーマグナム』のコックピットに乗り込んで待機していた操縦士エリートのお姫様は、

すでに戦況の変化をモニター越しに捉えていた。
地上、あるいは極めて低空から、高速で迫る敵影あり。
第一陣は八機。第二陣は一〇機編成。
『少し早いけど仕事の時間よ。動きから見ておそらくミサイル。こちらを直接狙ってきた敵機を落としてちょうだい』
「りょうかい。ベースゾーンからは出ず、このままげいげきする」
簡単な仕事だった。
元々、第一世代のオブジェクトは核ミサイル攻撃に対処する事を前提に組み上げられた機体だ。マッハ五、マッハ一〇、あるいはそれ以上。空中で数十発に分裂する弾道ミサイルを残さず迎撃する事が『最低条件』とされた『ベイビーマグナム』にとって、たかが旅客機並の速度で進む物体が両手の指で数えられる程度迫ってきたとしても、何の問題にもならない。
球体状本体から外側に向けてびっしりと取り付けられた、ウニやイガグリのような対空レーザービーム砲が、静寂のままに絶大な破壊をもたらしていく。
地平線、五キロの範囲が絶対的な壁と化した。
だから、余裕ができた。
それが災いした。
（……こんなのでおしまい？　だとしたらひょうしぬけなんだけど……）

的確に向かってくる物体を撃ち落としながら、同時に小さなウィンドウを開いて、自分が破壊しているものの分析にかかったのだ。それは掃除の時に棚の裏のホコリを眺めるような、『好きでやっている訳じゃないんだけど、何となく気になる』程度の気持ちでしかなかった。

そして知った。

「……え……？」

相手は誘導チップに書き込まれた〇と一のデータに従って突っ込んでくる無人兵器ではない。GPS信号の通りに地形をなぞるだけのミサイルではない。

それは、ある程度の武装を施したエアクッション船だった。後部に無理矢理ロケットを搭載する事で、馬鹿げた速度を維持しているらしい。

本来なら剝き出しのはずの船体上部に、即席のキャノピーが追加されている。圧倒的な烈風から人の身体を保護するためのものだ。

つまり。

人が。

乗っていた。

爆発の規模を鑑みるに、それはただの兵器ではない。腹の中のロケットモーターを利用して、

整備基地ベースゾーンのバリケード、あるいは敷地内まで突っ込んでから起爆する事で最大のダメージを与えようとしているはずだ。
用途としてはミサイル。
一緒に搭載されている重機関銃や多連装ロケット砲は本命ではなく、あくまで針路を妨害する者を排除し、できるだけ標的にエアクッション船自身を届ける確率を高めようとしているものに過ぎない。
だとすれば。
彼らが差し向けてきた兵器の正体は。
「……有人……ミサイル？」

「くそっ!!」
オブジェクトの整備場で、薄型のタブレット端末を睨んでいた整備兵の婆さんは盛大に毒づいた。
音声通信機能のボリュームをゼロまで落とす。
コックピットからダイレクトに伝わるお姫様の声は、もはや声の域を超えていた。耳をつんざく絶叫が延々と続いていて、こちらからの会話に応じる余裕もないらしい。

婆さんは整備基地ベースゾーンの中央にいるフローレイティアと連絡を取る。
「そちらでもバイタルは確認しておるか!?　明らかに精神面で混乱が見られる。未だに嘔吐していないのが不思議なくらいじゃや。このまま長引けば迎撃の精度に関わる。押し切られて突っ込まれるぞ!!」
『原因は特定できた。工場側が使っているのはおそらく手製の有人ミサイルよ。お姫様のチャートじゃあ想定していないのね』
……甘い、と考える人もいるかもしれない。
何にしたって戦争は戦争で、オブジェクトは戦争の象徴で、一度動けば大勢の人間が死んでいく。だったら、今さら銃を抱えて走ってくる歩兵も、有人ミサイルに乗り込んだパイロットも変わらないではないか、と。
ところが、そうではない。
全然違う。
「戦場で殺す者は、皆、自分なりの理由や言い訳を構築して人を殺しておる。それが意識的であれ、無意識的であれな」
婆さんは苦い顔で呟いた。
古い戦争では、殺せと命じられてもライフルを構えて引き金を引くふりをしていた兵士達も珍しくない。本当に、時代を遡れば半数以上の兵士達が人を殺す事を拒否した戦争さえあった

という。人が人を殺すというのは、それくらい難しいものなのだ。

「あの子は現代戦……いわゆる『クリーンな戦争』についてなら、綿密なフローチャートで全ての殺しを納得できる。そういう風に作り替えられておる。じゃが、逆に言えばスクリプトにないコードを目の当たりにすれば、そのままハングアップするぞ。街中で刃物を持つのと同じように、殺しの罪悪感で手が止まってしまう！　連中、フローチャートを意識した上で、目に見えないエフェクトを与えるために命を捨てにきておるぞ!!」

精密な機械は、想定されていない事態には対処できない。それがたとえ、どんなに些細な『違い』であったとしても。

死にもの狂いで、勝てないと分かって、それでも挑んでくる敵ならまだ理解できる。

だが、最高点が相討ち、そこに届かず落とされるのも覚悟の上、生きるためではなく死ぬために戦争する、という考えは処理できない。

だから、手が止まる。

実際には認識の違いでしかなく、両者ともに死を賭した戦いをしている事に変わりはないのだとしても。

片道切符というその作戦が、それを最上と考えてしまうほど人を追い詰めた『何か』があるという事実が、鋭い返しのついた釣り針のように人の柔らかい所に突き刺さり、いつまでも抜ける事なく痛みを与えてくる。

相手が旧式兵器に運命を託し、戦力差を鑑みずに突っ込んでくるだけなら、哀れと思う事もできただろう。
それが操縦体系を改修した無人機であれば卑怯者と罵る事もできただろう。
だが、これは違う。
何か、決定的な、直接的な被害よりも大きな傷を心に刻む。
(それにしてもヤツら、一体どこから資料を掘り返してきた。また儂の国のものではないだろうな……)
物理的に勝てない。
兵力差は圧倒的で、使っている技術も桁が違う。何を装備しても相手の懐には届かない。
だから、人の心に訴える。
心でもって、戦争に勝利する。
……それだけなら人類の良識にも聞こえるのに、ヤツらはここまで血みどろの方法に組み替えてきた。
殺しの罪を自覚させ、人の死を目の当たりにして、少女の精神を押し潰す作戦だ。
『ここで手を止められたら私達は全滅する。有効な手立ては？　お姫様が心を開いている一人として助言がほしい』
「周辺警備用の戦車や装甲車はあるな。とにかく全部そちらに差し向けろ！」

『彼らはレーザービームの代わりにはならない！　巡航ミサイルのように突っ込んでくるエアクッション船の迎撃を任せてもすり抜けられる！』

「一緒に戦っている、という図式を作るのが大事なんじゃ！　スナイパーがスポッターと組むのと同じ。みんなで責任を分散させれば、それだけ殺しの重圧も軽減できる。気休めでも何でも良い、とにかく今はバイタルを安定させろ!!」

所詮はまやかし。

形のないプラシーボ効果と似たり寄ったり。

どこまで効き目があるのかも、どれだけ続いてくれるのかも分からない、ぶっつけ本番の苦肉の策。

だが失敗すれば、明確な犠牲が出る。

有人ミサイル・エアクッション船に突撃を許し、整備基地ベースゾーンは壊滅してしまう。

「……これで最後だな」

ニュースメーカーは、工具片手に額の汗を手の甲で拭う。

危険なデータの詰まったコンピュータは全て破壊した。天井裏に隠していた紙の資料には火を点けた。残るは大型の工作機械の中に残っているデータ類だ。工場の大部分を占める鋼鉄の

塊をクレーンで運んで溶鉱炉に投げ込むのでは時間が足りない。ドライバーを使って蓋を開け、中の電子基板の中から重要なメモリを含むものだけを引っこ抜いていく。こればかりは、工場内の施設に最も詳しいニュースメーカーが直接行う必要があった。部下に任せて取りこぼしがあっては困る。

基板を板チョコのように二つに折る。

これで、男がここに留まる理由はなくなった。

彼は無線に口を寄せる。

「『フライングフィッシュ』はまだ残っているか？　俺も出る。これは絶対に必要な最後の仕上げだ」

ここにおいて、本当に重要なのは『正統王国』軍の整備基地ベースゾーンを破壊できるか否かではない。

というより、十中八九失敗に終わる。

たとえある程度の損害を出せたとしても、流石にオブジェクトが撤退するほどの事態にまでは持ち込めないだろう。

彼らの設定した目的は別にあったのだ。

「……このままで終わらせてたまるか。俺達には俺達の勝利があるんだ。極光冠の敗北を、『第六の軍隊』へと繋げてみせる」

10

有人ミサイル・エアクッション船。

その猛攻にさらされ、迎撃に駆り出されたお姫様の精神はガリガリと削り取られている。

フローレイティアの報告を受けたクウェンサー達の顔色が真っ青になる。

「正気かよ……。連中、『クリーンな戦争』の真逆に舵を切ってやがるってのか⁉」

「陸海空に、四番目の海兵隊。最近じゃ宇宙開発だのサイバー攻撃だのが第五の軍隊の候補に挙げられているけど、これはそんなもんじゃないぞ。さらにその先に行ってる」

諜報部門が得意とする、単なる情報戦とも違う。

士気の高揚や減衰、戦場ストレスの管理制御。それを攻撃的に突き詰めた戦術。

「……第六の軍隊。ヤツらは人の心の中にある『小さな宇宙』で戦う専門の部隊を作り上げたんだ」

『こちらでも負荷軽減策を講じているが、所詮は付け焼刃に過ぎない。一刻も早く工場を押さえて攻撃を中断させろ。お姫様の精神が崩壊したらお前達も帰る場所を失うぞ‼』

少し離れたところで、『正統王国』軍の兵士達が手を振っていた。どうやらひっくり返ったエアクッション船の中に、まだ使えるものがあったらしい。クウェンサー達は装甲板をボディ

ボード代わりにして、両腕で泥を掻いてそちらに進む。
軽量小型なのが幸いした。
深い泥濘の中で難儀したが、一〇人以上の力でひっくり返った船体を一八〇度元に戻す。ガトリング銃『クロコダイル』は泥まみれで使い物にならなかったが、まだ推進力となる後部ファンは動くようだった。
とにかく身を乗り上げ、船体を動かす。
規定人数オーバーの状態で、それでもコピー兵器工場を目指す。
「来るぞ、来る！　前方注意!!　有人ミサイル型のエアクッションだ!!」
「待て、撃つな、巻き込まれちまう!!　やり過ごして工場を目指すぞ。とにかく伏せろ!!」
ゴッ!!　と、暴風の塊のような兵器とすれ違う。
すれ違いざまに敵方の重機関銃が唸りを上げたが、向こうも最高速度・時速八〇〇キロオーバーで前進を続けているのだ。ろくに照準を合わせる事もできず、見当違いの泥濘をミシンのように縫うのが精一杯だった。
顔を上げ、後方へ振り返り、ヘイヴィアは呟く。
「……見たかよクウェンサー」
「ロケットのノズルに可変用の羽根はなかった、速度調節なんかできないんだ。一度点火したら月まで届く仕様だぞ」

ミサイルは実現できなかった。だからロケットモーターをエアクッションに積む。推力調整可能なロケットエンジンは完成しなかった。だから未完成のまま搭載する。見ているだけでボロボロで、だが、それがかえって剝き出しの人間性を突き付ける。デジタルに人の死を処理していく、そうやって殺人機械の歯車を司る『人』を守ってきた戦争のシステムを根底から覆す光景だった。

「こんなのは、もう戦争なんかじゃねえぞ……」

「元々、正規登録された軍隊じゃない。国際条約だって守らない。あいつらは、新しい枠組みみたいなものを作ろうとしているんだ」

敵方は整備基地ベースゾーンに狙いを定めているらしい。基地の破壊が目的ではなく、オブジェクトが迎撃せざるをえない状況を作るためだ。こちらの迎撃に回ってくる船体はほとんどない。

「おいおい、だとするとこりゃあ」

「やれる事をやろう。今から整備基地に引き返したってお姫様を守れる訳じゃない」

泥濘地が途切れた。

分厚いコンクリートの堤防のようなものをジャンプ台のように飛び越える。その先にあったのは、一面アスファルトで覆われた飛行場にも似た施設だった。ただし滑走路はないし飛行機もない。中央にサッカーの試合でもできそうな広大なスペースがあり、その周囲に港の倉庫よ

りも大きな構造物が建ち並んでいる。潮の香りがするのは、すぐそこに厳寒の海が迫っているからだろう。

クウェンサーとヘイヴィアは減速するエアクッション船から飛び降りた。硬い、安定した地面がある。世界のどこでだって当たり前のように信じられている常識が、これほど心強いものとは思ってもいなかった。

ヘイヴィアは泥まみれの手で携帯端末をいじくり、オフラインの地図を呼び出しながら、

「……ここにいるのは二〇人か。四人一組で班分けして、一つずつ施設を洗うぞ！　製造施設、倉庫、港湾地帯、居住区、後はアシの保持。エアクッションを失ったらこの工場から逃げられねえぞ。何が起きるか分からねえんだ、絶対に死守しろ‼」

「ヘイヴィア、製造施設と倉庫って区別がつくの？」

「頭に煙突がついてんのが工場だろ。どっちみち、全部調べるんだ。多少は間違っていたって構わねえ」

バタバタと慌ただしく兵士達は動いていく。

クウェンサーはとにかくヘイヴィアについていく事にした。

「なあヘイヴィア、さっきお前も言いかけていたけど……」

「ああ、静かすぎる。別に歓迎会なんか望んじゃいねえが、もぬけの殻ってのも笑えねえぞ」

工場はいくつかのセクションに分かれており、下町の町工場のような旋盤や工作機械の並ぶ

建物もあれば、溶鉱炉を備えたものまであった。全体的に手作業といったイメージで、ベルトコンベアとロボットアームで制御される自動車工場や半導体工場とはかけ離れている。危なっかしく、いつ大規模な事故が起きても不思議ではない印象がある。

そして、そこには誰もいなかった。

がらんとした空間にはまだ人のぬくもりや匂いが残っているようで、まるで奇怪な幽霊船のエピソードにでも巻き込まれたような気分にさせられる。

「……もうみんな逃げた後なのかな？」

「馬鹿言え、施設の規模を考えりゃ一〇〇人以上が生活していたはずだぜ。密輸用の潜水艇を持ってるっつったって、まさか大型のミサイル潜水艦を乗り回してる訳じゃねえだろ。犯罪組織が使うような民生品なら、二〇人乗れれば良い方だ」

「じゃあ」

「予想の通りだよ。もう全員出撃しちまったんだ！　『第六の軍隊』を気取って、あの有人ミサイルで!!　くそっ!!」

ドガッ!!　という爆音が炸裂したのはその時だった。

外からだ。寒さ対策のため二重になった工場の窓が衝撃波で粉々に砕け散る。耳を押さえて顔をしかめたヘイヴィアが叫んだ。

「今度は何だ、ちくしょう!?」

『すまない、例の高射砲を束ねる指揮車両を見つけたので吹き飛ばした。予想より爆発が大きくなってしまったが』

「あぁくそ、良いトコ取られた……」

クウェンサーは電気信管を収めたポーチを名残惜しそうに撫でながら呟く。

建物から表に出ると、黒煙が立ち上っているのが分かる。火元は六輪の装甲車の全面にテレビのアンテナみたいなのをびっしりと取り付けた車体らしい。

爆破を担当した兵士が、無線越しにややドヤ顔ボイスで話しかけてきた。

『これから倉庫の捜索に入る』

「おいおいちょっと待て、先発隊が全部やっちまうなら俺ら何でここまでやってきたんだ？ なら最初から基地で寝かせてくれよ!!」

ぐだぐだ言うヘイヴィアと一緒に倉庫へ向かいながら、クウェンサーは携帯端末をいじくった。すでに屋内へ踏み込んだ兵士達のヘルメットのカメラ映像を共有する。

学校の校舎が丸ごとすっぽり収まりそうなほど広いスペースは、無数の『商品』で埋め尽くされていた。中に収められている兵器は雑多だ。旧式の戦車や装甲車、山積みされたアサルトライフル、ゴロゴロと転がる砲弾類。組み立ての途中で放り捨てられたヘリコプターなんかもあった。試してみたものの、技術が追い着かなかったのかもしれない。

滑走路のように広いアスファルトの上を走りながら、クウェンサーは言う。

「所属勢力も技術レベルもバラバラ……。盗んだ図面を手当たり次第に複製していったって感じだな。一から技術を積み重ねたんじゃなくて、アリモノの図面に頼っていくとこうなるのか」
単にレベルが低いという訳でもないらしい。
例の高射砲に、サーモバリック弾頭。優れた兵器もひっくり返したオモチャ箱の中身みたいに放置されている。
「見ろよヘイヴィア、電磁パルス兵器まであるぞ。何年か前の兵器ショーで発表されて以来、音沙汰なしの試作品だ。一体どうやって図面を盗んできたんだ……？」
「おい、それって大気圏で核爆発を起こして一国の電子回路を丸ごと焼くってヤツじゃねえのか⁉　核弾頭とかじゃねえだろうな‼」
目を剝くヘイヴィアだが、クウェンサーは冷静だった。
いや、冷静なふりしてこいつもこいつで興奮し始めていた。
「このオブジェクトの時代に、間接的とはいえ核技術なんて採用される訳ないだろ。こいつはエレフィッシュとか呼ばれている天候兵器だ」
「天候兵器って……大仰な名前だけどよ、結局ドライアイスとか沃化銀とかじゃねえのか？　極端な温度差で気圧を変えたり、雲の密度を変えて雨を降らしたりよ。電磁パルス兵器と繫がりなんかあるのかよ」
「それがあるんだよ。こいつは雲の中に大量の金属箔をばらまく事で、自然界ではありえない

くらい連続的に雷を誘発させるとかいうヤツだ。確か、最大効率で二〇秒くらい持続放電するんだっけかな。落雷でも電磁パルスは発生するんだ」
「……二〇秒って、カップ麺もできねえぞ。そんなので軍用ネットワークを焼く事なんかできんのか?」
「ヘイヴィア。自然界に存在する雷は多重放電でも〇・二秒辺りが限界なんだ。単純計算で一〇〇倍。実際に生み出される電磁パルスの出力ならもっと上回る。雲の下、直径一〇キロ程度はサージ電流で半導体が全滅するらしいよ。スペック通りなら、送電、上下水道、都市ガス、テレビ放送、電話にネット、街一個分のインフラ全てを吹っ飛ばせる。電気のないエコな社会へようこそってヤツさ」
とはいえ、最新の軍用兵器では電磁パルス対策も施されている。ケーブルをシールドしたり、一部の半導体を真空管にしたり。『そもそも核の時代に完全勝利するために』設計されたオブジェクトなどが内部回路を焼かれる事はまずありえない。
『クリア』
『西の角もクリア!　センサーに反応なし!!』
携帯端末の画面の中ではそんな声が続いていた。やがて、複数のカメラが倉庫の中央の方へ吸い寄せられていく。
作業台の上にはたくさんのコンピュータが山積みされていた。それだけでなく、携帯電話か

ら何かの電子基板まで、片っ端から積み上げられている。
『全部壊されているぞ』
「復元は？　電子シミュレート部門だの諜報部門だのに回してみれば……」
『もちろん回収はするが、望み薄なのは変わらないな。中まで開けられて、溶鉄みたいなものを注がれている』
そんな中、一つだけ光を放っている液晶があった。先行した兵士達が掘り返すと、それは安物のノートパソコンだった。ディスクトレイやハードディスクはなく、フラッシュメモリに頼るタイプらしい。全体の大きさはハンドバッグよりも小さい。
「こいつが何？」
『今調べる。……中身はほとんど初期設定のままだな。新しく追加されたのはビデオファイルが一つだけ。すでにアクセスした形跡もあるようだ』
あちこちいじくり回し、画面の中の兵士はメディアソフトのスライダーを動かし、数分間あるファイルの要点だけを流していく。
携帯端末越しにノートパソコンの画面を覗く、というのも変な気分だった。
ビデオファイルは、小型のカメラを手持ちで撮影しているのだろう。
ぐらぐらと不安定に揺れる画面は、先ほども見た工場敷地内を映していた。違うのは、一面にロケットモーターを搭載したエアクッション船の列が並べられていた事だ。

『……我々は後世にマニュアルを残す。各地の泥濘に沈む潜在的同志の諸君、今日、ここで我々極光冠は時代の勝者たるオブジェクトへ新しい切り口で挑み、一定の成果を導く。そこから続くのはお前さん達の時代だ。我々の提唱する精神攻撃方法論「第六の軍隊」を存分に活用してくれ。諸君の正しい主張が、世界を正しく回してくれるはずだ……』

徐々に、事態が呑み込めてきた。

屋外で、クウェンサーとヘイヴィアは顔を見合わせる。

「まずいぞ。これ、もう配信されちゃったのか!?　有人ミサイル・エアクッション船の具体的な図面まで公開されているぞ!!」

「ここがもぬけの殻って事は、リーダー格の……何だったか？　ニュースメーカー？　そいつはどこ行った!?　そいつが手順に則って死んだらまずい。『第六の軍隊』が拡散しちまう。そのためのスイッチが入っちまう!!」

「有名人の死を美化されたら歯止めが利かなくなる。生きるための戦争から死ぬための戦争に切り替わってしまうぞ。食い止めるにはどうしたら良い？」

「そりゃ生け捕りにするしかねえだろ。具体的な方法は分かんねえけどよ!!」

勝つ必要はない。

オブジェクトと戦って、盛大に散ったという事実があれば良い。

その死は操縦士エリートのお姫様を締め上げ、精神的な破綻へと導く。その結果を受けた

『潜在的同志』とやらが効果を認めてしまえば、世界中のオブジェクトに対して同じ攻撃が繰り返される羽目になる。

　片道切符の超高速兵器。

『第六の軍隊』。配備されるのは、たらふく砲弾やロケット燃料を搭載した飛行機、車両、船舶。とにかくそうした旧式兵器類が、整備基地ベースゾーンと操縦士エリートの心を潰すために突っ込んでいく。

『いや、待てよ……』

と、携帯端末の中の兵士が何か言った。

『動画サイトへのアップロードの時間がおかしい。つい最近、数分前だ』

「自動送信設定って線は？」

『目覚まし時計はついていない。こいつは俺達がコピー兵器工場に辿り着いてからアップロードされているんだ。つまりニュースメーカーはまだ……』

　言いかけた兵士の言葉が途切れた。

　チュイイ……と。

　彼らの真後ろで、今まで背景の一部と化していたエアクッション船の兵装照準レンズが軋んだ音を立てたからだ。

11

ドンッッッバン!!!!!!　と。
クウェンサー、ヘイヴィアの見ている目の前で、倉庫真正面の金属製シャッターが爆炎と共に吹き飛ばされた。
「やべえ！　一度隠れろ!!」
ヘイヴィアが叫び、クウェンサーの腕を掴んで建ち並ぶ倉庫と倉庫の隙間へと飛び込んだ。
有人ミサイル・エアクッション船に取り付けられていた火器の内、ガトリング銃が大きく首を振った。
直後に掃射があった。
金属でできた倉庫の壁やフォークリフトなどが発泡スチロールのように崩されていく。馬鹿二人は地面でうつ伏せになり、両手で後頭部を守りながら、鉛の嵐が過ぎ去るのを待つしかない。下手に顔を上げる事すら敵わない。
「何だありゃ!?　例のニュースメーカーか！」
「大ボスは最後まで残っているのが相場だろ。それよりヘイヴィア、エアクッションのフロートは狙えるか？　風船をぶち破ればヤツの足を止められるはずだ。お姫様への突撃戦法を食い

止められれば『第六の軍隊』へ続く流れも断ち切れる！」
「冗談だろ……、どうせアラミドか何か織り込んだ防弾だって！　つーか今顔上げたら殺されちまう!!」
「ならミサイルは!?」
「ストックなんかねぇよ！　つーかテメェこそ爆弾投げろよ!!」
そうこう言っている内に、エアクッション船の後部に取り付けられた太い金属筒が火を噴いた。シュドッ!!　という爆音が発せられる。
慌ててニュースメーカーを背後から追撃しようとしていた『正統王国』の兵士の何人かが、それだけで数メートルも薙ぎ払われていく。
「くそっ！　行っちまった!!」
相手は、ほんの数秒で時速一〇〇キロを超えていた。
あっという間にコピー兵器工場の敷地を飛び越え、延々と続く泥濘地へ躍り出る。小さくなっていく点は、どう考えても生身の人間の足で追い駆けられるものではない。
ようやく倉庫と倉庫の隙間から開けたアスファルトへ顔を出しながら、ヘイヴィアはうんざりしたように叫んだ。
「どうすんだ、どうする!?　最高なら時速八〇〇キロで進む液体燃料と砲弾の塊だぞ。今から走ったって追い着かねえ。オブジェクト任せじゃ絶対に殺しちまう。攻撃を躊躇って整備基地

ベースゾーンに突入されたらそれこそおしまいだ。どっちにしろ『第六の軍隊』への道が開いちまう。ならどうすりゃ良い⁉」

「……、」

クウェンサーはわずかに沈黙した。

それから、ボロボロになった倉庫の群れをぐるりと見回す。

「ヘイヴィア、それにみんなも。動かせる重機はないか？　倉庫の中から高射砲を外へ引っ張り出したい」

「それでどうしろってんだよ⁉」

「さっきの一番乗りの連中の映像の中にあった電磁パルス兵器。あれは高射砲を使って撃ち出すためのものだ。エレフィッシュを雲の中に埋め込んで、有人ミサイル・エアクッション船の電子基板を焼くんだよ！　エンストを起こして止めてしまえば殺さずに確保できる‼」

弾かれたように全員が動き始めた。

高射砲は幌のない中型トラックの荷台に固定してあり、『物騒なレッカー車』のような印象を与える。とはいえ、倉庫で腐っている在庫にはガソリンなど入っていない。ヘイヴィアはわざわざ別のトラクターを持ってきて、二台の間をワイヤーで繋いで引きずり回す事にする。直径一〇センチ、長さ九〇センチもの砲弾は、クウェンサーを含めた五人がかりで抱えて運んだ。トラクターで砲ごと運び出せば良かったと気づいたのは後になってからだった。

誰もが混乱していたのだ。
「エレフィッシュは一発限りだ！　失敗したら全てを失うぞ!!」
「おい、だったらまずは通常弾頭で試し撃ちしようぜ。こいつの具合を確かめねえと!!」
高射砲を操作するため、トラックの荷台に飛び乗りながらヘイヴィアが叫び返す。
そこまできて、周囲にいた女性兵士がおずおずと話しかけてきた。
「……あのう。それで、問題のニュースメーカーってどこにいるか分かっているの？」
「ああくそ……」
基本中の基本を忘れていた。
ここは一〇〇キロ四方に届く超広大な泥濘地だ。『敵は工場から整備基地ベースゾーンに向かっている』という大雑把なルートは分かっていても、具体的な道筋は見えない。まだニュースメーカーは整備基地に届いていない事を祈るばかりの状態だ。
そして電磁パルス天候兵器エレフィッシュの効果範囲はおよそ直径一〇キロ程度。街を丸ごと呑み込めるほどの範囲だが、この広大な泥濘地を完全にカバーできるほどではない。
こればかりは、地上から観察したって分かるものではない。
クウェンサーは思わず無線機に口を寄せた。
「フローレイティアさん!!　衛星監視網の回復はまだですか!?　有人ミサイル・エアクッション船の中から個人を特定する必要があります。電子シミュレート部門は一体何をやっているん

だ⁉」
『待て……。そのインテリどもがようやく成果を出すところよ。上手くいけば天空の目を取り戻す事ができるかもしれん』
朗報だった。
衛星さえ使えれば、ニュースメーカーを殺さずにこの件を終わらせる公算も高くなる。

12

「待っていてくださいよ……」
整備基地ベースゾーンの中、年がら年中冷房の効き過ぎているその一角では、線の細い青年が舌なめずりをしていた。
「ようやく『クラスターブレイン』の使用許可が下りたんだ。ここから先は邪魔させません。逆に軍事衛星に寄り添っているクローン衛星のシステムに侵入して、大気圏で燃やしてやる」
分厚い軍服を纏ってなお、フローレイティアは肌寒そうに自分の腕を抱いていた。
苛立つが、この手の連中に体育会系の教育を施してもパフォーマンスが落ちるだけというのは経験で学んでいる。好きにやらせるのが一番効率的なのだ、遺憾な事に。
「それで、結論は？」

「『クラスターブレイン』は『正統王国』軍のサイバー作戦用に設けられた特別な高速サーバーなんです。ま、種を明かすと『安全国』でバカ売れしているスマホやタブレット端末の基幹OSにこっそり潜り込んでいる四五・五キロバイトのスパイウェアでもあるんですが。ざっと見て七億台以上の演算領域の余剰部分を並列化して解析作業に回しているんだ。バレると厄介だから使用許可を取りつけるまでが面倒臭いんですが、こいつを使えば」

「結論は？」

「どんな防壁も力技で突破できる!!　ほら出た!!」

液晶画面にいくつものウィンドウが次々と表示されていくが、びっしりと並ぶ英数字の列を眺めていても、フローレイティアには理解が及ばない。

功績を認められないと部署を縮小されると思っているのか、青年は必要以上に饒舌に語りまくる。

「クローン衛星の頭の中身ってヤツです。もうこれで電源を落とすのも、大気圏に突っ込ませるのも、コマンド実行者の追跡も思うがまま。さあ、どこから手をつけます？　このクソ野郎がご贔屓にしているサイトでも巡ってみますか。猫の飼い方でも出てくるかもしれませんよ」

「とにかく状況の回復が先よ。敵方に気づかれても構わん、全ての信号の送受信をカットしろ」

「了解、了か……」

言いかけた青年の笑顔が、そこで凍り付いた。

新たなウィンドウが画面を埋め尽くす。毒々しいほど真っ赤なテキストは、その方面に詳しくないフローレイティアから見ても『悪い報告』と分かるものだった。

「……嘘だろ、まずいぞ……」

「何があった？」

「ああくそ、特定できない、特定はできていないけど、きっとこれはクローン衛星の中にウィルスが仕込んであったんです！　最初っからこれが狙いだったんだ。クラッキング用のシステムを感染させて、そこからさらに『正統王国』の軍用ネットワークへと侵蝕を進めているんですよ!!　くそ、まずい、こいつは、そこまでやるか普通!?」

「二度も言わせるな！　何があった!?」

至近距離で叫ばれると、青年は観念したように白状した。

「今すぐ本部に連絡して、オブジェクトの緊急停止コードを変更してもらってください」

「なん、だって？」

「そいつもまとめてごっそり抜かれてる!!　急がないと『ベイビーマグナム』の動力炉が止まってしまいます!!」

ピピッ、という小さな電子音があった。

ヨグ＝ソトースと呼ばれるその女性はスキーウェアの上着のポケットから小洒落(こじゃれ)た端末を取り出そうとし、作業の邪魔(じゃま)をする分厚い手袋を取り外してから改めてポケットへ手を突っ込んだ。

画面を見ると、ようやくの成果が出てきた。

「『全てを知る者』に挑み、無謀(むぼう)にも深淵(しんえん)を覗(のぞ)き込む者、ことごとくその残酷(ざんこく)な真実を前に破滅(はめつ)するものなり。……『外なる神』に触(ふ)れる際(さい)の基本だよ」

クローン衛星、クラッキング用サーバーシステム、軍用ネットワークとラインを結ぶ事で、ヨグ＝ソトースの個人的なネットストレージの中へ次々と『正統王国』軍の機密情報が雪崩(なだ)れ込んでいく。

その中に派遣(はけん)された第一世代の緊急停止コードを認め、彼女はわずかに目を細くした。

（……もっと早くこいつに辿(たど)り着けていれば、流血なき結末で終わらせられたものを……）

本来であれば、泥濘地(でいねいち)に沈めた戦車や装甲車が『正統王国』軍を包囲攻撃した際に、クローン衛星経由でこれを手に入れるのが『最善』だった。

ところが、機転を利(き)かせた現場の兵士達は衛星の回復作業を待たずに突破してしまったのだ。肝試(きもだめ)しのような驚かしは失敗し、ニュースメーカー達は『当初の予定通り』有人ミサイルを使った精神戦術へと方針を転換させた。

どこで間違えた。

何を選んでいれば『最善』に届く事ができた？
「いや」
そこまで考え、ヨグ＝ソトースはかぶりを振った。
（今はそこじゃない。過ぎた過去を後悔するより、ここから何ができるのかを考えよう）
緊急停止コードは手の中にある。
有人ミサイル・エアクッション船フライングフィッシュはこうしている今も大挙して『正統王国』軍の整備基地ベースゾーンへ突撃を続けている。
向こうの頼みの綱は、オブジェクトのレーザー兵器網だろう。
逆に言えば、オブジェクトさえ停止してしまえば、彼らは爆轟の中に沈んでいく。人の精神へ強く作用する『第六の軍隊』の方法論は確立し、オブジェクト頼みの世界を切り崩していく。世界的勢力も同じ手を使うようになっていく。生きるための戦争から死ぬための戦争に時代が変わっていく。
こんな結末を止められなかった。
であれば、ヨグ＝ソトースにできる事は何か。
彼らの決意を無駄死にで終わらせないよう、鉄壁のオブジェクトを黙らせる事か。
「……、」
ヨグ＝ソトースは端末の液晶画面へ目をやる。

指一本で、歴史が決まる。

13

フローレイティアからの、金切り声のような通信があった。
全てを投げ出したいのはクウェンサー達も同じだった。
「おいおいおいおいおいおいおい!!　この局面でサイバー攻撃に抜かれるとかマジか!?　結局、衛星が回復しねえんじゃニュースメーカーの位置も特定できねえ。電磁パルス兵器だって宝の持ち腐れに終わっちまうぞ!!」
味方は頼れない。
ニュースメーカーを乗せた有人ミサイル・エアクッション船がどこにいるのかが分からなければ、彼を止める事もできない。
これで万事休すか？
軍の要となるオブジェクトの操縦士エリートの精神を狙った集中攻撃。有人ミサイルの有効性が認められ、後に続く者が出てくるのを止められないのか？
「……いいや」
クウェンサーは呟いた。

「フローレイティアさん、情報をください!! まだやれる事はあるかもしれない。あとそっちの! さっき、倉庫で見つけたノートパソコンは? 今すぐ持ってきて!!」

『学生』は仲間の兵士から手渡されたノートパソコンをアスファルトの上へ置く。自然と周りの兵士達も集まってきた。クウェンサーが特に注目しているのは、声明の後に表示された有人ミサイル・エアクッション船の図面の方だ。

(交渉材料を探せ。この中にあるかもしれない。目を皿のようにして見つけ出すんだ!!)

『クウェンサー、どんな情報が欲しい? こっちはこれから情報封鎖を行うから、しばらく軍用ネットワークへのアクセスが制限される。今の内にリクエストを言うんだ!!』

「もの自体は簡単です」

彼は短く答えた。

「ヨグ=ソトースの『正統王国』時代のアドレス。そいつを教えてくれれば良い!!」

ヨグ=ソトースは画面に表示された文字列を見てわずかに眉をひそめた。

罠の可能性が高い。

入念にチェックを施すと、彼女は音声通話アプリの呼び出しに応じた。

「誰だ?」

『アンタ、過去を引きずるタイプか？　もう使わないアドレスを残しているだなんてな。それともコンピュータの中身を整理している暇(ひま)もなかったとか』
「正統王国。会話を引き延ばしても私の居場所は逆探知できないよ」
『軍用ネットワークの中枢まで侵入を果たした凄腕(すごうで)相手にそんなの期待しちゃいないさ』
「なら何を望む？」
『ニュースメーカーを止めたい、もちろん生きたまま。そのために衛星監視網(かんしもう)を返してくれ』
「……、」
沈黙(ちんもく)した。
ニュースメーカー達の気持ちは痛いほど分かる。この世界において、オブジェクトを持たない者、それを持つ組織に与(くみ)する事が許されない者達がどれだけ圧迫(あっぱく)されているかも。
『正統王国』軍の気持ちも分からない事はない。事はもう自分達の部隊だけの話に留(とど)まらない。ここで手を誤れば、敵も味方も残らず流血に沈む時代が芽吹いてしまうのだから。
彼女は深く考え。
そして発言した。
「どうして私が協力すると考えた？　私の素性(すじょう)については理解しているはずだ」
『有人ミサイル・エアクッション船の図面を見た。コピー兵器工場の技術レベルだけじゃあれは作れない。特に操縦体系の電子制御の面は、ハードウェアの他にソフトウェアの問題がある。

優れた情報技術者がいないと初期設定もままならないはずだ』

「……、」

『アンタ、高度なステルス性を持った無影爆弾の図面を手土産にコピー兵器工場へ合流したんだろ。あれにはレーザーで誘導する機能があったはずだ。本来なら、その誘導チップを流用して安全な無人誘導兵器をプレゼントするつもりだったんじゃないのか？　ところがヤツらは完成を待たずに有人ミサイル兵器で満足してしまった。恩を返すつもりでどん底に突き落とす結果になったこの状況は、アンタにとっても予想外のものだったはずだ！』

「憶測だな。その良心を示す客観的な証拠はどこにもない」

『最初から有人兵器として組み上げたにしちゃ、余分なスペースや妙な回り道をする回線がいくつかあった。誘導チップを収めるとすっきりまとまるような箇所にな。こっちも技術者の卵なんだ。あの図面を見れば、どんな変遷があったのかくらいは読み取れる』

ヨグ＝ソトースは深く息を吐いた。

軽く眩暈を覚える。分厚い雲に支配された空を見上げる。

「……彼らにとって、何が幸せなのか理解が及ばない」

『ヤツらはそれで笑えるかもしれない。だけどあの結果が美徳に昇華してしまえば、あいつらの家族も子供もそのラインに乗るんだぞ。宇宙戦争やサイバー戦争さえ超越した、「第六の軍隊」なんて作るべきじゃない、表に出るべきじゃない！　そんなの、もう戦争が踏み込んで良

い場所すらはみ出ている!!』
彼女はその声を聞いていた。
その瞳は、いつでも画面を操作できる指先は、揺れ動いていた。
『頼むよ』
それは。
ほとんど泣き出しそうな声だった。
『頼むよ!! ニュースメーカーの掲げる転換期を止めるために、お前の力を貸してくれ!!』
時間はないだろう。
だからヨグ＝ソトースは一度だけ短く目を閉じる。
再び開いて、彼女はこう質問した。
「お涙頂戴の建前は良い。本音は何だ? どうしてそこまでしてニュースメーカーを止めたい」
『あのオブジェクトに乗っている操縦士エリートはな……』
言い淀みそうになり、それでも言葉を紡いでいく。
そんな返答だった。
『……気になる女の子なんだ。時代の転換期を作るのを手伝っただなんて、そんな風に教科書に載って欲しくない』
くそ、とヨグ＝ソトースは吐き捨てた。

こういう甘さが、デジタルに徹する事のできない感情面が、第三者から客観的に見ると無秩序に恐怖と混乱をもたらす邪神のように映るらしい事も、一応は自覚していた。

14

ピピッ、と。

小さな電子音と共に、クウェンサーやヘイヴィア達の携帯端末上の地図が更新された。瞬く間に情報が増えていく。いくつもの光点は整備基地ベースゾーンに突撃を続ける有人ミサイル・エアクッション船の配置であり、さらに光点一つ一つを精査した情報までもが併記される。流石に顔認識まではできなかったようだが、装備の充実度や編隊上で最も守られている船体の位置取りなどから、リーダー機を特定するのはそう難しい事ではない。

「クウェンサーちゃん⁉　さっきの通信何なんだ？　お、お前まさかお姫様をマジで落としにかかっ」

「きゃー‼　気になる、気になるだけだから‼　ていうかそっちに触れるんじゃないよこの局面でー‼」

ここで修学旅行の夜みたいな事をやっている内にニュースメーカーが突撃を済ませてしまったら元も子もない。

なんか色々言いたげな諸君だったのだが、今はとにかくトラックの荷台に固定された高射砲の方へ意識を集中させる。
「通常弾頭で試射をしている暇はなさそうだ。このまま電磁パルス兵器を詰め込むぞ!!」
「おいおいおい、今時、ハンドル回して手動照準なんてマジか？　そりゃ分厚い雲の塊へ大雑把に放り込むだけなら簡単かもしれねぇけどよ」
「ヤツは最後尾だ。いくらロケットモーターでも初速から最高速度に達するまで時間だってかかるだろう。距離は五〇〇〇から六〇〇〇。斜角は三五度がギリギリだから、今ならまだ間に合う!!」
「距離と初速を考えて時限信管を調整しろよ。雲突き抜けた後に砲弾が起爆したって意味はねえんだ!!」
「砲弾の装填確認完了!!」
「方位三二〇〇、仰角〇四一〇。雲の上でお昼寝している女神様のケツの穴にねじ込むぞ。口を開けて両耳を塞げ！　撃てぇ!!」
ッッッドン!!!!!!　という爆音と共に、砲から離れようとしていたクウェンサーは衝撃波でひっくり返った。
砲弾の大部分を構成していた発射装薬は砲身内部で完全に焼き尽くされ、ラグビーボールほどの弾頭がはるか彼方の分厚い雲目がけて突っ込んでいく、はずだ。自ら光を放つ曳光弾では

ないため、クウェンサーやヘイヴィアの肉眼では確認もままならない。

「……上手くいった、のか？」

誰にでもなく、クウェンサーはポツリと呟いた。

直後に、カッ‼　と凄まじい勢いで雲が爆発した。

自然界には存在しない、圧倒的な紫電の渦がそこにあった。

その時。

ニュースメーカーは、自らの頭上で猛烈な炸裂音が響き渡るのを確かに耳にした。ネオン管に塩水をぶっかけた時の雑音を一〇〇倍以上に増幅させたような、耳に障る轟音。分厚いキャノピー越しにロケットモーターの噴射音でもって音の世界を支配されていたはずなのに、その塊すらも打ち破って、奇怪な音の渦がニュースメーカーを襲う。

落雷はなかった。

あくまでも雲の中に留まる放電現象。だがその勢いが強すぎて、当の雲そのものを吹き散らしかねないほどだった。隕石が空中爆発でも起こしたかのように、頭上からの強烈な閃光がニュースメーカーの視界すら真っ白に塗り潰していく。

直後だった。

「なっ」

まるでスイッチを切ったようだった。

有人ミサイル・エアクッション船フライングフィッシュの全ての電子系統が一斉に動作不良を起こしたのだ。

どこか、プラスチックの溶けるような嫌な匂いが鼻につく。

それどころではないと気づいた。

制御不能になった船体はすぐには止まらない。ロケットモーターは火を噴き続けたが、泥の上に浮かばせるエアクッションの方がまずやられた。泥に沈み、徐々に減速しているが、舵を切れない以上は障害物も避けられない。自らが泥の中へ設置した戦車の砲塔へと、勢い良く激突した。その瞬間に分厚いキャノピーは砕け、身を守るためのシートベルトは金具の折れる音と共に吹き飛んだ。宙に投げ出された時点で、役立たずのベルトに締め上げられたニュースメーカーはあちこちの骨を砕いていた。

そのまま泥の上を何度も転がる。

沈む事も許されず、まるで河原で遊ぶ水切りのように何度も跳ねる。

もはや悲鳴を放つ力もなかった。

深い泥濘の上で、動きがやっと止まる。息を吸い込もうとするが、上手くいかない。極めて浅いところで止まってしまう。両足もまともに動かなかった。背骨か腰骨でも砕けたのかもし

れない。かろうじて、のろのろと片腕を動かすのが精一杯だった。
このまま泥濘の中に沈んで死ぬか。
それとも、ホルスターの中の拳銃を使うか。
(……どちらにしても、戦って死ぬ事は許されない、か)
逡巡は一瞬だった。
ニュースメーカーはホルスターから拳銃を抜くと、沈みつつある体も無視して、自らのこめかみに銃口を押し付ける。
(それでも、戦場の中で決着をつけてみせる。ここまで来て事故死なんかで終わらせてたまるか!!)
もはや個の活躍など望んでいない。
極光冠という集団が操縦士エリートに対し一定の成果を上げる事。その一部として戦死する事。それだけでメッセージは十分に機能する。『第六の軍隊』の創設へ大きく動き出す。
だから。
パパパパパン!!　というライフルの連射音が響いたのはその時だった。
ニュースメーカーの片腕を、巨大な電動ミシンの針を通すような破壊が埋め尽くす。拳銃を取り落とすどころか、肘から先をまとめて失った。呻くニュースメーカーは、それが輸送ヘリから身を乗り出した兵士からの銃撃とようやく気づかされる。

ホバリングする機体の左右から合成繊維製（ごうせいせんいせい）のロープが下ろされ、そこから完全武装の兵士達が降下してくる。

ヘリコプターの胴体（どうたい）に取り付けられたスピーカーから、女性兵士の声でこんな言葉が飛んできた。

『「全てを知る者」からの伝言よ』

配慮は少ない。

最低限生きて捕らえる事ができれば、時代の転換期を作るスイッチを切り替えずに済む、と考えているのだろう。

『あなたの思想には共感するが、あなたの行動には看過（かんか）できない。その思想は、平和的な手段でもって伝える事に意味がある、だそうよ』

15

「こっちだ、こっち」

データの流れから結果を見届けたヨグ＝ソトースは、男の声を聞いてそちらへ振り返った。

厳寒（げんかん）の海は未（いま）だに氷で覆（おお）われていた。そしてその一部分が砕けている。中から顔を覗（のぞ）かせていたのは、犯罪組織が武器や麻薬（まやく）、時には『商品』となる人間さえも輸送するために使ってい

る、密輸用の潜水艇だった。
軍用ではないからか、その船体全体は青地に黄色のラインが入った、お店で売れ残ったバスケットシューズのようなカラーリングが施されている。
声の主は上部にあるハッチから、上半身だけを出していた。ヨグ＝ソトースに向けて陽気に手を振っている。
「これ以上は近づけん。怖いだろうが氷の上を渡って来てくれ」
指示に従い、スキーウェアのヨグ＝ソトースは潜水艇に合流する。
内部は意外と広い。『密輸用』として選ばれただけの事はあり、ちょっとしたトラックくらいなら積み込めそうなスペースがある。
「アンテナブイを上げて連絡は取り合っていた。状況は分かっているよ。ニュースメーカーの件は残念だった」
潜水艇が氷の下へ潜航を始めると、男はそんな事を言った。他に乗組員はいないらしい。全部一人で操船できるようだった。
「アンタについては戦争国のアラスカ方面まで連れて行く。後は知らない、そっちの好きにしろ」
「助かるよ」
ヨグ＝ソトースは床に座る事なく、壁に背中を預けたまま答えた。
「ニュースメーカーも、極光冠も全滅した。私に義理立てする必要なんかあったのか？」

「前金でもらった分くらいは果たすさ。それがプロのお仕事ってヤツだ」
　男は簡単に言いながら、
「それに、ニュースメーカーは最低限の成果だけは残してくれた。なら、正しく報いてやらないとな」
「？」
「もちろんオブジェクトの撃破、厳密には操縦士エリートの精神崩壊を成功させるのが一番だったが、どっちみち、未遂に終わったところで軍部は慌てる。第六の軍隊なんて得体のしれない言葉が流行したら大事だ。だから『資本企業』『正統王国』『信心組織』『情報同盟』の世界的勢力は、こういう時だけ手を取り合って火消しに奔走するだろう。まさしく狙いの通りというヤツだ。『次の流れ』は、必ず俺を助けてくれる」
「ちょっと、待て。先ほどから君は何を話している？」
「アンタこそ、誰と話していると思っているんだ」
ぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ、と。
　男は静かに振り返った。
　先ほどまでの柔和で陽気な雰囲気はどこにもない。まるで薄いゴムを張った人形のような、リアルだがぎこちなく、精巧だが不気味な顔立ちがそこにあった。
　気づいた。

　これは何度も整形手術を繰り返し、その痕跡を少しずつ蓄積させていった弊害だ。素のままなら整っているが、顔面の筋肉を大きく動かすと『歪み』が浮かんでくるのだ。
「『外なる神』は、互いのメンバーの素性さえ知らない。ただ、そういう組織があり、自分はそこに属しているという情報しか与えられない。極めて秘匿性の高い、『資本企業』全体を見渡しても特異な諜報機関だ」
「まさか」
「だから、情報は常に一方通行となる。上の者は下の情報を知るが、その逆はない。古参は新入りの情報を得るが、その逆もない。ここまで言えば分かるかな？」
「まさか……!!」
　ヨグ＝ソトースはようやく思い知った。
　ニュースメーカー、そして極光冠。彼女を助けてくれた恩人達は、知らず知らずの内に全く別のプロジェクトの片棒を担がされていた事に。
　それは『大国』が良くやる手法である、テロリストやゲリラ組織へ様々な支援を行う事で、敵国を混乱させるものとほとんど変わらなかった事に。
　そして。
　ヨグ＝ソトースよりもはるかに深く潜り込んでいた何者かは、ゴムのような笑顔を深く刻みながらこう告げた。

「ニャルラトホテプ。アンタの先輩(せんぱい)ってヤツだよ、新入りちゃん」

それは、一〇〇〇の顔を持つとされる、邪悪(じゃあく)なる神。

極大の悪意と冷笑でもって、全てを混乱と絶望へと突き落とすトリックスターの名だった。

第二章　すくすく育つ陰謀論　〉〉カリバ方面合同軍事演習

1

多国籍合同軍事演習『ギガントハスラー』。
南部アフリカ『戦争国』カリバ方面にて、四月一五日より開催‼

「……狂ってる」
オブジェクトの整備場の壁一列に貼り付けられたポスターを見て、『本物の戦争』の準備を進めていたお姫様はぼそりと呟いていた。
ポスターの中では、四月の雨季のサバンナらしい緑色の草原と複数のオブジェクトをバックに、グラマラスなアイドルが、ばちーん☆　とウィンクをかまして、こちらに向けて鉄砲のジェスチャーを向けていた。
この世の終わりみたいに唸る重機にワイヤーで吊り下げられた砲弾が頭上をゆっくりと進ん

でいく中、お姫様はもう一度呟く。
「まったくかんぺきに狂ってる」
「仕方がなかろうよ」
ため息交じりに答えたのは、タブレット端末（たんまつ）を人差し指で操作しながら各部署に指示を飛ばしている整備兵の婆（ばあ）さんだった。
「戦争の代名詞と呼ばれるオブジェクトが八機。八機もの怪物（かいぶつ）が一ヵ所に結集して戦争をやらかそうと言うんじゃや。情報操作を施（ほどこ）さなければ、世界大戦の始まりとでも思われて『安全国』の社会不安が高まってしまう」
つまり、演習なんていうのは建前で、実際にやるのは本物の殺し合いだ。
その過程で観覧席へ一発でも流れ弾（だま）が飛び込めば、辺り一面は赤と黒で埋（う）め尽（つ）くされる。
「この『ギガントハスラー』自体、とんだちゃばんだっていうのに」
「精神攻撃専門の『第六の軍隊』の台頭を、それだけ世界的勢力の上層部が恐れたって事じゃろうな。その有効性が広まってしまえば、『クリーンな戦争』の図式が崩れる。『安全国』の中から後に続く者が現れれば、安全もクソもなくなる。だから『大きなイベント』を用意して、歴史上のインパクトを上書きする。さっさと火消ししてしまおうという訳じゃな」
二人の後ろを、工具箱を手にした若い整備兵達が通り過ぎて行った。その首から下げた災害携帯ラジオやワンセグテレビなどから陽気な声が飛び交っている。

事はもう、単なる合同軍事演習では終わらなかった。
あるラジオでは、『資本企業』の重鎮の電撃来訪を大々的に祝している。
『今回の「ギガントハスラー」では、その周囲で衛星的に四つの兵器ショーが催される事になっており、「資本企業」の「本国」を直轄管理する七つの巨大企業体、いわゆる7thコアの一角たるセイレム・ロジスティクスのCEO、エイカー＝キスオブローズ史の電撃来訪もまた、これらの大規模な軍需商談に関するものと推測されており……』
あるテレビでは、『情報同盟』のアイドルエリートのネットライブの告知が飛び交っている。
『ほほほ。おほほほほほほ!! ほしふるよるのおおぶたい、スターダストライブへようこそ! まんてんの「りゅうせいぐん」のスクリーンの下で、存分にたのしみましょう!! おほほほほほほほほほほ!!』
「狂ってる……」
お姫様は軽く額に手を当てて、さらにもう一度呟いた。
『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』……名だたる世界的勢力のオブジェクトが八機も結集しての大乱戦。世界の終わりや究極の大戦すら彷彿とさせる事は分かっていたはずなのに、上層部はその恐怖感や危機感を徹底的に希釈した。
結果、生まれたのは前人未到のお祭り騒ぎ。整備基地周辺には多数の屋台街やコンサート会場が無秩序に広がり、複数の兵器ショーやライブなどが催され、『安全国』からはるばるやっ

てきた二〇〇万人以上の追加人口をもてなすため、仮設のテントホテルなどがサバンナを埋め尽くしている。

この戦争が、どう推移するのかは誰にも分かっていないはずなのに。

八機もの大乱戦の中、流れ弾がどこへ飛ぶのかも予測がつかないはずなのに。

2

『お姫様のメンタル調整よ。クウェンサー、彼女を連れて「下町」を案内して来い。このままグロッキーが極まって湿っぽい厭戦ムードに突入されても困るしね』

砂漠と言っても一面灼熱の砂だらけに三角形のピラミッド、なんて場所ではなかった。ちょうど雨季の晴れ間だったようで、一面は背の低い緑色の草で覆い尽くされていた。感覚としては『柵のない牧場』に近いだろうか。

「……やっぱり狂ってる」

「お姫様って人混みとかダメな方なんだっけ？」

「そういうのじゃないけど」

『平和な光景』に目をやりながら、クウェンサーの隣でお姫様は氷のような顔つきの中で、わ

ずかに唇を尖らせている。

瑞々しい牧草地のようなロケーションを埋め尽くすように、人、人、人、人!! の洪水で溢れ返っていた。あちらこちらには屋根つきの即席のステージや企業展示ブースが並んでいて、ピッカピカに磨かれた新車のような床の上では、話題の新兵器の横でコンパニオンのお姉ちゃんが真っ白な歯を見せつけてにこやかに手を振っている。

彼らはみんな、これが単なる軍事演習としか思っていない。

わざわざ有給休暇を取って『安全国』からやって来ている人も珍しくない。

『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』。世界的勢力が複数入り乱れるオブジェクト八機態勢の大戦争……その『実情』を知っているクウェンサー達からすれば、なかなか心臓に悪い笑顔の渦だった。

「新手の対物ライフルとか装輪装甲車とか……なんだかんだで需要があるんだねえ、オブジェクト以外の普通の兵器って」

「……そもそも、こっかきみつのかたまりのオブジェクトがらみなんて、みんな『じかせいさん』でしょ。ビジネスでやりとりするようなパーツはないとおもうけど」

「そんなものか」

「ここにならべられているのは、オブジェクトの介入できない『しがいちせん』のものばかり。あっちのそうこうしゃだって、ぼうぎょりょくより車体のかるさをゆうせんして、どうろやは

しがきずつかないようにしているじゃない」

ちなみにコンパニオンは操縦士エリートの特殊スーツを模しているものが多かった。青、赤、黄、緑……各々の所属する世界的勢力ごとにパッキリ色分けされたコスプレちゃんが確保されている。

他にも、人混みの中にもそうした面々がかなり混じっていた。仕事なのか趣味なのかは分からないが、お姫様のような『本物』が混じっていてもストロボの嵐にならないのは、そういう理由も手伝っているのだろう。

もちろん、周囲にはそれとなく『正統王国』軍の護衛チームが溶け込んでいるはずだが。

「そういえば無人機って減ったよね」

「サイバーこうげきがこわいもの。それにドはでなECMをてんかいされると、てきちだろうがしがいちだろうがえんりょなくおちていくし」

ブースによっては、一周回って銃器にアナログな照準装置を外付けするパーツ類なども展示されていた。機材トラブル、サイバー攻撃、電磁パルス展開時などの『もしも』のためらしい。

「……『ケータイのバッテリーを気にする兵士達』ってのも何だかなあって思うけど、でもあれ、どうも二度手間っていうか、軍と企業のねっとり癒着が頭に浮かぶんだよなあ」

電磁パルス対策としては、通常の半導体の他に超小型の真空管を組み込んだプリント基板などを売り出しているブースもある。必要以上に危機感を訴える宣伝文句に、まるで防災グッズ

の叩き売りだな、とクウェンサーは思った。
「上の上の上なんてそんなものだもの。50おくドルもするオブジェクトにどれだけのりけんがからんでいるのかなんて考えたくもない」
甘い匂いが鼻についた。
お姫様の目線を追い駆けてみれば、兵器展示ブースから外れた一角に休憩所のようなものができていた。そちらにはアイスクリームやフラッペ、クレープなどの屋台が所狭しと並べられていたが、クウェンサーはお姫様の手を取って食い止めた。
特殊なグローブを通していても、女の子特有のマシュマロのように柔らかい掌の感触が返ってくる。
「一応、戦争中っていうのは忘れないでね。何を混ぜられるか分かったものじゃないし」
「別に、そこまでくいいじははってない。どっちみち、オブジェクトに戻ればれいぞうこもでんしレンジもあるもの」
口振りの割に、その唇はわずかに尖っているような気もする。
きゅっ、と。掴んだその手の感触を返すように、お姫様はわずかにその力を強くする。
「クウェンサー」
「なに？」
「せいびへいのみんなにちょっとはなしをきいたんだけど、まえの『コピーへいきこうじょ

う』のときに……」

「？」

「……わ、わたしのことを、『気になる女の――」

と、その時だった。

彼らの会話を断ち切るように、クウェンサーの背中……というかお尻(しり)の辺りに、何かがドスンとぶつかってきた。

手と手が離れる。

「っ？」

クウェンサーは背後を振り返るが、どこを見ても雑多な人混みばかりで誰とぶつかったのかは分からなかった。

『あーん!! ねえパパー、あっちもこっちもキンゾクばっかりでつまんないよう』

『では、詳しい電卓叩きはあちらのスペースでいかがでしょう。申し遅れました、わたくしはヘヴィバレット社特別外商部の……』

『おほほ、分かりました。よりみちもおわりましたし、今そちらに向かいますわ』

（うん？　……今の声……？？？）

一瞬(いっしゅん)、背筋にゾッとするものが走ったが、いちいち確かめている時間はなかった。

手と手が離れた途端(とたん)、がつんっ！　とお姫様の足がクウェンサーのスネを蹴飛(けと)ばしたからだ。

「なふっ、痛い、おひめさっ、待ってほんとに痛いお姫様痛くなってきてるからあ‼」
「……」
ついに目に見えて不機嫌ゾーンに達するお姫様。
とりあえず闘争心は復活したらしい、と諜報部門はフローレイティアに報告した。

3

そして当座の目的を達成したクウェンサーはヘイヴィアとワンセットで社会の底辺へ放り出されていた。訓練送りである。
「雨季だって話なのに突き抜けるような青空じゃねえか。せめて土砂降りならくだらねえ訓練メニューも変更になったかもしれねえのによ」
「例の大イベントのために、天候兵器使っているらしいけど」
「チッ、だったら思いっきり気圧を歪めて竜巻とかダウンバーストとか起こして敵方の整備基地でも吹っ飛ばしてくれりゃ良いんだ」
「あれも善し悪しだよね。安物の沃化銀タイプだと土壌汚染に繋がるらしいし」
ちなみに本日の地獄のフルコースは、兵器ショーのブースから離れた草の大地で、何故だかヘルメットの代わりにコックさんの帽子を被った女性兵士が振る舞ってくれるらしい。

辺りを見回せば似たような境遇……というか、どいつもこいつも問題兵士のレッテルを貼(は)られた連中ばっかり集合させられている。本格的に悪い予感が炸裂(さくれつ)中であった。

そしてコックさんは言った。

「せっかくのアフリカ派遣という事で、カピストラーノ少佐からのありがたいオーダーだ！　今日はグルメで腹のたるんだ諸君に本物のサバイバル技術を叩(たた)き込んでやる！　食の基本は毒のあるものと消化できないもの以外は全て口に入れろ、だ‼　硬い、苦い、臭(くさ)い、グロい、などの言い訳は一切聞かない‼　諸君らが気高い人間である以前に単なる生き物である事を思い出させてやるから覚悟しろ‼」

何だ何だ、食べ物の話なの……？　と兵士達は注目した。

消しゴムか石鹸(せっけん)くらいしかたとえようのないレーションを毎日喰(く)わされている彼らにとって、多少のゲテモノぐらいどうって事はない。虎(とら)だろうがライオンだろうがバッサリ捌(さば)いて丸焼きにするくらいの胆力(たんりょく)はある。基本、四本足はみんなご馳走(ちそう)にしか見えない。

「料理の真髄(しんずい)は塩と油だ。戦場の即席(そくせき)料理と聞くと『焼き』をイメージするかもしれんが、これは食感、苦み、悪臭(あくしゅう)……先ほど譬(たと)えた例題をカバーできない場合も多い。その点、『揚(あ)げ』は良いぞ。フライドポテトに麻薬(まやく)のような誘引性(ゆういんせい)があるように、にゅるにゅるのイカタコ系も揚げてしまえばサクサクするように、『揚げ』は全てをカバーする。多少かさばってでも、金属のポット、駄目(だめ)ならマグカップ。あと食用油は常備しておけ」

そこでだ、とコック兵士はスカーフを覆い被せたカゴを持ち出してきた。
何やらもぞもぞとスカーフが蠢いている。
「(……あれ何だと思う?)」
「(食材だろ。蛇か、それともカエル? 今さらその程度でビビる俺らじゃねえぞ)」
もう石鹸みたいな無味レーションが支給されているのは、ハンバーガー一個渡して死ねと命じるための壮大な計画なのではないかと疑いたくなるくらい彼らはハングリーなのだった。
「ざざん!! 本日の食材はこれだ!!」
そして、女性兵士はスカーフを取り去った。
その中にあったものは。

コオロギ。
カゴ一面を埋め尽くす、黒光りする昆虫の群れがうぞうぞと蠢いている。

「びゃっ……!?」
「馬鹿じゃねえの!? ほんとに馬鹿なんじゃねえの!! ダメだって虫系は! これもう見た目ゴキブリとほとんどビジュアル変わらねえじゃん!? ていうか中身も『肉』じゃなくて『変な汁』系じゃん!!」

辺りにいるのはどいつもこいつも命令違反や任務怠慢などの問題兵士ばかりだ。どう考えても罰ゲームコースである。

　が、コック兵士は腰に両手を当て、鼻から息を吐くと、

「虫は食物連鎖の下位にあり、生態系全体を支える莫大なタンパク源だ。なおかつ、毒でもない限りは手軽に確保できる。丸ごと喰えるから骨や皮などの残骸を敵兵に発見されるリスクもない。……後は『美味しくいただく技術を学ぶだけ』だ。分かったか？」

　今から手本を見せる、とコック兵士は準備を進めてしまう。

ライターを使わずに火を熾し、金属ポットの中に入れた植物油を煮えたぎらせ、その中に生きたままのコオロギをドバドバ注ぎ込んでいく。

「基本はフライドポテトと一緒だ。塩は揚げてから振る。素揚げの場合は、可能な限り事前に水分を拭っておくのが美味しく仕上げるコツだぞ」

「まずいぞ、不覚にもパチパチ鳴る音はホントにポテトっぽい」

「やめろよポテチ食えなくなるだろ‼」

　生徒の疑問にはしっかり答えるできた教官なのだった。

「ビジュアルに不満があるなら、事前に潰して団子状に丸めてしまうのもありだ。一〇匹ぐらいまとめてな」

「その作業中に三回は吐く自信があるんだよ‼　これ『安全国』だったら軽めの虐待になる

んじゃねえの!?」

行軍中に携行するので、調理機材も少ない方が良い。油の中のコオロギちゃんはフォークを使ってすくいあげていた。

「基本は一口サイズだ」

「カタチそのまんまだし……」

「だが時には素揚げでもくっつく場合がある。ほらこれかき揚げ風」

「うわ気持ちわるっ!?　二〇匹ぐらいがクッキーみたいに合体してる!?」

「ちなみにハチだろうがサソリだろうが、毒のあるものであっても大抵は高温で無害化できる。もちろん程度はあるから過信は禁物だがな。だがカマキリはやめておけ。ヤツには寄生虫がついている可能性が少なくないのでな、ルーキーにはオススメできん」

ずらずらと並べられるコオロギ料理。

表面からぬめるような黒い光沢がなくなったのを覗けば、ほぼ原形通りをキープしている。

「戦場の料理長からのありがたい施しだ。まずは手本から学び、自分の技術として蓄えろ。食事の前に祈りを捧げ、テーブルマナーを守って紳士淑女の振る舞いを忘れぬようにな」

クウェンサーとヘイヴィアは顔を見合わせた。

行きたくはないが、行かない事には先に進めない。あと冷めれば冷めるほど味は悪くなるはずだ。フライドポテトがしなしなになってしまうのと同じように。ジャガイモでも不味いのに、

コオロギでああなったら最悪である。余計なためらいは地獄の難易度を上げていくだけなのだ。
「……行くしかないのか」
「一緒に食うぞ。三、二、一で行くぞ」
「三」
「二」
「一」
「ゼロ、でやっぱり食わなかったな!!　先に俺一人に食わせてモルモット扱いするつもりだったなテメェ!!」
「かくいうヘイヴィアもためらっただろ!!　俺一人だけ悪者にして!!」
馬鹿二人は軽めの殴り合いになったが、それで本題から逃げられる訳ではない。
さて、コオロギ料理の実際のお味は？

4

「さあ戦争の時間だ!!　……ん？　なんか食べてるヤツがいるな。何の匂いだこれ？」
フローレイティア＝カピストラーノは檀上で眉をひそめていた。
ちなみに匂いの元はクウェンサーとヘイヴィアの馬鹿二人だ。

「(……意外といけるなコオロギ)」

「(……小さいエビを揚げたヤツみてえだ、サクラエビだっけ？　とにかく冷める前に全部食べちまおう)」

むぐむぐと口を動かし、おやつに夢中なので、珍しく口数も少ない。

フローレイティアは訝しげな顔をしながらも、

「今回の交戦区域はおよそ四〇キロ四方、見渡す限りの大草原だ。多少の起伏はあるがオブジェクトにとっては誤差に過ぎない。河、山、谷、砂漠など地形上留意すべきポイントもない。退屈なフィールドね」

背後の壁にプロジェクターで資料が表示されるが、あるのは緑一色だった。

そのあちこちに巨大な円が追加されていく。

予想されるオブジェクトの群れだ。

「対外的には合同軍事演習『ギガントハスラー』と謳っているこの戦争、最大のポイントは出撃するオブジェクトの数になる。総勢八機。それも一面対一面や多対一とも構造は違う。『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』……代表的な世界的勢力からそれぞれ二機ずつ。つまり、バランスの取れた、パワーゲームを作りにくい乱戦になる。どう転がるかは誰にも予想がつかん」

過去の戦闘の履歴からか、一つ一つの円形の印の周辺に、オブジェクトの写真画像や予想ス

ペックなどが次々と網羅されていく。

『正統王国』。

ベイビーマグナム。

主砲は球体状本体の後部にあるジョイントから七つのアームによって支えられている。静電気式推進装置を採用し、フロートは逆Y字の形状を取る。

七つの可変式主砲を用いて拡散と集束、二つの砲術理論を使いこなす万能の第一世代。突出した機構は存在しないが、逆にどのような相手にでも均一なダメージを与える事ができる。対レーザー、対コイルガンなど専門的な装甲や防御理論を持ち出されても、砲の種類を交換する事で対処できるのが最大の強み。

ロイヤルレジデンス。

球体状本体の左右と後方に、本体よりも巨大で不均一な直方体の構造物をごちゃごちゃと取りつけた造形。スパコン、弾薬庫、追加冷却装置など装備多数。また、大規模なレーダーや鉄橋のように巨大な主砲、高速移動用ロケットブースターなど、普通のオブジェクトでは積みにくい大型装備で存分に身を固めている。静電気式推進装置を採用しており、円系フロートもまた不規則に配置されている。

ただでさえ巨大なオブジェクトの外装に、多数の追加武装や装甲を纏い続ける事で山のよう

に膨れ上がった異形の第二世代。超大型、超重量にも拘らず機体各所に無数に取り付けられたブースターを点火させる事で、甚大な慣性Gと引き換えに高速機動を実現する。

『情報同盟』。

ラッシュ。

主砲は球体状本体の左右にそれぞれ連速ビーム式ガトリング砲が一門ずつ。エアクッション式推進装置を採用し、フロートは十字になっている。なお、フロート下部にはチェーンソーじみた巨大な履帯があり、エアクッションと併用する事で極めて高速の回避挙動を取れる。

二門の連速ビーム式ガトリング砲を振り回す、近接戦闘の雄たる第二世代。エアクッションと履帯を組み合わせた機敏な回避挙動でもって相手の弾幕の隙間を潜り抜けつつ、その懐へ肉薄してのゼロ距離連射は脅威の一言。

バンドステーション。

主砲は向かって右手側に一門。砲身機関部は縦に四つ連結されており、上下にスライドさせる事で下位安定式プラズマ砲、レールガン、コイルガン、連速ビーム砲へ切り替え可能。左手側には大量のカメラ、マイク、センサー、レーダー類などを装着した、主砲と同サイズの感覚器ターレットを装備。エアクッション式推進装置を採用し、球体状本体頂点から伸びた四本の重機のアームに似たデバイスの先にフロートが取り付けられている。

直接的な攻撃力よりも、多数のカメラやセンサーを搭載し、相手の弱点を探る事に特化した『情報同盟』らしい第二世代。同時に強力な放送機材を内蔵し、『安全国』の民衆へ極めて高額な懸賞クイズ番組を放映する事でも有名。軽く見ても一〇億人以上が娯楽と欲望の下に敵機の分析に取り掛かる。

『資本企業』。
スパイダージョスト。
球体状本体頂点に、極めて巨大な主砲を持つ。また、球体状本体左右には、敵機を足止めするための有刺鉄線や瞬間接着剤などの射出用コンテナが並ぶ。エアクッション式推進装置を採用し、フロートは機体の前方と後方に縦一列に並び、それらをアームによって保持する。
極近接距離における下位安定式プラズマ砲を好んで扱う第二世代。極めて高速で接近を挑むのはもちろん、確実に相手の懐へ飛び込むため、有刺鉄線、瞬間接着剤、溶鉱など多数の罠をばらまいて足止めする機能を多数装備。名の由来の通り、『槍持ちの蜘蛛』のように戦う事で有名。

メビウスインフィニティ。
球体状本体の背面上部に三門の主砲を備えている。主砲は正面から垂直まで自由に角度を変える事も可能。静電気式推進装置を採用しており、五つの輪を重ね、花弁のような形状を取る。

三門の大型レールガンを主砲として採用した特異な第二世代。砲弾には姿勢制御用の翼があり、真上、超高高度まで射出した砲弾を『メビウスの輪』のようにターンさせる事で相手を頭上から撃ち抜く戦法を好む。レールガンの運動エネルギーと超高高度の位置エネルギーを掛け合わせたその一撃は、隕石の衝突実験にすら匹敵する破壊力を生み出す。

『信心組織』。
セルフデセプション。
主砲は球体状本体の頂点に取り付けられた、反射望遠鏡のような構造の連速ビーム砲。球体状本体の下部を貫くように一本だけ静電気式推進装置のメインフロートがあり、それをくの字に折り畳んだアームと連結した左右二本のサブフロートで支える構造。全体的にはヤジロベエに近い。各種欺瞞武装もまた球体状本体の左右から水平に伸びた懸架翼によって保持されている。

チャフ、フレア、ジャマーなどの欺瞞兵器を極限まで先鋭化させた第二世代。単純に狙いを逸らすのはもちろん、時には敵機に随伴する友軍を攻撃させたり、起爆の距離を誤認させて敵機自身を爆発に巻き込ませたりもする。
サンドクラスター。
主砲は球体状本体の前方中央に一門。機体左右に巨大なスピーカーのような磁力制御装置

および砂鉄投射装置を複数装備。エアクッション式推進装置を採用し、フロートは中心から左右へ広がるものと、斜め後ろへそれぞれ広がるものの四つで構成される。
　下位安定式プラズマ砲を甚大な磁力で制御する第二世代。砲身そのものを扇のように開いて拡散したプラズマを放つ他、磁化した砂鉄などを空中散布し、プラズマの軌道をわずかに曲げて敵機を狙うなど、トリッキーな砲術理論を構築している。

　次々に並べられていくデータを見て、ヘイヴィアはコオロギ料理を飲み込んでから、素直に手を挙げた。
「先生、いきなり目一杯並べられても追いつけません。ふざけてんのか？」
「学習不足が自身の死に直結すると分かっていてもか？　それに見ろ、クウェンサーなどは目の色を輝かせているじゃない」
「はっ、はあはあ!!　み、見渡す限り、はあはあ!!　こんなにも囲まれて、はっはふ、はぬふう……ぶるるっ、機密情報が、……うっ!!」
「いやあ!!　変態から虹色の光が出ているわあ!!」
　直立不動のまま小刻みに振動している悪友を見てヘイヴィアは悲鳴を上げる。

【ベイビーマグナム】
BABY MAGNUM

BABY MAGNUM

全長…75メートル(主砲最大展開時)

最高速度…時速530キロ

装甲…2センチ×500層
(溶接など不純物含む)

用途…戦場制圧用兵器

分類…総合マルチロール型(第一世代)

運用者…「正統王国」第37機動整備大隊

仕様…静電気+レーザー型推進システム

主砲…回転アーム式兵装×7

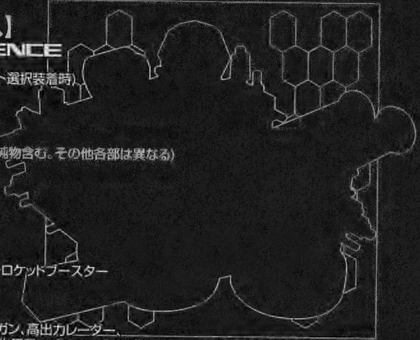
副砲…レーザー、コイルガンなど

コードネーム…ベイビーマグナム

メインカラーリング…白

正統王国

【ロイヤルレジデンス】
ROYAL RESIDENCE


ROYAL RESIDENCE

全長…250メートル(現ユニット選択装着時)

最高速度…時速510キロ

装甲…2センチ厚×500層
(本体部分。溶接など不純物含む。その他各部は異なる)

用途…拠点敷設用兵器

分類…陸戦専用第二世代

運用者…「正統王国」

仕様…静電気式推進システム+ロケットブースター

主砲…大口径レールガン砲×1

副砲…レーザービーム、コイルガン、高出力レーダー、
分析用スパコン、出力強化用アンプリファイアなど
(兵装選択により変更可能)

コードネーム…ロイヤルレジデンス(王の城、難攻不落の移動拠点)

メインカラーリング…青

【ラッシュ】
RUSH

RUSH

全長…100メートル(主砲最大展開時)

最高速度…時速530キロ

装甲…5センチ×200層
(カーボン、アミラド等を含む複合装甲)

用途…対オブジェクト用駆逐兵器

分類…陸戦特化型第二世代
(エアクッションによる海上移動のみは可)

運用者…『情報同盟』

仕様…エアクッションフロート+キャタピラ式推進システム

主砲…連速ビーム式ガトリング砲×2

副砲…レールガン、コイルガンなど

コードネーム…ラッシュ(自国では『ガトリング033』)

メインカラーリング…グレー

情報同盟

【バンドステーション】
BAND STATION

BAND STATION

全長…130メートル(脚部展開時)

最高速度…時速530キロ

装甲…2.5センチ厚×400層(溶接など不純物含む)

用途…情報解析、電子戦用兵器

分類…水陸両用第二世代

運用者…『情報同盟』

仕様…エアクッション式推進システム

主砲…切り替え式主砲×1
(下位安定式プラズマ砲、レールガン、コイルガン、連速ビーム砲から選択可能)

副砲…下位安定式プラズマ砲、各種高精度センサー、超高速撮影用カメラなど

コードネーム…バンドステーション
(敵機の撮影、分析、及び衛星回線を利用した大規模な放送機材から)
『情報同盟』の正式名はECM110。

メインカラーリング…白

【スパイダージョスト】
SPIDER JOST

全長…110メートル

最高速度…時速650キロ

装甲…2センチ厚×500層(溶接など不純物含む)

用途…対オブジェクト戦用兵器

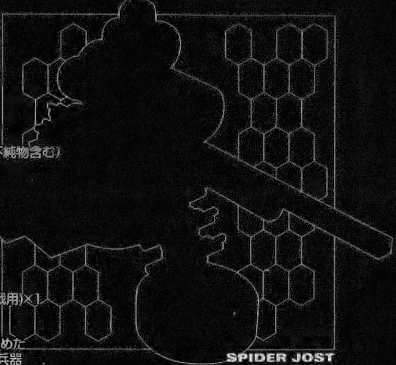
分類…水陸両用第二世代

運用者…『資本企業』

仕様…エアクッション式推進システム

主砲…下位安定式プラズマ砲(近距離戦用)×1

副砲…レールガンなど。
また瞬間接着剤や有刺鉄線を詰めた
射出コンテナを利用した足止め兵器



SPIDER JOST

コードネーム…スパイダージョスト(蜘蛛のように敵機を拘束+馬上槍のように突撃して貫く)

メインカラーリング…銀

資本企業

【メビウスインフィニティ】
MOBIUS INFINITY

全長…70メートル

最高速度…時速530キロ

装甲…2センチ厚×500層(溶接など不純物含む)

用途…戦略砲撃用兵器

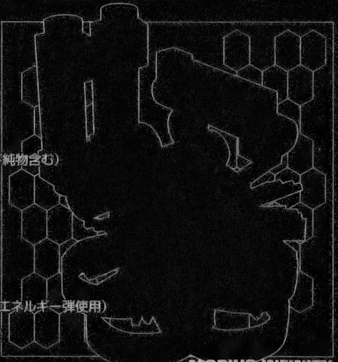
分類…陸戦専用第二世代

運用者…『資本企業』

仕様…静電気式推進システム

主砲…大口径レールガン×3(有翼位置エネルギー弾使用)

副砲…レールガン、レーザービームなど



MOBIUS INFINITY

コードネーム…メビウスインフィニティ
(有翼弾を利用した、極端にカーブする主砲から)

メインカラーリング…グレー

【セルフデセプション】
SELF DECEPTION

全長…70メートル

最高速度…時速550キロ

装甲…4センチ厚×250層
（溶接など不純物含む）

用途…戦略的撹乱兵器

分類…陸戦専用第二世代

運用者…『信心組織』

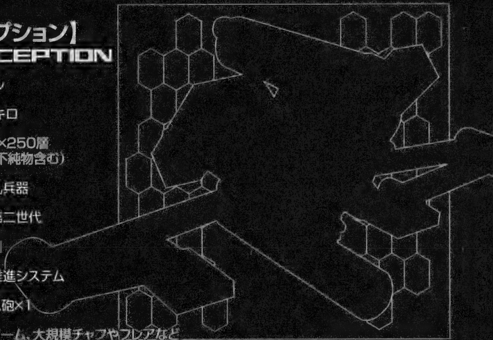
仕様…静電気式推進システム

主砲…連速ビーム砲×1

副砲…レーザービーム、大規模チャフやフレアなど

コードネーム…セルフデセプション
（自己欺瞞。敵機からの照準データがまずあり、それらに対応する形で介入するところから）

メインカラーリング…黄



SELF DECEPTION

信心組織

【サンドクラスター】
SAND CLUSTER

全長…125メートル（フロート標準展開時）

最高速度…時速580キロ

装甲…2センチ厚×500層(溶接など不純物含む)

用途…遠距離戦況制圧兵器

分類…水陸両用第二世代

運用者…『信心組織』

仕様…エアクッション式推進システム

主砲…下位安定式プラズマ砲×1

副砲…レーザービーム、
主砲歪曲用磁力制御装置及び砂鉄投射装置など

コードネーム…サンドクラスター
（大量の砂鉄をばら撒くところから）

メインカラーリング…黒

BAND STATION

フローレイティアは構わずに話を先へ進める。

「今回の交戦区域はおよそ四〇キロ四方。対して、オブジェクトの平均射程は一〇キロを超す。この領域に八機も投入されれば、少し動くだけでどれかの射程には掠めてしまう。お姫様も、常に複数の方角から砲撃を受けるものとみなした方が良いでしょうね」

状況は常に一対一とは限らないが、基本的にオブジェクト同士の戦闘の場合は一対複数の構造をよしとはしていない。

この八機が、どう動くか。

いつまでも交戦区域へ均一にばらまかれている事はない。距離を取ろうとする者もいれば、積極的に切り込んでくる者もいる。その不均一な『むら』が、全体の状況を動かしていく。

最悪、戦闘開始と同時に袋叩きにされてしまうリスクだってゼロではないのだ。

「オブジェクトをビリヤードのボールに譬えて『ギガントハスラー』などと名付けられたが、これではまるで椅子取りゲームね。攻めても逃げても、悪目立ちは死のリスクを孕む」

ずらずらと並べられたオブジェクトの内、フローレイティアは二機にマーカーを足した。

「そして目立つのは『最も脅威の高い』機体か、『最も脅威の低い』機体だ。大ボスを倒して安全を確保するか、ザコを確実に始末するか、といったところね。自陣を除けば、前者は小惑星墜落に匹敵する破壊を生み出す『資本企業』の『メビウスインフィニティ』、後者は欺瞞兵器主体で火力に欠ける『信心組織』の『セルフデセプション』と踏んでいる」

最強の『メビウスインフィニティ』。
最弱の『セルフデセプション』。
命のやり取りを行う戦争では、騎士道精神など働かない。どれを確実に狙うかと聞かれれば、破壊できる標的から順番に破壊していく。
……というのもセオリーの一つだが、フローレイティアの考えは違った。
「そこで我々は『メビウスインフィニティ』に的を絞る。何故なら、最弱の機体などいつでも破壊できるからよ。多対一の状況で早々に『メビウスインフィニティ』を沈めなければ、のちのちオブジェクトの数が減ってから面倒になるでしょう。そして恐怖は分かりやすい人心誘導の材料になる。一機が噛み付けば周りだって勝ち組を目指したがる」
つまり、椅子取りゲームで『メビウスインフィニティ』を孤立させ、他の機体が総出でフルボッコにする構図を作れ、という事を言いたいらしい。
クウェンサーはコオロギの素揚げを飲み込んでから発言した。
「あのう、俺達に具体的に何をしろと？」
「優等生のような良い質問だ。今回の戦争は対外的に『軍事演習』の体裁を取るので、オブジェクトが直接歩兵を狙う可能性は極めて低い。……ま、歩兵と歩兵が『実弾演習中の事故』をかます事になるんだろうが。これを逆手に取り、お前達には戦線に浸透してもらう。もちろん、破壊工作のためのな」

フローレイティアはもう一機、オブジェクトにマーカーをつける。
『情報同盟』の第二世代、『バンドステーション』だ。
「放送局の名を冠するこいつは、多数の高感度センサーで敵機を観測し、そのデータを『安全国』に送りつけて超高額の懸賞クイズ番組を放映している特異な機体だ。一〇億人以上の暇な民衆が弱点を探す訳ね。まずはこいつの注目を集めろ。『メビウスインフィニティ』の方へ首を向けるように、な。『メビウスインフィニティ』は最新軍事技術の塊だから、本格的な解析装置の前でむざむざ情報を開示したいとは思わないはずよ。ためらいから動きが鈍くなった事が分かれば、他の機体が一気に貪り付いていく。何しろ『万全の態勢で一番ぶつかりたくない相手』だからね」
「……そんなに上手くいくんですかね？」
「こいつはポーカーと同じ駆け引きの世界ね。乱戦をある程度乗り越え、『メビウスインフィニティ』が隠し球を何度も使ってしまった後なら、開き直って全力を出す。だが初手からそこまでの思いきりを見せられるかは疑問の余地が大きいと電子シミュレート部門は予測しているよ。過去の戦闘の履歴を紐解いても、『メビウスインフィニティ』を操る操縦士エリートは慎重派だ。可能な限りダメージを抑えて戦おうとする傾向が高い」
コオロギ片手に馬鹿二人は内緒話を始めた。
「(……どう思う？　それってつまり『メビウスインフィニティ』に取りついて何かしている

『フリ』をしろって命令だろ。実際には突破口なんて見つかっていないのに、わざわざオブジェクトに捕捉(ほそく)されるような形で。『あいつら何かしようとしているぞ』で『バンドステーション』の注目を集めるって言ったって……『メビウスインフィニティ』がいきなりセオリー無視して歩兵の虐殺(ぎゃくさつ)に走ったら目も当てられなくなると思うんだけど)」
「(……知るかよちくしょう。あの爆乳(ばくにゅう)からの提案でまともに話が進んだ試しがねえぜ。美味(うま)い話と思ったらどん底に突き落とされるより、最初っからヤバいと分かって身構えられるだけ幸運だと思わなくっちゃならねえんじゃねえのか、これ?)」
と、そこで別の所から発言があった。
操縦士エリートのお姫様だ。
「『バンドステーション』にきたいをさらすのをイヤがるのは分かる。でも、そしたらわたしはどうするの?」
フローレイティアは煙管(キセル)を口から離し、甘い匂(にお)いのする紫煙をゆっくりと吐(は)き出した。
珍(めずら)しく、気の毒そうに答える。
「最新鋭の第二世代ならともかく、すでに広く情報を収集されている第一世代なら相対的なダメージは少ない。……そういうジャッジを上層部からもらっているけど」
「……、」
ぶすう、とお姫様は黙り込んでしまった。

彼女のコンディションは戦争の趨勢に直結する重大要因ではあるのだが、敢えて真正面から答えたフローレイティアはこう続けた。

「こちらを下に見ている内外全ての鼻を明かすチャンスと思え。オブジェクトの群れが『メビウスインフィニティ』に注目した後の判断はお姫様に任せる。『メビウスインフィニティ』の撃破に集中するか、そちらにかかりきりになっている二番手三番手の脇腹を立て続けに刺していくか。状況を見て臨機応変に判断するように。何にしても、『メビウスインフィニティ』を食い残すのは危険だとは断っておく。そいつをどこかのタイミングで破壊すると織り込めば、後の順番はそちらで決めて良い」

「りょうかい。ぜんぶぶっこわしてさいごに立てばいいのね」

その声を受けて、フローレイティアはニヤリと笑う。

こちとら『安全国』のなよなよした学校生活からは遠い。軍隊特有の発破の掛け方は、軽く相手のプライドを抉るくらいでちょうど良い。

「また、私達以外の世界的勢力も演習と称して多数の兵士達を投入してくる事でしょう。ヤツらもヤツらで椅子取りゲームを上手に立ち回ろうとするはずだ。陰謀や破壊工作に警戒し、必要とあらば撃滅しろ。いや、特に理由はなくても殺して構わん。以上よ」

そんな訳でクウェンサーとヘイヴィアは他の兵士達と一緒に身を伏せていた。足元は腰くらいまでの高さの草で覆われており、ちょっと身を屈めるだけでアウトドア精神溢れる特殊な子作りにも苦労しない感じではある。

「『スリングショット』だってさ」

ヘイヴィアはうんざりしたように呟いた。

その背中には、いつもの携行式ミサイルよりも二回りも大きな金属筒を背負わされている。側面には小型の液晶モニターまでついていた。ここ最近のノートパソコンと同じように画面だけ取り外す事もでき、射手とは別に指先一つで照準を設定する事ができるようにもなっている。最新式ではあるが、重い、脆い、高い、技術の塊だからランチャーを無闇に戦地で捨てるなと制約だらけで、現場の兵士からは嫌われているモデルだった。

「バッカじゃねえの？　そっちじゃねえよ!?　ってツッコミ待ちか？　そのためにこんな名前つけやがったのか！　兵器開発者ってのはどいつもこいつもイカれたユーモア持ちやがってよお!!」

「叫ぶな叫ぶな。ここ戦場、みんなお静かに、オーケイ？」

「何にしたって無意味だぜ。オブジェクトが八機もいるんだろ。どいつもこいつもセンサーの塊じゃねえか。優雅に寝そべっているトコ絶対に捕捉されてるって。背中にサンオイルでもお

願いしてやろうか……」

ちなみにクウェンサーもクウェンサーで、両手に一つずつ強化プラスチック製のケースをぶら下げる羽目になっていた。『スリングショット』の弾頭と発射装薬の詰め合わせだ。実際にこんな大荷物を抱えてモタモタ歩いていたら戦闘どころではないはずなのだが、そこはそれ、『合同軍事演習』のギガントハスラーである。

「やってるやってる」

ドガドガドガドガッ!! という遠方からの爆音を耳にしながら、ヘイヴィアは呟いた。

オブジェクトからの砲撃ではない。であれば、とっくに彼らは余波だけでひっくり返っている。ガリバー旅行記の巨人に向けて小人達が豆鉄砲を連射している音だ。

クウェンサーは一言で評した。

「無意味だね」

「無意味だよ！　狙われてんのは……何だっけ？？？」

「『サンドクラスター』。『信心組織』の第二世代で、下位安定式プラズマ砲の使い手だよ」

「あっそ。で、小人達が撃ってんのは多連装ミサイルか？　何にしたって距離半分を詰める前に根こそぎレーザービームで落とされてんじゃねえか。迎撃精度でも測るように自前のオブジェクト側からリクエストされてんのかね」

「……あれくらいなら直撃したって傷一つないだろうに。サービス精神満点だねえ」

兵士達は明らかにオブジェクト側から反撃されないのを見越して撃ちまくっている。そうでもなければ恐怖に震えてうずくまる事くらいしかできないはずだ。
そして無線からは呑気な声も聞こえてくる。
『……ザザザ……。ええ、せっかくの晴れ舞台です、本来であれば我が社の最先端第二世代「シンシア」も投入するべきでしょうが、あちらは今パナマ運河近郊で発生しているソベラニア動乱の鎮圧に忙しいので。ですが今回投入された二機も素晴らしい機体ですよ。操縦士エリートの闘争心を具体化させる面では、よそで出回る紛い物などには追従を許しません』
『以上、多忙を極めるセイレム・ロジスティクスCEO、エイカー＝キスオズローズ史の定例会見でした。なお、史は当期間中に「資本企業」PMCの協力を得て、他勢力の特殊コマンドからの襲撃を想定した戦時退避訓練に参加するとの見方も広がっており……ジジ……』
クウェンサーは無線機へ訝しげな視線を送って、
「何だこりゃ？　ラジオが混線しているのか？」
「元々はだだっ広い大草原だぜ。そこに『ギガントハスラー』を中継するため、世界中の放送局が押し寄せてんだ。素人丸出しのニュースサイト記者だの動画アップマニアだの合わせりゃ、さらにカオスが極まる。周波数の取り決めがねえから重なっちまってんだろ」
「だとすると、こっちの通信も向こうに流れるって事？」
「うちの暗号技術開発者が手抜きしてねえ事を祈ろうぜ。……にしても『外』はやっぱり平和

だな。訓練やりますって宣言してから退避訓練して何を学ぶってんだ。学校の避難訓練だってもうちょい緊張感があるってもんだぜ」

ともあれ、無駄な争いに巻き込まれるほど暇でもない。

クウェンサーとヘイヴィアの二人は、『信心組織』の『サンドクラスター』を大きく迂回する形で、背の高い草の中を中腰で歩いていく。

「腰悪くなりそうだよね」

「俺は女以外の理由じゃ腰痛なんかにゃならねえって決めてるからな」

と、前方、五〇〇メートルくらいの位置で、パタタッ、と数羽の野鳥が飛び立った。

ヘイヴィアは片手を水平に上げてクウェンサーの動きを制止しつつ、

「……いやがるな」

「草のガサゴソ？　こんだけバカスカ撃ってたら動物だって驚くよ」

「爆発のタイミングと合ってねえんだよ」

ヘイヴィアのライフルには様々なセンサーがあるものの、赤外線は特殊素材である程度遮断されてしまうし、背の高い草に覆われた場所だと超音波やマイクロ波のレーダーも利きが甘くなる。しかし、息を止めてじっとりと観察すれば分かるものだ。風景の中に、微かな違和感が混入している。

「見つけた。前方五〇〇に『信心組織』のヴァルキリエ、さらに左手側の三〇〇に『情報同

盟』のパワードスーツ部隊」
「どうすんの？」
「片方は不信心者を始末する内部懲罰部門で、もう片方は電子戦を想定した足付き無線ルーターだぜ。雑魚同士で殴り合ったたって給料が増える訳じゃねえ。今はギガントハスラーの真っ最中なんだっつの。無視した方が得策だ、お互いにとってな」
じり……、とヘイヴィアが横に動くと、応じるような動きがあった。
一〇〇メートル規模の大きな円を描くようにして、三者は正面衝突を望まず、一定距離を維持したまますれ違う軌道に乗っかる。欧州の交通網に見られるラウンダバウトか、誰にも拾ってもらえなかった回転寿司がコンベアから捨てられていくような動きだ。
クウェンサーは悪友の後についていきながら、小声で言った。
「平和主義だ。人類は歴史に勝利したぞ」
「うるせえな、地図には記録残すに決まってんだろ。優しく笑いかけながら地雷の一つでも埋めてんじゃねえかってくらいの警戒心は持とうぜ。木とかガラスとかプラスチックとか、金属探知機すり抜ける地雷だって珍しくねえんだしよ」
二人は後ろを振り返り、消えていく影を見送る。
「……にしても、さっきの見た？　パワードスーツにアンテナ満載」
「だから電子戦機っつったろ」

「要塞並の大規模管制持ってるオブジェクト相手じゃジャミングなんて効かないし、照準の補正なんて増幅値は小数点以下だっていうのに健気だよね」
「ヴァルキリエよりゃマシだろ。あいつら、一番下の歩兵の動きを観察する事で、ピラミッド全体の思惑や行動パターンを読み取ろうってんで派遣されたスカウトだぞ。オブジェクトが味方を踏み潰してでも勝ちを取りに行ったら完全に無駄骨じゃねえか」
ドガドガドガッ!! という爆音が再び遠方から聞こえてきた。
多連装ミサイルの在庫が切れ、再装塡するまでにラグがあったのだろう。
「あっちは『資本企業』の機械化対壕兵ってヤツだな」
「あら格好良さげなお名前だこと」
「言っておくがサイボーグ兵じゃねえぞ、車両団の事だ。何でも土木会社出身でよ、戦場にトンネル掘って落とし穴作ったり川から水引いて辺り一面水没させたりして、オブジェクトの動きを止めるのが主任務だとさ。軍用トラクターとかシールドマシンの専門家って訳だ」
「へえ、一番効果はありそうだけど」
「どこがだよ！ オブジェクトの流れ弾一発でクレーターができるんだぜ？ ちんたらトンネル掘った程度で最新機の足が止まるか、ばかっ!!」
「落とし穴はともかく水は？ お姫様みたいな静電気推進だったら……」
「マップは一面緑色、全部平原だ。どこに水を引くための川が流れてるってんだよ」

　ぶつくさ言いながら、二人はさらに背の高い草をかき分けて進んでいく。途中で他の部隊が通った跡らしき獣道のようなものを見かける事はあったが、彼らは『すでにできている』楽な道は進まず、敢えて自力で草を踏み倒していく。理由は単純、地雷の可能性を恐れたからだ。

　カサリと横合いで不自然に草が揺れる音を耳にし、ヘイヴィアは再び足を止める。

「味方だ」

　様々なルートを通って、『正統王国』の兵士達が一ヵ所へ合流してくる。

　その先にあるのは当然、

「……まだ準備運動の最中か」

　クウェンサーは草の隙間から縫うように、その威容を目にした。

　オブジェクトが本気を出せば即座に時速五〇〇キロオーバーを叩き出す。歩兵達の足など簡単に振り切ってしまう。が、ここは総勢八機ものオブジェクトが乱立するギガントハスラー。闇雲に動く事は、考えなしにビリヤードの一手目を打ってしまうのに等しい。

　最初は気づかずとも、最後にその首を絞める。

　だから、些細な歩兵など放っておいてでも、万全の長考を続けようとする。

　玉座に腰掛ける王者の名を、這いつくばる挑戦者の口が吐き捨てた。

「『資本企業』の第二世代……『メビウスインフィニティ』」

6

情けない話だが、どんなに高度な電子化・情報化が進もうとも、やっぱり部隊からはぐれてしまう兵士は珍しくない。むしろ、精密機器に頼り切りになればなるほど、機材の故障によって恩恵を得られなくなった途端、自力での合流や帰還が難しくなる者は増加傾向にある。いわゆる『なまっちょろいモヤシ野郎』というヤツだ。

そんな訳で。

『今回のニュース・グランドアイズは「輸送路の戦争」をテーマにお届けしたいと思います』

『ピンとこないかもしれないが、私が今身に着けているスーツ、ワイシャツ、ネクタイ、ベルト、靴下、革靴から下着まで。全てタグには国内生産とあるけれど、その原材料まで徹底しているとは限らない。ここまでは分かるね？』

『あら、一番お金がかかっているカツラについては？』

『ぶっ殺すぞアバズレキャスター。……このように、皆様の生活に密着した問題から、オブジェクト含む大規模部隊の速やかな展開まで、「輸送路」というのは戦略上大変大きな意味を持っておるのだ。先のインド洋、パナマ運河、ジブラルタル海峡などの件は皆様の記憶にも新しいはずだが……』

混線しまくっている無線を、奥様がテレビを点けっ放しにしたまま昼下がりの家事を消化し

ていくのと同じような感覚で聞き流しながら、一人の男がギガントハスラー演習場をふらふらと歩いていた。

「……まったく、重たいな、っと」

　その男が戦場の端で一人うろうろしていても、気に留める者はいない。今は『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』……名だたる世界的勢力に属するいくつもの部隊が縦横無尽に行き来している最中だ。戦意を喪失した迷子など、敵からも味方からも捨て置かれる。

　だから、見逃されていた。

　どこかすり減らした古着のような軍服を纏い、肉体労働には明らかに不釣り合いな、奇麗な七三分けの中年男性。彼は肩に担いでいた金属製の三脚のようなものを地面に下ろすと、機材の脚を広げて固定させていく。

　カメラの三脚に似ているが、決定的に違うところがあった。

　さらにもう一本……三本の脚の連結部分から垂直に落ちるように、金属製の細長い円筒が伸びていたのだ。円筒の先端は鋭い杭のようになっており、側面には無骨なレバー、そして排莢と装填を兼ねた『スライド式の金属窓』が取り付けられている。

「さて、と。七・六二ミリの空砲で代用可能、だったっけ」

　声に出してマニュアルを読むような素振りで、男はレバーを引いて金属窓を開けると、ポケットから取り出した薬莢を円筒内部に滑り込ませる。レバーを戻して装填完了。ボルトアクシ

ョンの狙撃銃のマガジンが壊れた際、無理矢理排莢口から弾丸を詰めて装塡するのにも似ていた。

だが、この機材は人の頭を撃ち抜くためのものではない。

国際法上の兵器要覧における分類でも火器には該当されない。

男はカメラの代わりに取り付けられた丸い金属ハンドルを回し、垂直に伸びた円筒を真下に下ろす。その鋭い先端が、柔らかい土へと突き刺さっていく。それは剣のような鋭さというよりも、万力のようにじんわりとした確実な圧力に近い。円筒の側面に記された赤いラインまで、正確に沈み込んでいく。

準備は終わった。

「それじゃ一発目。……あっちもこっちもドッカンドッカン爆発しているみたいだけど、きちんと成功するかなあ?」

呟きながら、男は引き金に人差し指を掛けていく。

7

『メビウスインフィニティ』。

『資本企業』の第二世代。静電気式推進装置採用、五つの輪を重ねた花弁のような形状のフロ

ートが特徴。遠距離攻撃を想定した構成で、主砲は機体後部に背負うように配備された三門の超大型レールガン。これは敵機を直接照準するのではなく真上に向けて放つ事を主眼としており、成層圏まで届く制御翼つきの巨大砲弾を『メビウスの輪』のようにターンさせる事で、天空から敵機を襲う。莫大な運動エネルギーと超高高度の位置エネルギーを併せ持つこの攻撃は、小惑星衝突規模とも噂される威力を誇る。

目下最大の敵。

故に、八機の中でも真っ先に目をつけられるリスクを背負う機体。

「……イカれてるぜ」

ヘイヴィアは多目的携行ミサイル『スリングショット』を草だらけの地面に下ろしながら呟いた。

「黙っていても宇宙まで飛んでいく砲弾を、何でまた地上に落とす……？　あの砲塔、正しく使えば火星辺りに平和の国でも築けるんじゃねえのか」

「『資本企業』ってマスドライバー分野じゃパイオニアって話でしょ。悪用の種類だって多くなるさ」

「結局世の中馬鹿ばっかって事か」

そんなヘイヴィアの声を聞きながら、クウェンサーは地面に置いた強化プラスチックのカバンの蓋を開けた。中にあるのは、防水パックされた直径五センチ、長さ三〇センチ程度の円筒。

ミサイルを飛ばすために使う発射装薬の詰め合わせだ。
「二つでワンセット。端をサバイバルキットのナイフで削いで、出てきた金具や端子を接続する、と」
「弾頭の中身は空っぽだぞ。Cセットを詰め込むのを忘れんなよ」
「はいはい、伝説のメイドクウェン子ちゃんに全部お任せ。ついでにポテトとドリンクはいかがですか？」
ラグビーボール状の弾頭部分のネジを外して、中を開ける。二つに割れたラグビーボールの内、後部の裏側にはシート状の炸薬が貼り付けられていた。クウェンサーはビニール詰めされたユニットをねじ込み、『カプセル』を再び閉じていく。
最後に発射装薬の筒とラグビーボール状の弾頭部分を接続すると、棍棒みたいになったミサイルをヘイヴィアに押し付ける。
「面倒臭いよな。最初っから完成品を支給してくれれば良いんだ」
「それがこのパチンコの自由度ってヤツなんだろ。いろんな効果のある弾頭を自前で用意して好き放題に撃ちまくれる。だから様々な局面で活用できるって寸法だ」
ちなみに今回の場合は、人の指も落とせる強靭な特殊ワイヤーの網と瞬間接着剤の詰め合わせだ。オブジェクトは大破できなくても、可動部・関節部の動きを固められるのでは？　と期待されているユニットである。

「そのおかげで非人道的兵器扱いされそうになっているっていうのに？　使い方次第じゃ液体窒素とか生物兵器の培地とかもばらまき放題なんでしょ、これ」
「ああ、戦場の中心で犬のクソまみれになった兵士が怒り狂ってやがったな、動画サイトで見たけど。でもあれヤラセじゃねえの？　有名になったおかげでＣＭとかにも出演するようになったろ、あいつ」
「クソまみれのイメージが強すぎてゴールデンの食卓からは嫌われているみたいだけどね」
ヘイヴィアは発射筒の砲口から受け取った棍棒を差し込み、カチリと音が鳴るまでねじる。
これで『スリングショット』ミサイルの完成だ。
「いくつか替えの弾を組み立てておいてくれよ。あとこれ」
言いながら、ヘイヴィアは発射筒の側面に取り付けられていた薄型モニターを取り外した。
それをクウェンサーの方へ放り投げる。
「おい、何だよこれ？」
「作戦前会議ブリーフィングは聞いてやがったか？　辺り一面にゃ一〇〇組以上のご同輩が夜の公園の覗き野郎みてえに息を潜めて待機してやがる。全員のトリガーを連動させて、一〇〇方向から一気に飽和攻撃を仕掛けんだ。俺はハードウェアの微修正に大忙し。ネット絡みの調整はテメェに任せたぞ」
「……俺、設計士志望っていうか、メカニック畑の人間なんだけど。基本的に画面に出てきた

のは全部『はい』か『オーケー』連打で良いんだよね？」
「心配すんな奥様向けのタブレットより扱い（あつか）は簡単なもんさ。今夜のレシピを検索（けんさく）するくらいの軽い気持ちで人差し指を動かせよ」
「ほんとかよ……」
眉（まゆ）をひそめながらも、クウェンサーは身を屈（かが）めたまま画面に指示されるまま指を動かしていく。どっちがどっちを従えているか分からない構図だ。
「一応できたぞ。……何これ普通のWi-Fiで接続してんの⁉　危ないなあもう‼」
「信じられるか、こいつ、一つ一つのランチャーがテザリングもしてくれてんだってよ。ネットカフェに一台置いてほしいくらいだぜ」
画面の設定を終えてもクウェンサー達の仕事は終わらない。学生は薄型モニターを地面に置いて引き続きミサイルの弾体（だんたい）を組み立て、ヘイヴィアは発射筒を肩に担（かつ）いで『資本企業』の第二世代『メビウスインフィニティ』を見上げている。
クウェンサーは心の中で毒づいていた。
「(……ちえっ。高精度のルーペとかミリ波のスキャナとかも持ってきたけど、これじゃ出番を作るのは難しそうだな)」
「始めるぞモヤシ野郎、バックファイアに巻き込まれねえように立ち位置気をつけろ」
ファシュッ‼　という蒸気が漏（も）れるような発射音が炸裂（さくれつ）した。

ヘイヴィアの担いだ発射筒から勢い良くミサイルが飛び出したのだ。それは、細長い煙の柄と先端にオレンジ色の閃光の矛を備えた大空の槍。……といった印象はない。連動するように『メビウスインフィニティ』の後方周囲一八〇度、一〇〇方向から一〇〇発以上。たった一つの引き金と連動して一斉に放たれたミサイルの群れは、まるでオーディオセットの画面の中で躍っているデジタルメーターのようだった。

狙うは『メビウスインフィニティ』が球体状本体の後方に背負う、三門の主砲。成層圏まで飛ばした巨大砲弾の軌道をねじ曲げて小惑星のように天空から襲う脅威の兵器。逆に言えば、そこさえ『不具合』を生み出せれば、間違いなく戦局は動く。最強の敵に回復される前に、総叩きにしてしまえと場が動く。

飛行機だろうがミサイルだろうが、対空レーザービームは全てを叩き落とす。

ただ、光学兵器では対処不能な圧倒的物量を一度に打ち込んだらどうなるか。

処理能力の限界を超え、たった一発でも殺しの網からすり抜けたら？

それが『飽和攻撃』の定義である。

……のだが。

ドガドガドガドガドガッッッ!!!!!!　と、大空一面を埋め尽くすような、オレンジ色の爆発の華が満開を告げる。

直撃したのではない。その全てが、一発残らずレーザービームに落とされたのだ。

クウェンサーは地面に置いた薄型モニターへ目をやる。ミサイルの軌道がハリネズミを逆さまにしたように描かれていたが、×印と『LOST』のサインで締めくくられている。文字の数が重なり過ぎて読めなくなっているくらいだ。

「ああもう！『やっぱり』駄目だっ、働き甲斐のねえクソ仕事だなオイ‼」

「ていうか、腐っても核にも耐えるオブジェクトだよ。通常火力で不具合起こすって、もう最初のコンセプトの段階から間違っているって！」

ミサイルや無反動砲などは、噴射煙のせいで発射位置はすぐに特定される。クウェンサーとヘイヴィアはランチャーや予備の弾体、薄型モニターなどを抱えて背の高い草の中を必死に走って距離を取っていく。

おそらく、一〇〇ヶ所以上から狙いを定めていた同僚達も思い思いの方向へ駆け出しているはずだ。

「ここまでは予定通り！　クウェンサー、モニターを指で叩いて黄色い三角印のついた通信ソフト立ち上げちまえ。後は任せたぞ‼」

「二世代も前の暗号なんて逆にすぐ怪しまれないかな、これ⁉」

「確実に『傍受』させなきゃ意味がねえんだ。さっさとしやがれ、変なタイムラグがあるとそ

れはそれで怪しまれんだ!!」

　ほとんどヤケクソ気味に、クウェンサーは機材を操作していく。

『あらかじめ用意していた』戦果報告の画面を添付し、クウェンサーは安全な後方に詰めている銀髪爆乳のフローレイティアに向けてこう告げていた。

「おおっ！　かの炎の紅蓮の猛りを見よ!!　『メビウスインフィニティ』は最大の牙を黒き煤に覆われ、獲物を食い破る鋭さにも欠けている。麗しの軍姫に告げよ、その細腕に筋肉がつくより先に武勲はそなたのものになるであろうと!!」

　ぶふっ!!　とヘイヴィアは思わず吹き出しかけた。

　通信を切ると、胸ぐらに掴みかかりかねない勢いで彼は叫んでいた。

「学芸会か馬鹿野郎！　何でミュージカル風にしやがった!?」

「素人が下手に繊細な味付けなんかしたって一発でバレるよ。だったらカレー粉ドバドバ入れて誰でも似たような味にした方が良い。……大体、よそから見た『正統王国』なんてあんなもんだろ。俺達、未だに白い手袋投げてサーベル片手にケンカするって信じられているみたいだし」

「マジかオイ……。俺ら『貴族』だってネットショッピングくらいすんのによ」

　チカチカッ、とクウェンサーの手にしたモニターが光点を点滅させていた。

　一定以上の距離を取った事でひとまず立ち止まった馬鹿二人は画面へ目をやる。

「動いた、動いたぞ。オブジェクトが何機か『メビウスインフィニティ』に近づいて射線を確保する構えになってる。これで成功だ！」

「あれで騙されるなんて複雑な心境だぜ……。もうちっとウィンチェル家も外交イメージ戦略に貢献してみるべきかね」

「お前が基準になったら『正統王国』はソドムかゴモラになっちゃうよ」

そうこうしている間にも、クウェンサーの茶番劇によって状況が動く。『メビウスインフィニティ』へ負の注目が集まっていく。

『情報同盟』の第二世代『ラッシュ』。

『信心組織』の第二世代『セルフデセプション』。

『信心組織』の第二世代『サンドクラスター』。

……その呼び水、誘い役として『正統王国』の第一世代『ベイビーマグナム』と第二世代『ロイヤルレジデンス』もゆらゆらと左右にブラフを噛ませながら接近を試みる。

唯一様子見を決め込んでいるのは情報解析と巨大放送局を兼ねた『情報同盟』の第二世代『バンドステーション』くらいか。こいつもこいつで、ある意味ではスナイパーやパパラッチのように『攻め』の撮影に移行しているとも言えるのだが。

対する『メビウスインフィニティ』側は同じ『資本企業』の第二世代『スパイダージョスト』を前衛、盾役に敷く事で接近を阻みつつ長距離砲で応じるつもりのようだが、ここまで来

れば数の暴力で押し切れる。

「……やっと俺達好みの展開になってきたな」

「ここまでやってまだ第一段階ってのが信じられねえ。お姫様と『ベイビーマグナム』が生きて帰るまであと何段階だ？　そろそろお茶とクッキーが運ばれてきたって不思議じゃねえぜ」

そんな風に馬鹿(ばか)二人がぼやいた時だった。

8

『それ』は起きた。

9

「うん」

迷彩カラーの軍服よりも、安物のスーツでも着て住宅街に訪問(ほうもん)販売へ出かけている方が似合っていそうなその男は、周囲を背の高い草に覆(おお)われたまま額(ひたい)の汗を腕で拭(ぬぐ)っていた。

「そろそろかな」

起きた現象そのものは、極めてシンプルなものだった。
問題の『メビウスインフィニティ』が球体状本体の後部に背負うように備えている三門の主砲は、長射程のレールガンだ。フレミングの左手の法則を利用して、ちょっとした乗用車よりも巨大な金属砲弾を壮絶な速度で撃ち出す。
複数のオブジェクトに五キロ圏――オブジェクトにとっては中距離戦――の包囲網を敷かれるか否か、その矢先の事。『メビウスインフィニティ』はそれら複数の主砲を立て続けに解き放ったのだ。
主砲のレールガンは、鉄塔のようにほぼ真上を向いていた。
そして側面から可変式の制御翼をつけた金属砲弾は、野球の遠投のような単純な軌道は描かない。数字の八、または無限大、あるいはメビウスの輪。真上に向けて放たれた金属砲弾は不自然なねじれと共に高度二万五〇〇〇メートル辺りを頂点とし、そこから一転、電磁力による加速に重力の落下分を上乗せし、天空から地表の獲物へと恐るべき速度で喰らいついていく。
するとどうなるか。
ツッツドン!!!!!! と。
包囲網を形成する一機、五〇メートル以上ある『セルフデセプション』が潰れた果物のようにその中身をさらけ出した。

キロ単位の大地がまとめてクレーターとなる。その土も含めた全てが巨人の足に踏み潰されたかのようだった。

砂塵によって視覚化された衝撃波が、地平線の向こうから迫る。

「うおおおおおおおああああああああああああっ⁉」

分かっていて、クウェンサー達には何もできない。とっさにうつ伏せになって後頭部を両手で守ったが、下からめくり上げられるように少年達の体が宙を舞う。ニュース映像などでハリケーンに舞い上げられる自動車や家屋の残骸が頭をよぎる。

幸い、浮かんだのは二メートルくらいで、柔らかい草の地面に叩きつけられても死ぬ事はなかったが、そこで『第二波』がやってきた。

はるか遠方で、潰れて平べったくなった『セルフデセプション』の動力炉が思い出したように大爆発したのだ。

爆風自体は届かなかったが、ぶわっ!!　と馬鹿二人の目玉に真っ白な閃光が突き刺さった。

「ふざけっ……くそ……けんじゃねえぞ！　……あの爆乳……今度の今度こそ……!!」

すぐ隣でヘイヴィアが両手で顔を押さえて喚いていたが、クウェンサーにはその内容を聞き取る事もできなかった。

倒れたまま、必死で目を擦って視界を確保しようとする。

ぼんやりと霞む視界の向こうで、さらに別の爆発が起きたのを見てしまった。
「冗談だろ……。最初の爆発に揺さぶられた他の機が、てっぺんから『メビウスインフィニティ』の主砲に串刺しにされるだなんて……!!」
「ああくそ!! それじゃまたあの閃光がくんのか!?」
今度は『信心組織』軍の『サンドクラスター』がクズ鉄と化す。
さらに『情報同盟』軍のおほほが乗っている『ラッシュ』も天からの一撃で食い破られそうになるが、右の主砲を犠牲にする形で、ギリギリのラインを回避していく。
何度も何度もゴロゴロ地面を転がされるヘイヴィアは、頭上を見上げて顔色を変えた。
まるで火山の噴火のように炸裂地点から全方位へ撒き散らされたオブジェクトの残骸、そのねじれた鉄橋のような砲身や大型バスより巨大な装甲板が次々と降り注いでくる。
四、五キロ単位の距離などお構いなしだ。
「危ねえっ、避けろ!!」
「避けろってどっちに!?」
クウェンサーは無意味に横へダイブしてみたが、ヘイヴィアに首根っこを掴まれて無理矢理立ち上がらされた。野球の試合の人数合わせで駆り出された運動音痴が外野に飛んできたボールから逃げ出すような格好で、どうにかこうにか難を逃れる。
「こんなもん勝てるかっ!?」

「人間対オブジェクトならね。だけどここはギガントハスラーだ、同クラスのオブジェクトくらい腐るほどいるんだよ！」
『メビウスインフィニティ』が立てたのは驚異的な戦果だが、これでもまだ多勢の無勢だ。『資本企業』勢二機を除く、残るオブジェクト四機が皆で捨て身の突撃をすれば、『メビウスインフィニティ』を潰せたかもしれなかった。
だが、
「……くそっ、様子がおかしいぜ」
間近の地面に突き刺さった主砲の残骸に背中を預けながら、ヘイヴィアが吐き捨てた。
「包囲網を作っているはずの壁同士が妙な牽制をし合ってる。ラスボス総叩きムードをやめて『勝てる敵から倒しましょう』に路線変更しちまったのか⁉」
このギガントハスラーは総勢八機のオブジェクトが入り乱される世界最大の砲撃戦である他、各々の操縦士エリート同士の巨大な心理戦でもある。
誰が誰を最初に狙うか。
どこに乗って誰を叩き、どのタイミングで裏切れば他者を出し抜けるか。
「そもそもこれは『生き残るための戦い』だ……。全員使い潰して捨て身で頑張りましょうなんて提案を呑むヤツなんか誰もいないに決まっている」
「つってもよ！　最大戦力の『メビウスインフィニティ』を最後まで残しちまったら一対一で

フルボッコだぜ。それくらい誰でも分かるはずじゃねえか!!」

「じゃあヘイヴィア、お前は『みんなの踏み台にされる最初の一人』に立候補できるか？　そういう話だ。オブジェクト任せじゃもう駄目だ、小便我慢してスカートの端っこ握るみたいにもじもじしている連中に頼っていたら、あっという間にチェックメイトに流れていくぞ！」

ザザザッ!!　と複数のオブジェクトが『メビウスインフィニティ』から、そして一時的に共闘していた他の機体から距離を取ろうとする動きを見て、クウェンサーは歯噛みした。

あの中には、お姫様の『ベイビーマグナム』も混ざっている。

作戦目標を考えれば進んで包囲網を解こうとしていないのは明らかだが、彼女一機だけが残れば『メビウスインフィニティ』から狙い撃ちにされる。状況や場の流れといったものに逆らえない状態にあるのだ。

では、誰が死の椅子取りゲームから最初に弾き出されるのか。

最強の『メビウスインフィニティ』は力技でその引力を断ち切った。

最弱の『セルフデセプション』は第一波攻撃によっていつの間にか吹き飛ばされている。

先の読めない中。

誰が爪弾きにされてもおかしくない中。

……『それ』は起こった。

静電気式推進装置にとっては致命的な足止めとなる、水が。

突如として『ベイビーマグナム』の周囲の地面が大きく割れ、大量の水が噴き出したのだ。

ごぼんっ!!　と。

「……何なんだ、ありゃあ……」

ヘイヴィアは、思わずといった調子で呟いていた。

水道管が破裂した、どころではない。一面の亀裂に沿う形で、南米の滝を逆さにしたような大奔流が『ベイビーマグナム』を呑み込もうとしていた。

「いや、待てよ、待て待て!!　お姫様は静電気式だろ、そのまんまじゃ川や海は渡れなかったはずだぜ。だとするとあの大量の水ってヤバくねえか!?」

捕まれば身動きが取れなくなる。

お姫様も馬の脚で地面を蹴飛ばすような挙動で機体を振り回し、慌てたように水没地帯を脱しようとする。だが、たとえそこを抜けたとしても、水の浸食と共に『通行不能エリア』は拡大していく。行動の自由を狭められれば、それを他の怪物達はどう捉えるか……。

「一体どこにあんな大量の水があったんだ!?　マップは一面緑色で、目立った川なんてありゃしねえってのに!!」

「……いいや」

クウェンサーは呟いた。
「そもそもの前提が違う。ここが砂漠になっていないのは何故だ？　水があるから、だ。どこの誰だか知らないけど、そいつは地下水脈を探り当ててお姫様の足元に爆弾を敷設したんだ！　この数十キロ四方に及ぶ平原全体を潤すほどの大量の水を兵器化したんだよ!!」
「どうやって、どこの誰が？　あいつと同じ『資本企業』絡みで機械化対壕兵の連中かよ。確かに、土木会社出身でトンネルとか人工湿地を利用してオブジェクトを足止めするっつー話だったが」
「連中にこれができるならもっと活躍してる。そして悪目立ちして俺達に撃ち殺されているだろうさ」
「じゃあ誰だよ⁉」
「知らないし興味もない。しかも一番大きな問題はそこじゃない」
はるか遠方で、ぐりんっ！　と機体の向きを大きく変えるオブジェクトがあった。
『情報同盟』の第二世代『ラッシュ』。
彼らの間でおほほなどと呼称している操縦士エリートが、予期せぬトラブルでもたついている『ベイビーマグナム』を貫こうと、一門だけ残っている主砲の連速ビーム式ガトリング砲を容赦なく突き付けたのだ。
「……顔見知りだから見逃してくれるって訳じゃあなさそうだぜ」

「あいつもあいつで主砲を片方食い破られている。手負いで攻めやすいって思われたら一斉に飛びかかられるから、自分が弱い風には見せられないんだろ」

おほほの『ラッシュ』へ呼応するように、いくつものオブジェクトがその矛先を『ベイビーマグナム』へと向けていく。

その中には、最大最強の『メビウスインフィニティ』も含まれている。

「まずいぞ……」

クウェンサーは呻くように言った。

「何か状況をひっくり返す別の手が必要だ。このまま時の流れに身を任せていたら、お姫様が四方八方から貪られるトコを拝まなくちゃならなくなる!!」

10

そのひょろひょろとした男は、鋼鉄でできた巨大なコンパスのような機材を肩で担ぎながら、最前線をゆっくりと離れていった。

銃身と引き金、排莢口にコッキングレバー……。ボルトアクション式の狙撃銃を簡略化したような機構が組み込まれているが、彼が担いでいるのは人を撃つための道具ではない。地中に火薬炸裂の衝撃波を伝播させ、埋まっているものを探り当てるための炸薬式地中探査機だ。

当然、地下水脈の位置を特定するのにも使える。

……本来であれば辺りに車の往来などがない、深い森や砂漠などで使うための機材であり、これだけドンパチが繰り広げられている中で正確な地中探査を行うのは奇跡に近い腕が必要だろうが。

一度だけ背後を振り返り、モヤシのような男は自らが大きく動かした戦場を見やった。

「さて……ホースの水で蜂の巣はつついた。後の事は期待しているよ、諸君」

混乱を極める戦場において、一人ひっそりと離れようとする男に気づく者はいない。いいや、オブジェクトの対人センサーや無人機のカメラなどが捉えていたとしても、『現代の軟弱な兵士達』が部隊からはぐれて演習場の外へ助けを求めに歩いている、と取られるはずだ。……そういう条件を全て、事前に備えていたのだから。

その耳に、混線状態の無線機からどこかの放送局の音声が聞こえてきた。

『「安全国」、その大都市攻撃を想定した破壊工作……つまりテロ活動を専門とする特殊コマンド部隊の存在は、オブジェクトを用いた現代の「クリーンな戦争」から大きく逆行するとして、関係各国は相次いで縮小を発表しています』

『しかし一方で、職にあぶれた隊員達の「その後」に不明な点が多いのも事実ですな。中には反政府、反オブジェクトを掲げる勢力と合流し、「安全国」への攻撃計画の策定や密入国の手順に一枚嚙んでいる疑惑もあり、先に起きた、パナマ運河近郊のソベラニア動乱の発端もまた、

そうしたコマンドの存在が……』
ざくざくと背の高い草をかき分けながら、ひょろ長い男は平和な国の専門家とやらの言葉を耳にしていた。
そうしながら、風に溶けるように男は一人呟いていた。
「……そんなに簡単じゃねえんだよ」

11

『ピッ、ピッ、ピッ、ポーン。二時になりました、クイーンズカフェがお届けする、ゆったりとした昼下がりのオアシス……』
『……はセイレム・ロジスティクスが提唱する全く新しいネット通販システムで、注文はスマホ一本、なんと地球のどこにいても一二時間以内に必ず商品をお届けするという……』
『……今日の一曲目なら俺に任せてくれ、ご機嫌なナンバーはこちら。ボーイレーサーってバンドの連中がまだ正気を保っていた頃の名盤で』
全長五〇メートル以上、総重量二〇万トン超の巨体を操るコックピット。その中で、お姫様は大量の音の洪水に呑み込まれていた。
混線している各種放送局の音声まで除去せずに拾い上げているのは、少しでも多くの情報が

欲しいという『飢え』の表れか。

すぐ足元での急な爆発に、大量の地下水の漏出。

五秒前まで自分のいた場所はすでに巨大な湿地と化している。水たまりのサイズはすでにキロ単位にまで広がっていた。このまま呑み込まれれば底なし沼にはまったように動けなくなるはずだ。そうすれば、周りの機体がどう動くかは目に見えている。

今も多数の亀裂から新しい地下水が湧き出し続ける中、『ベイビーマグナム』は機体を右に左に振り回しながら水の網に囚われるのを必死に避けていく。

追いすがる、別の影があった。

膨大な空気の力で機体を浮かび上がらせる、エアクッション式。お姫様と違って水の存在を気にせずに運用可能なオブジェクト。

『ほほほ。おほほほほほ！　まけいくさの匂いというのは、かぎとってからリカバリーするのではまに合いませんわよ。ざんねんながらここがまくぎれ。あなたのぶたいには、でんぽうと花束くらいはおくってさしあげてもよろしくてよ？　おほほほほほほほほほほほ!!』

「……だれが、どんないとを込めてさし向けた『かちぐみ』かも分からないのにのっかるだなんて、よっぽどのうてんきなオツムをしているのね」

『ぎもんはかってからこたえを出しますわ。そうそう、わたくしたちがギガントハスラーをせいあつしたあかつきには、そちらの「はいざんへい」のめんどうも見てさしあげますわ。がく

せいでばくだんつかいのかれ、このままくさらせておくにはもったいないですものねえ』
「ブチころす」
『おほほ、どうやって……ぶわっ!?』
カッ!!　と逃げ惑う『ベイビーマグナム』から大量の砲弾が飛んだ。それらは七門の主砲ではない。球体状本体の表面にびっしりと取り付けられた、大小無数のレールガンやコイルガンだ。
そんなものでは『ラッシュ』は撃ち抜けない。
そしてお姫様の狙いもそこではない。
おほほの足元、その地面を丸ごと穴だらけにして耕すような格好で、大量の砲弾の雨が降る。
そして、エアクッション式は膨大な空気の層を使って二〇万トンの巨体を浮かび上がらせる方式だ。
事前にレーザーや超音波などで地形を把握しているならともかく、いきなり足元の地形を大きく変えられたらどうなるか。
がくがくがくっ!!　と『ラッシュ』が大きく揺さぶられる。
おほほは補助推進装置として取り付けられた、巨大なチェーンソーのような履帯を使って何とか強引にバランスを取り戻していく。
『なっ、あ、ちょ……!?』

「のりものよいで吐けを。エアクッション式もばんのうじゃないのをおしえてやる……!!」
双方が地面を蹴飛ばすような鋭角な動きで絡み合い、今度こそ互いの主砲を突き付ける。
超重量級の撃ち合いが始まる。
その時だった。
音の洪水と化しているコックピットの中に、聞き慣れた少年の声が入ってきた。
『聞こえているか、お姫様。俺達のプランは失敗した、椅子取りゲームで弾かれるのは「メビウスインフィニティ」じゃなくてアンタになってる!』
「言うのはそれだけ……!?」
『だから』
クウェンサーの声は、そこで終わらなかった。
続けて彼はこう言ったのだ。
『どれだけ被弾しても良い、命さえ残っていれば問題ない。だからアンタは何としても生き残れ、俺達が流れをもう一度変える。「メビウスインフィニティ」に致命傷を与えて、あいつを美味しい餌にしてやるから』
端整な人形のような顔立ちをしたお姫様は、滅多な事では表情を変えない。
だが。
この時ばかりは、たった一人で、誰にも見せない顔になった。

「分かった。まってる」
ドガドガドガッ!! と複数の箇所から砲弾が飛び交い、ダンスでも踊るようにそれらをかわしながら、お姫様は告げた。
通信を切り、改めて己の敵と向かい合う。
「そんなわけで、あなたの入り込むよちなんかどこにもない。どっちがまけいくさの匂いがしているかに気づいたら死になさい!!」
『おほほ。うばいとってこそ、あい。そんなことも分からないから「おこさま」なんですのよ、あなたは!!』

12

通信を切り、クウェンサーは傍らの悪友に言った。
「行こう、ヘイヴィア。『メビウスインフィニティ』を吹っ飛ばす」
「マジかよ……つーかマジか!? 表向きは合同軍事演習で、巨大放送設備を備えた『バンドステーション』も生中継で張ってんだぜ。この状況なら時代遅れの歩兵が最新兵器に虐殺されるこたねえさ。黙って交戦区域の外まで立ち去れば安全に逃げられんのに!!」
「『ベイビーマグナム』はその条件に当てはまらない。……うちのお姫様をお茶の間の恥さら

しになんかさせてたまるか。こっちは彼女のためにここまで汗水垂らして仕事をしているんだ、それくらいの独占欲見せたって良いだろう」

「ああくそっ!!　乗ってんのがむさ苦しいおっさんなら容赦なく見捨てていたのによ!!」

　クウェンサーとヘイヴィアは互いに発破を掛けながら戦場を進む。『メビウスインフィニティ』は最適な砲撃位置を得るため、彼らから離れた場所に移動してしまったからだ。

　辺り一面に撒き散らされた、ちょっとした自動車より巨大な装甲板の破片に身を隠しながら、クウェンサー達は背の高い草をかき分けて走り続ける。

「具体的にゃどうすんだ⁉」

「それも含めてこれから検討する。でも大体の目星はついているぞ」

「……何だって？」

「最初の飽和攻撃さ。オブジェクトは核にも耐える超大型兵器、なのに相手はミサイルの直撃を嫌って全弾撃ち落としていた」

「んなもん、他の機体だってやってたろ。ほら、『メビウスインフィニティ』に向かう途中で見た、『資本企業』の機械化対壕兵の連中だって多連装ミサイルを全部落とされてやがったし」

　破片から破片へ。小刻みに跳ぶように居場所を変えながら、クウェンサーとヘイヴィアは言葉を交わしていく。

「じゃあその後に俺がやったミュージカル風の欺瞞報告については？　直後に『メビウスイン

フィニティ』はご自慢の主砲を三発も連続で斉射していた。秘密兵器は後に取っておいた方が有利なのにだ」
「だって、あの時は『場の状況』ってのが総叩きの方向に傾いてやがったじゃねえか⁉　払拭するためにはデカい花火が必要だったってだけじゃねえのか！」
「そうだよ、『それだけ』だ」
クウェンサーは意味の分からない事を言った。
だが違う。その後にも言葉は続く。
「そして忘れたか？　作戦前会議ブリーフィングでフローレイティアさんはこう言ってたろ。『バンドステーション』の分析能力と全世界への発信力を考えると、虎の子はカメラの前じゃ撃ちたがらないって。……ヤツは、払拭する必要があったんだ。そこまでのリスクを負ってでも、自分の主砲は完璧に動作するって事を」
「あんな豆鉄砲で、兵器システムの要を担う主砲が壊れるかもしれねえってのか？」
「そんな単純な話でもないと思う。でも、何か『懸念』があるんだろ。それを徹底的に追及してピンポイントで叩き潰す。最終便に間に合う最短最速のルートはおそらくそこだ」
ガササッ、という草の擦れる音が響いたのはその時だった。
ヘイヴィアはアサルトライフルを構えながら、
「っ‼　こんな時にかよ‼」

「待てヘイヴィア、『信心組織』のヴァルキリエだ!!」
「だったら何だ、女性兵士専門の部隊だから殺したくはありませんってか!?」
叫び返しながら、しかしヘイヴィアは疑問に思った。こうしている今、向こうから銃弾の雨が降り注ぐ様子もない。
「……向こうは『セルフデセプション』と『サンドクラスター』、二機ともやられているんだ。もう味方のオブジェクトはいない。この状況で他の軍、他の部隊に噛み付こうなんて考えないさ。俺達が砲撃支援を一回送ったら粉々にされるんだからな」
最初に草の擦れる音が聞こえた事自体、わざと自分の居場所を教えたのだろう。下手に強過ぎると『殺さないと安心できない』状況になる。そんな判断をされたら困る訳だ。
ヘイヴィアは舌打ちすると、アサルトライフルの銃口をわずかに上へ逸らして、
「悪りぃが、もう待ち合わせの約束をしていてな、姉ちゃん達を引っ掛けている時間がねえんだ！　……一個貸しにしてやるから後でアドレス教えてくれよ」
パパパン!!　と真上に向けた威嚇射撃で応答があった。
クウェンサー達とヴァルキリエ達はすれ違い、各々の目的地を目指してさらに進む。
「いたぞ、『メビウスインフィニティ』だ。……おいクウェンサー、向こうの脚みてえな残骸の陰から覗き込もうぜ」
他の機体は自ら進んで『メビウスインフィニティ』を攻撃しようと考えない事、こいつ自身

が最適な位置取りから離れたくない事も手伝って、前後左右に小刻みに移動しながらも、四〇キロ四方もの交戦区域を次から次へと縦横無尽に駆け巡ったりはしなかった。そんな事をされたら徒歩のクウェンサー達にはどうにもならなかっただろう。

「例の主砲は」

物陰から双眼鏡を使ってクウェンサーは機体後部を観察していく。

「一点支持……機体後部に水平に設置されている巨大な円柱に取り付けられているだけか」

「戦車だの戦艦だのとおんなじ、スタンダードな方式って事だろ。んなもん弱点なんかあんのかよ？」

「……、いや」

クウェンサーは双眼鏡を構えたまま、首を上へ振った。

鉄塔のようにそびえる三連続の主砲の頂点部分……砲口の辺りへ注目しているらしい。

「それだ。戦車と戦艦は同じ一点支持の砲だけど、コンセプトは全く異なる。何だか分かるかへイヴィア？」

「あん？　戦艦の方が圧倒的にデカいとか？」

「当たらずとも遠からず」

冗談のような言葉に、クウェンサーは真顔で応じた。

「正確には、戦車の砲身の方がずっと肉薄なんだ。水平に構えた時に、砲身そのものの重さで

先がたわむくらいにね。……ほら見ろへイヴィア、『メビウスインフィニティ』の主砲の先。グラスファイバーで作ったみたいに、ほんのわずかにカーブを描いていないか？」
「何だそりゃ、ねじ曲がった砲なんか使えんのか⁉　弾は狙ったトコに飛ばねえだろうし、最悪、砲身の中で爆発しちまうんじゃねえのかよ！」
「大昔はそれも込みで、一発目はわざと照準をズラしたりしたらしい。二発目以降は発射時の熱で砲身が真っ直ぐになるから、それに合わせて細かく癖を見抜いて調整していたんだと」
「聞いた事もねえぞ。お姫様だのおほほだのもそうだってのか？」
「だから、『メビウスインフィニティ』特有の技術なんだろ」
「……おい、まさかと思うけどよ。相手は超高高度まで砲弾ぶっ飛ばして切り返し、小惑星衝突規模の大破壊を生み出すオブジェクトだぜ。砲身のたわみの癖を経験で見抜くとか、そんなアナログな方法で制御しているって訳じゃあねえよな」
「戦車だって時代の流れと共に進歩していたんだ。その流れを追ってみよう」
一キロ以上先にある鉄塔のような砲を指先でなぞるように、クウェンサーはほぼ垂直に立った砲身へ意識を集中していく。
「ようは、自重や熱で金属の砲が歪まなければ良いんだ。手っ取り早いのは砲身全体を冷やしてしまう事。サーマルジャケットって言ってさ、砲身の上から一回り大きい水筒を被せて、水の力で常時冷やす仕組みなんかも作られていた訳だ」

「じゃああれもそうだってのか？」

「いや、サーマルジャケット自体は失敗作だったんだ。その『弱点』を克服しているか、あるいはさらに後の時代の仕組みを使っているか」

「例えば？」

「砲身に小さな鏡をつけて、根元から沿うように赤外線レーザーを飛ばす。反射光を検出すれば歪みが分かるから、照準情報を修正して発射すれば良い。今、俺達が使っている戦車にもこの仕組みが使われているはずだ」

ただ、どちらの方式を突き詰めているかは、ここからでは分かりにくい。

クウェンサーは携行ミサイルとセットでついていた薄型モニターを軽く振りながら、

「ヘイヴィア、これ使って軍のデータベースとかにアクセスできないのか？　諜報部門だって『メビウスインフィニティ』については調査していたはずだろ」

「報告書に赤丸つけてここが弱点ですなんて書いてあると思ってんのかよ。だとすりゃもうちっとまともな作戦になってたはずだぜ」

「……、」

クウェンサーはわずかに沈黙した後、

「……それなら、軍のデータベースじゃなくても良い。普通のネットは？」

「おいおい、この局面でグラビアアイドルの水着ブログでも確認したくなっちまったのか

よ⁉」

「そうじゃない。……『情報同盟』の第二世代『バンドステーション』。確かあいつは、超高額懸賞金をつけた世界放送のテレビ番組で、オブジェクトの弱点を一般人から割り出してもらうための機体だったよな？　その公式サイト、覗いてみる気はないか」

二人してあちこち設定をいじくり回し、何とかして薄型モニターで普通のネットに接続できるよう環境を整える。

サイトのアドレス自体は簡単に取得できた。『バンドステーション』の機体表面にデカデカとペイントされていたのだ。

世界中から広く情報を集めるため、アクセスに必要なＩＤやパスワードなども必要ない。

ただし、

「マジかよ……。この圧倒的な書き込み、これ全部今から目を通していかなくちゃならねえのか？」

「一〇億人単位で宝くじよりド派手な懸賞金を奪い合っているんでしょ。やっぱり一番恐ろしいのは人間の欲望だよ」

「俺らに言えた義理じゃねえがな。……にしても、ほんとに役立つのか？　見渡す限り『安全国』のド素人って感じじゃねえか」

「それについては『学生』の俺も人の事は言えないけどね」

幸い、優先度の高い……つまり高額懸賞金に『近い』順に書き込みは色分けされ、ランクが割り振られているらしい。トップの意見を参考に、踏み台に使わせ、ルーキーがさらに真実に迫る。そういう構図を作る事で作為的にデッドヒートを促(うなが)しているのだろう。
その優先度の一番高い『要注目グループ』だけを目で追い駆(か)けていくと、
『砲身(ほうしん)全体の熱分布が極端(きょくたん)に低い。おそらく砲を大きな水筒(すいとう)で取り囲んだサーマルジャケットが使われているはず』
『砲身、根元から三分の二の位置に、ぐるりと囲むような格好で複数の突起あり。赤外線レーザー用の鏡かもしれないが、衝撃波(しょうげきは)で割れてしまう程度のものを使用しているとも思えない』
『サーマルジャケットを使っている場合、お風呂のお湯が表面ばかり熱くなってしまうのと同じように、水筒の熱分布の偏(かたよ)りが欠点になる。スクリューやジェット噴射(ふんしゃ)などを使って、絶えず中身の液体を攪拌(かくはん)している？』
ヘイヴィアはうんざりした調子で画面から目を離した。
景色の向こうに広がる本物の怪物へ視線を投げながら、
「結局どっちなんだっつの。まさかサーマルジャケットとレーザーの両方を使っているなんてオチじゃねえだろうな」
「別にそれでも良いんだ」
クウェンサーはそう答えた。

「たとえ両方併用していたとしても、あるいは夢の新技術でサーマルジャケットの熱分布を逆手に取って『自由に砲身を歪ませて命中精度を向上させる』ようなものだったとしてもだ。どんな場合だって結局はレーザー光で得る情報に頼って照準情報を修正しているのは変わらないんだ。だったら、そこをぶっ壊せば良い。赤外線レーザーの発振器か、反射鏡を叩けばヤツの主砲は使い物にならなくなるぞ。どんなに破壊力があったって、当たらなければ意味はないんだからな」

「そういや、敵方にわざと傍受させた欺瞞報告の中で『黒い煤のせいで』動作不良に陥った、みてえな事を言ってたよな。あれで向こうが逆上したとなると……」

「反射鏡を汚される、なんて突破口を思いつかれるのを嫌ったのかも？」

「でもよ、ネットの素人だって『ただの鏡』が弱点な訳はねえって言ってるぜ。そんな簡単なもんでもねえんだろ」

「だから現場の俺達が帳尻を合わせよう。あいつが焦った理由は必ずあるんだ、行くぞヘイヴィア」

「行くってどこにだよ⁉」

「ここから見て分からなければ、答えが見える所まで」

言うなり、クウェンサーは遮蔽物を出て『メビウスインフィニティ』へ近づくルートを進んでしまう。

呻きを発するヘイヴィアだが、結局彼もついてきた。

「……そろそろ一回くらいテメェを見捨てる選択肢が出てきてもおかしくねえと思うんだ」

「毎度自分がわがまま坊主を助けていますみたいな口振りだけどさ、俺がいなかったらそっちだってとっくに死んでいるんだからね」

そんな事を言い合った時だった。

ガゴンッ、という鈍い音と共に、三連続の主砲の一番端が前のめりに倒れていった。垂直の鉄塔のようだった超大型レールガンが戦車のように水平に角度を変えていく。

「おい、何だ、倒れていくぞ、おいあれ何だよクウェンサー!?」

「倒れているんじゃない、構えている……?」

砲身はこちらを狙っている訳ではない。

だが、

「……やばい」

ゴンッッッ!!!!!! という爆音と共に、恐るべき速度で金属砲弾が放たれた。その空気を割る余波だけで、馬鹿二人は勢い良く草の地面へ吹き飛ばされる。

その時、『正統王国』側のオブジェクトは、集中砲火を浴びる『ベイビーマグナム』と、多少のダメージを浴びても問題がないくらい膨らんだ『ロイヤルレジデンス』がその盾になる形で防戦を強いられていた。

そこへ、水平に、砲弾が飛ぶ。

いいや、厳密には横に倒した数字の八、無限大、メビウスの輪の軌道で。

一度『ロイヤルレジデンス』のすぐ横を突き抜けた金属砲弾は、はるか遠方で大きく弧を描いて再び飛来する。真後ろから『ベイビーマグナム』を付け狙う。

破滅の音が戦場に響き渡った。

七つの主砲を支えるアーム、その接続が集中する機体後部へと砲弾が衝突する。

「くそっ‼　後ろから火花が散ったぞ⁉」

「なんて野郎だ……極大の金属砲弾をブーメランにしやがったんじゃねえか、あれ……⁉」

倒れたまま、背中を強打されたような息の詰まりも無視してクウェンサー達は叫んだ。

今の現象を全て肉眼で追えた訳ではないが、『ベイビーマグナム』の後部接続ジョイントから凄まじい火花が散ったのは確認できた。まだ動いているが、かなりのダメージを負っただろう。最悪、主砲は全て駄目になったかもしれない。

踏み倒した草の上から起き上がりつつ、クウェンサーは自己暗示でもかけるように口の中で呟く。

「……大丈夫、動力炉までは貫かれていない、本来通りの使い方で重力の上乗せをしなかったから、破壊力も落ちたんだ、だから大丈夫……」

「人の心配する前に俺らが粉々になっちまうよ‼　……ん、何だこりゃ……？」

ヘイヴィアは文句を途中で切って、頬についた冷たい感触を手の甲で拭った。
雨かと思ったが、違う。
手の甲についていたのは、今にも溶けかかっているが、雪の結晶のようなものだ。
「ほんとに何だこりゃ？　ここは常夏の南部アフリカだっつーのに……」
「待て。サーマルジャケットの中身が漏れている、って訳でもなさそうだ。でも特殊冷媒じゃないとしたら、こいつは一体何の氷なんだ？」
改めて注意深く『メビウスインフィニティ』の統べる景色を観察してみる。と、はらはらと舞い降りる白い綿のようなものがいくつもあった。やはり、それは水でも氷でもなく、雪といった単語がピタリと当てはまる印象だ。
草の葉へと落ちたそれには触れず、クウェンサーは宝石商が使うようなルーペを取り出す。元々は、大破して放置されたオブジェクトからテクノロジーを盗めないかと持ち込んだ私物の一つだ。もちろん軍規違反なのでバレたらフローレイティアに尻を蹴られる事必至である。
「やっぱり氷でできた一二〇度の集合体……雪の結晶で間違いないみたいだ。どれもこれも同じ形をしているようだけど」
「自然に降った、って訳じゃなさそうだぜ。どこだ？　『メビウスインフィニティ』のどこが凍ってやがる!?」
「……こいつが降ってきたのは発射のタイミングと同じだった。だとすると、やっぱり主砲関

連か？　砲弾の表面が氷でコーティングしてある？　それとも砲身の内部全体……？」
「あっ、おい!?」
ヘイヴィアが思わず声を荒らげたのは、クウェンサーが得体のしれない氷の結晶を舌で舐めてしまったからだ。
「味はない……。だとすると違うな。主砲はレールガンだ。砲身内部や金属砲弾を氷でコートしているなら、絶対に伝導率を高めるために塩を使う。でも、だとするとこいつは……」
言いかけて、クウェンサーの口が止まった。
慌てたように双眼鏡を摑み、改めて間近から『メビウスインフィニティ』の主砲を見上げる。
「……、あった」
「どこに、何が？」
「砲身の側面についている小さな出っ張り。レーザー光を使って歪みを検出するための反射鏡だ。あいつはガラスの代わりに雪の結晶を吹きつけて鏡を作っていたんだ!!」

13

出っ張りは、せいぜい手鏡くらいのものだ。
レーザー光を使って自重や熱による砲身のたわみを検出する方法は便利だが、当然ながら万

能ではない。
その性質上、反射鏡は必ず外に露出していなければならない。
鏡は鏡なので、簡単に割れる。
砂塵や塗料などで汚されてしまっても効果は激減する。
そして照準情報修正の要なので、ここが潰れてしまうと弾が当たらなくなる。狙撃銃のスコープを割ってしまうようなものだ。
『普通の戦車』なら、それも大した問題にはならなかったかもしれない。壊れるたびに交換すれば済む話かもしれない。だがオブジェクトは『核にも耐える』事が前提の兵器だ。表面一帯へ均等な熱線、衝撃波、死の灰、それらの直撃を受けて壊れてしまうようなものを、『系』全体の中心となる主砲へ据え置く訳にはいかない。
「だから『メビウスインフィニティ』は新しい反射鏡を作ったんだ」
クウェンサーは、ごくりと喉を鳴らしながら言った。
「絶対に壊れない鏡を、じゃない。何度壊れたってすぐに上塗りできる鏡を、だ。雪の結晶は、空気中の塵に水分が集まって凍りついたものだ。これはおそらくナノ技術で核を作って、その周りへ過冷却水を吹きつけて完成させたんだ。普通の雪と違って『たまたま』こんな結晶になったんじゃない。フォトニック結晶みたいに、レーザー光をねじ曲げる最適な形にデザインされた人工雪だったんだ」

「そんなもん……どうすりゃ良いってんだ？」
ヘイヴィアは困惑した調子で、
「理屈は分かった。でも弱点がねえだろ！　ありったけのミサイル撃ち込んでぶっ壊したって、塗料だの何だのぶっかけて表面を汚したって、次から次へと吹きつけりゃあ『新しい反射鏡』ができちまうんだ。無限に増え続ける鏡なんか相手にするだけ無駄じゃねえか!?」
「……本当にそうかな？」
ニヤリと笑うクウェンサーの取った行動は、ヘイヴィアの予測を完全に裏切った。
自信満々なくせに、彼は薄型モニターを手に取ったのだ。
例の『バンドステーション』の超高額懸賞番組の公式サイトだ。
「おい、ここまできてまた他人の知恵に頼るのかよ？」
「逆だ」
クウェンサーは即答した。
「ここまで命張って、もらうものが薄給だけじゃ物足りないだろ。俺達も『答え』を書き込んで一攫千金狙ってみないか？」

14

いよいよお姫様は追い詰められていた。
『ラッシュ』を始めとした複数のオブジェクトからの一斉攻撃に、『メビウスインフィニティ』が行ったブーメランのような水平射撃。二重三重に折り重なった攻撃に、徐々に回避が追い着かなくなってきているのだ。
そもそも、『クリーンな戦争』はオブジェクトの数が全てだ。
一対二でも絶望的、一対三なら戦闘状況を作るな。そういう風に教えられるくらいだ。
速いか遅いかの違いで、いずれ窮地に追いやられるのは分かっていたはずだった。
『あらあら。たのみのつなの「しゅほう」はつかえない……ふりをして、こちらをだましうちするチャンスをうかがっていますわね。ですが、そうしたかけ引きにおいて「情報同盟」にかなうとでもおもっているのですか。おほほ』
「とことんバカなヤツ……。そうやって自分でせんたくしをせばめても、さいごのさいごにはたった1人で『メビウスインフィニティ』に叩きつぶされるだけなのに」
『あらあらあら！　げんばでなぐり合うだけがせんそうとでもおもっているんですか。やばんな「正統王国」のエリートはこれだから』
「……？」
『わたくしにはリセットボタンがあります』
連速ビーム式ガトリング砲……一発一発でシェルターを抉り取るような電子線を数千数万と

束ねた主砲をばらまきながら、『情報同盟』の死神は機材越しに笑っている。
『ここはせかいさいだいのせんじょう。でも公には「ごうどうぐんじえんしゅう」でしかない。この2つを、上手につかう。本当にあぶなくなったらふくすうのルートからしんじつをリークさせ、いっぱんたいしゅうに「せかいたいせん」クラスのたたかいがおきていることをしらせる。そのためのしょうこえいぞうは、もう1きの「ＥＣＭ１１０」があつめている』
「あなた……」
『おほほ。せかいがパニックにおちいったら、「クリーンなせんそう」どころじゃありませんものね？　そうなったら「上」は引きつりわらいであわててあくしゅして、なかよしこよしをアピールしなくては「安全国」はほうかいしてしまいますものね？　だから、これはリセットボタン。1回おしてしまえば、全てのオブジェクトは下がらなくてはならないというわけですわ』
「……はじめからまけるのをおり込みずみで……。しっぽをまいてにげるうらぐちをよういして、それでかちほこっていたっていうの⁉」
『それが、せんそうというものですわ。チェスはあいてのキングをとるだけでなく、自分のキングをとられないようにするゲームなのですから』
殺すだけ殺して。
笑うだけ笑って。
自分の命に危険が及べば、即座にリセットボタンを押して安全に立ち去る。

クリーンな戦争。

自前の兵力は一切（いっさい）傷つかず、ピクニック気分で海外遠征（えんせい）を行う理想形の戦争。

「……反吐（へど）が出る」

『おほほ。ついじゅうするほへいたちを守れもしないエリートにはお似合いのせりふですわ』

その時だった。

多数の軍用回線と、それらに混線する民間放送がごちゃ混ぜの音の渦（うず）を作り出す中に、新しい放送が割り込んできた。

『情報同盟』の『バンドステーション』――おそらく彼らの正式名称では『ＥＣＭ１１０』――の高額懸賞（こうがくけんしょう）番組だ。所詮（しょせん）は敵国の放送局が仕向けているものなので嘘（うそ）の情報が書き込まれている危険性などを鑑（かんが）み、今までお姫様はあまり重要視していなかったが、司会者の口振りはこれまでの落ち着いたトーンから一変していた。

『ただ今、非常に有力な情報が投稿（とうこう）されてきました。おおっと、今回はこれで決まってしまうのか!?　投稿フォームの受け付けは引き続き開けておきますが、ひょっとするとここでドル札のバスタブは流れてしまうかもしれません!!』

怪訝（けげん）に思っているのは、お姫様だけではないらしい。

通信装置の向こうから、おほほの声が聞こえてくる。

『……おかしい。わたくしたちがせっていしていたリセットボタンはこんな形をしていなかっ

たはず……』

こうしている今も、複数のオブジェクトが入り乱れる高速戦闘は続いている。

そんな中、彼女達の耳に遠く離れた『安全国』の放送が飛び込んでくる。

『では問題の「新説」はこちら、「正統王国」のビリーザキッドさんから。……「メビウスインフィニティ」は砲身のたわみを検出するためにレーザー光を使っているが、その反射鏡にナノテクと過冷却水を利用した人工雪を採用している。普通ならどれだけ割ってもどれだけ汚しても新しいものを次から次へと吹きつけるため、反射鏡を破壊してもらちが明かない』

「……」

『ただ、天然だろうが人工だろうが、雪の結晶は空気中の微細な核に過冷却水を掛ける事で膨らんでいくものだ』

「……、まさか、これって」

『ナノテクを使った微細な核の構成や形状を調べた上で、わざと違った形の核を製造、それを反射鏡の辺りにばらまけば、間違った反射率の鏡を作り出す事ができる。そうすれば主砲の照準機能は台無しになり、「メビウスインフィニティ」はでくのぼうになる。そいつを今から実地で証明してやる、だそうです。楽しみですね！　ＣＭ挟んじゃいましょうか⁉』

現場のクウェンサーとヘイヴィアは大忙しだった。
「ほんとにこんなのでオブジェクトを倒せんのかよ⁉」
「兵器だってシステムの一つだ、パソコンのエラーと一緒で予期せぬ状況にはとことん弱い。それが大きいか小さいかなんてのはどうだって良いんだよ！」
彼らが行ったのは簡単な事だった。
『メビウスインフィニティ』の周辺に撒き散らされる人工雪をとにかく集める。最初は宝石商が使うようなルーペを使って形を確かめようとしたが、すぐに諦めた。これを溶かせば『同程度のサイズの物質』を相当数確保できる事は分かっているので、サバイバルキットの中にあるステンレスのカップへと注ぎ込み、まずは下から火で炙って水分を徹底的に飛ばす。
「いつでも油を使えるように金属製のカップを持っておけ、か。あのコオロギ教官のアドバイスに感謝しないとな」
「いつどこで何が役に立つか分からねえからサバイバルは怖ええんだ」
微細な核だけになると、それはカップの底が見えなくなる程度に溜まった胡椒のようだった。そこへスプーンを差し込み、カップの底をゴリゴリ削るように動かす。顕微鏡サイズの核を意図的に破壊し、その形状を変えてしまう。
「最先端のナノテクに対して丸っきり家内制手工業だぜ。どんな形に核の形状が変わっている

かも確認できねえってのに……」
「『核の形が変わる事さえ分かれば』後は何でも良いんだ。間違った雪の結晶ができたらレーザー光は乱反射してしまうんだから。……それよりヘイヴィア、ミサイルの方は？」
「『スリングショット』の方はいつでもオーケー、爆薬でも接着剤でも何でも詰め込める魔法の弾頭部分は特等席を開けて待ってるぜ。で、こいつを詰め込みゃ良いってのか？」
「弾は二発だ、でもチャンスは一度だけ。狙いは砲身側面の中ほどにある反射鏡形成部分よりもわずかに上の方だ。対空レーザーに撃ち落とされるのが前提で、核の粉末が反射鏡に覆い被さるような格好になれば良い。後は向こうの過冷却水が勝手に人工雪の結晶を作ってくれるよ」
「あぁくそ、主砲が一つだけ水平に倒れてなけりゃあ、まとめて同じラインを狙えたかもしれねえのにな」
「そういう事。水平に倒れているヤツに一発。並べるように垂直に立っている二門の間に一発。外せば終わりだ、なんか必勝のジンクスあるなら今の内にてんこ盛りにしておいてくれ」
「へえへえ！　ネット口座に懸賞金入ったら何に使う？　世界最高金額の宝くじに匹敵だろ。月に別荘建ててトップレスの姉ちゃんまみれにしたって有り余るぜ」
「そこで使い切る事考えるからあぶく銭になっちゃうんだよ。何回かデイトレードとかで倍々に増やして、ゆくゆくはオブジェクト丸々一機買って戦争投資でもしてみるってのはどうよ？」
「かくいうテメェは投資とギャンブル履き違えて一夜でスッカラカンになるタイプだな。ほら

行くぞ！」

ヘイヴィアが発射筒を肩で担ぎ、その横でクウェンサーが薄型モニターを見据えて照準をサポートする。

ファシュッ!! という噴射音と共に細長い煙が青空を引き裂くように真上へ飛んでいく。

『メビウスインフィニティ』の後部から大きく伸びる三連装の主砲の、一定の高さまで。

直後、溶接のような閃光が迸った。

ミサイルの発射装薬が対空レーザーに焼き切られ、空中で勢い良く爆発する。

彼らは無視して次弾を装填し、続けざまに第二波を大空へ放つ。やはりそちらについても同じように撃ち落とされてしまった。

一見すれば完璧な防御システム。向こうの操縦士エリートがほくそ笑む様子まで目に浮かぶ精度。

しかしクウェンサーとヘイヴィアは互いの片手を叩いた。

「よし、予定通り!!」

「なあ、おい、だったらもう逃げようぜ。効果があったらあいつは逆上して襲いかかってくるだろうし、これで駄目なら後は地獄絵図だ。どっちにしたって逃げておいて損はねえって!!」

馬鹿二人は顔を見合わせ、それから全力で『メビウスインフィニティ』に背を向けた。背の高い草にどれだけ痕跡が残るかなど気に留めず、とにかくかき分けて距離を取る。

ツッツドン!!　と鉄塔のような主砲が爆音を炸裂させた。

衝撃波に背中を叩かれ、クウェンサーとヘイヴィアは二人して前のめりに大きく転ぶ。咳き込みながらも起き上がり、よろよろとした動きで再び走り出す。

一度成層圏まで舞い上がった巨大な金属砲弾が、発射初速に重力落下まで上乗せして天空から地上へ襲いかかる。

だが、そこには何のオブジェクトもいなかった。慌てて高速回避したのではなく、最初から何もない場所を穿ったのだ。ただ緑の平原を抉り取り、巨大なクレーターを作り出す。

「ラッキー、効果が出てる……。ははっ、これでお姫様の命も高額懸賞金も俺達のものだ！」

「おい、主砲二発目は大丈夫なのか？　あいつが何度も何度も撃ったらよ、さっきみてえに雪の結晶は衝撃で剝離してポロポロ落ちちまうんじゃねえのか。そしたら『新しいの』を吹きつけられて正常運転に戻っちまうぞ」

「例の『間違った核』はしばらく反射鏡の周辺を滞留したりこびりついたりしているから問題ないさ！　ひょっとしたら静電気なんかで砂埃とかの異物を弾く仕組みがあるかもしれないけど、同じ材質、同じサイズの粉末を識別するのは難しい。デタラメな血液を輸血しているようなものかもな！」

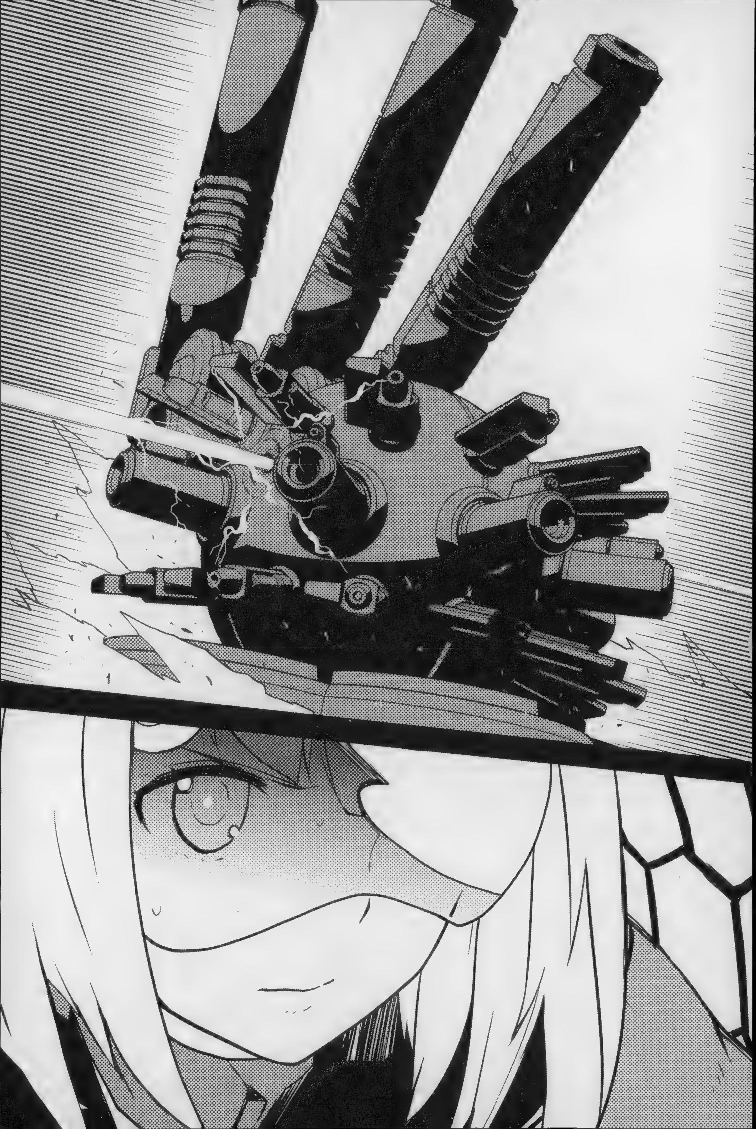
何度か試射があって、その全てが的外れな場所へ落ちるのを確認したのだろう。

『メビウスインフィニティ』がギチギチと蠢く。

衝撃波が炸裂するたび、派手に地面へ転がり続けた馬鹿二人へと、球体状本体に布陣された大量の砲台が突きつけられる。
ただの機械にはない、明確な怒りが彼らの背中を炙っていく。
「ヤベえって」
ヘイヴィアが思わず後ろを振り返って、思わず凍りつきそうになった。
「マジでヤベえぞ!! オブジェクトの砲ならどれが当たったたって挽肉だ! 今さら向こうのセンサーから逃げられるとも思えねえしよ!!」
とっさに方向転換し、その辺に散らばっているオブジェクトの装甲板の残骸の陰へと飛び込んだが、どこまで効果があるかは分かったものではない。
実際に試す前に、次の動きがあったからだ。

ゴッッッ!!!!!! と。
その脇腹を突き刺すように、下位安定式プラズマ砲が『メビウスインフィニティ』を貫いたのだ。

「なん、だっ!?」
「お姫様だ……最後の最後にトドメを刺してくれたんだ!!」



ある意味で、装甲板の陰に隠れたのは正解だったのかもしれない。
音と光の定義を丸ごと覆(くつがえ)すような、圧倒的な奔流(ほんりゅう)があった。一瞬で眼球の裏側までもが真っ白に染まるような錯覚(さっかく)に埋(う)め尽(つ)くされ、どちらが上でどちらが下かの区別もつかなくなる。波間に揺れる小舟のように地面が小刻みに揺れている。クウェンサーは最初そう思ったが、実際には自分の手足が不自然に痙攣(けいれん)している、と気づくのに三〇秒以上必要だった。さらに自分の体の止め方を思い出すのに、もう三〇秒は必要だった。

16

おほほの『ラッシュ』のすぐ横を貫(つらぬ)くようにして、『ベイビーマグナム』の主砲(しゅほう)が発射された。それは安全圏(けん)でのうのうとしていた『メビウスインフィニティ』を貫き、完全に大破させたのだ。
単純に、たった一機が退場したのとは事情が違う。
ギガントハスラーは世界最大規模のオブジェクト数を誇(ほこ)る巨大な砲撃戦(ほうげきせん)であると同時に、機体に乗り込んだ操縦士エリート同士の心理戦でもあったのだから。
目下最強の『メビウスインフィニティ』は倒れた。
その称号は『ベイビーマグナム』がもぎ取った。

そして、現状でその『ベイビーマグナム』と明確に対立し、かつ、主砲を片方もぎ取られている機体はどれか？

勝ち組につくためには、何と対立しておくべきか。

『ほ、おほほ……』

「チェックメイト」

お姫様がそう呟いた直後。

残っていた機体――同じ『情報同盟』の『バンドステーション』を除く、『正統王国』の『ベイビーマグナム』、同じく『ロイヤルレジデンス』、『資本企業』の『スパイダージョスト』までもが――が一斉に、ぐりん！　と一つのオブジェクトに集中した。

「クウェンサーはちゃんとやくそくを守った。あなたなんかにはあげない」

おほほの味方である『バンドステーション』もオブジェクトの端くれだが、純粋な正面からの撃ち合いではどうしても力負けする。そして『ラッシュ』は手負いで万全の状態ではない。

そもそも総数なら三対二。ごり押しでもいつかは殺せる関係だ。

おほほの頭の中では、色々な考えが渦巻いているはずだ。

『正統王国』と『情報同盟』は二機ずつ、『資本企業』は一機。中立の『スパイダージョスト』の動き次第では多数派を奪い返す事もできる、と。

あるいは、一つだけ仲間外れの『スパイダージョスト』を真っ先に叩くように流れを仕向け

られれば、命を繋げる事ができる、と。

……だが、同時に気づいているはずだ。

お姫様が真っ先に叩いておきたい相手は紛れもなくおほほであり、そのお姫様が場の空気を全部奪ってしまっている状態なのだ、と。

選択の余地なんてなかった。

一秒のためらいが、緊急脱出の暇もなく『ラッシュ』を串刺しに、蜂の巣にしてしまう事は容易に想像がついた。

『い、「ECM110」』

だから、

『リセットボタン!!　今すぐにじっこうしなさい!!』

その一言で、『演習』は『戦争』であった旨が世界へ配信された。

ネットのツブヤキが爆発し、ニュースサイトが一挙にパンクしていく。

観覧席も『安全国』も、対岸の火事どころの話ではないと思い知らされた。

凶悪なスイッチでもって、世界最大規模の戦争を強制終了させる以外に道はなかった。

当然、目の前の敵に敗北した事を認めざるを得ない状況で、だ。

17

『予期せぬトラブル』でギガントハスラー演習が中断される運びとなり、クウェンサーとヘイヴィアの二人も大型輸送ヘリで戦線を離れる事になった。
　対空レーザー満載のオブジェクトの頭上をヘリで飛んでいくというのは、歴戦の兵士であってもなかなかお目にかかれる状況ではない。ヘリに同乗していた『正統王国』軍の歩兵の中には、カメラを使って真上からオブジェクトを撮影している者もいた。
「大柄な輸送ヘリってのは横風に弱いからよ、あんま身を乗り出していると傾いた拍子に落っこちるぞ」
　ヘイヴィアがそんな事を言ってきた。
「それにしても、リアル札束風呂だってよ。ユーロ換算で何百万だ？　ひょっとしたら一千万ユーロは詰まってるかもな。二人で分けたって幸せな人生が待ってんのは変わんねえぞ」
「今すぐ入金する訳じゃないさ。どうせ他の参加者が難癖つけてくる。向こうの番組サイドがそういうの全部蹴散らしてクレーム処理してから口座に振り込まれるんだろ。サンタさんの到来を待つようにさ、のんびり構えていようよ」
「はっは！　安定ってのは良いねえ、待っていられる余裕ができるときたもんだ‼」

「まったくだ、スローライフなんてさんざん荒稼ぎしたヤツが田舎に出かけるから意味があるんだ。負け犬がやっても打ちのめされて田舎に逃げ帰ったようにしか見えないからな！　はっはー!!」

と、『疲れハイ』みたいに空虚に笑い合う馬鹿二人の元へ、フローレイティアから久しぶりに通信が入ってきた。

『……おい。今、電子シミュレート部門から軍の回線に不正なポートを開いた挙げ句、「情報同盟」の高額懸賞番組に極めて高度な軍事機密情報を漏洩したと思しき痕跡を発見したという通達があったんだが』

「くそっ!!　もう金の匂いを嗅ぎ取ってきやがった!?」

「いいよ別に、営倉に半年くらいぶち込まれたって笑っていられるよ！　何故なら俺達には札束のバスタブが待っているんだから!!」

『残念だがそうはいかないんだ』

フローレイティアは冷え切った声で、

『戦争にもルールがある。でもって諜報部門が適切に情報収集する分には各種戦争条約が守ってくれるが、クイズ番組に機密情報を流すなんていうのは前代未聞よ。「資本企業」は「資本企業」らしく国際調停裁判所経由で多額の損害賠償を請求しているぞ。いいか、オブジェクトはドル換算で一機五〇億、私達のユーロ換算ならもう少し低めかな。お前達が「不正に」暴

いた機密情報だけで、どれだけの価値がある知財だと思っているんだ』

「待った待った待ってください!!　俺達は『情報同盟』の公式番組に投稿しただけですよ。『安全国』の奥様達がそんな風に損害賠償を請求されたのなんか聞いた事……」

『あれはグレーゾーンだ、何しろ大前提として「安全国」の一般人だからな。しかも普通は数百数千のアイデアを統合して一機の弱点を特定する。お前達みたいに、プロとして現場で動く人間が、たった一人二人のアイデアだけで、そのオブジェクトの技術情報を完全に開示するとなると事情が違う。「図面を盗んでばらまいただろう」と言われても返す言葉がないの。たとえ、お前達がやっていなかったとしても、だ』

「……、」

「……、」

『という訳で、お金が大好き「資本企業」らしい賠償額がやってきたぞ。……総額で一三〇〇万ドル。おっとっと、お前達が勝手にクイズ番組で荒稼ぎした額とぴったりだな。軍全体としては木っ端兵士のために弁護士軍団を立てて年単位で戦うなんて面倒臭いし、変に突っぱねると知財やスパイの名簿の暴露合戦に発展しかねない。さっさと払って黙らせろとのお達しだ』

「嘘臭せえ!!　吹っかけやがって、もっぺん戦争でもしてやろうか金の亡者どもめ!!」

　輸送ヘリのカーゴドアから無意味にアサルトライフルを撃ち下ろすヘイヴィアだったが、当然それで何かが変わる訳でもない。

18

『資本企業』、その『本国』を直轄統治する七つの企業体の一つ、セイレム・ロジスティクスの最高経営責任者エイカー＝キスオブローズは、オーダーメイドのジャケットを内側からびっしょりと濡らしていた。

原因はアフリカの暑さとは違う。もっと気味の悪い感情の染み付いた汗だ。

この『ギガントハスラー』は一つの大きな戦争であると同時に、巨大な兵器見本市でもある。そして兵器ショーでは具体的な軍事兵器の商談、敵対勢力へ高い技術力を突き付けて威嚇する事の他に、もう一つ、大きな目的があった。

そのものずばり、人脈作りである。

従って、八機のオブジェクトが入り乱れる巨大な戦争では、彼の属する『資本企業』が勝利するのが大前提だった。そういうシナリオで立ち振る舞ってきた。

それが、全て、目の前で瓦解した。

一瞬前まで強気に拳を振り上げてきたエイカーは、その瞬間から道化に成り下がった。礼服やドレスの紳士淑女、あるいはベレー帽に胸へ大量の勲章をつけた高級軍人達の、上っ面だけの憐憫の顔が今でも脳裏に焼き付いている。それは彼の胸の中にだけある処刑リストに名

を登録する行為と同義だった。

（巻き返す……）

人体の理想からはやや外れた、『恰幅の良い』体つきに、奇麗に整えられた白髪と同色のひげ。色が抜けてそうなった、というよりも、生まれた時からこんな色をしていたのではないかと思わせるほど自然な老化がそこにあった。

その眼球だけが、ギラギラとした光に満ちている。

（何としても、どんな方法を使ってでも、ギガントハスラーで失った印象をこの場で取り戻す！　たとえ、それが大規模なアクシデントを自作自演するものであったとしてもだ!!）

頭の中の細い線が焼き切れそうになるまで熱を帯びるエイカー＝キスオブローズの目の前で、運転手が黒塗りの高級車の後部ドアを開けた。礼も言わず、チップも払わずに中へと乗り込んだエイカーは、ちょっとしたバスほどもある空間で、ソファに身を預けながら小型冷蔵庫から冷えたシャンパンのボトルを取り出す。

直接ではなく、小さなマイクを使って運転手に声を掛ける。

「これから先はどうなっている？」

『兵器ショーと関連しての、特別退避訓練となっております』

「そんな事は分かっている！　どんなアクシデントを演出して私の株を、いいやセイレム・ロジスティクスの株を上げるのかと聞いているのだ!!」

『全て計算しております。先の戦闘のイメージは払拭され、必ずやあなたが舞台の中心に立つでしょう。明日には世界が新しい歴史に驚きますよ、CEO』

「……理解できていれば良いのだ。いや、あくまでも私のためではなく、セイレム全体の話をしているのだがな」

厳密には、その男に仕事とプライベートの区別はついていない。グループの敵は人生の敵であり、自分の勝利はグループの勝利だ。そういう風に考えている。いわゆる『仕事を取り上げられたら何も残らないヤツ』の典型である。

だから、せわしない手つきでオーディオセットをいじくる彼は、こんな些細な放送にも我慢ができなかった。

『……セイレム・ロジスティクスが提唱する新時代ネット通販サービス、通称「銀の鍵」。これは地球のどこからスマホで注文しても、一二時間以内に必ず商品を届けるという画期的なものです』

「何だ、これは」

『その実態は空中給油機を利用した多様な航路の策定にありますが、つまりそれだけ大量の燃料を消費する、という大きな闇も含んでいるようです。大量の燃料を使うという事は、それを運ぶタンカーの航路を拡充させる必要があります。インド洋やパナマ運河などを巡る国際紛争にも、意図の有無に拘らず同社が強い影響を及ぼしている可能性が示唆されており……』

「どうなっている、オーディオセットが壊れているぞ！　どれを押しても反応がない、電源を落とす事もだ！」

激昂し、顔を上げて、そこでようやく彼は気づいた。

黒塗りの高級車は、エイカーの見た事もない場所を走っている。

老人が今まで眺めてきた、きらびやかな国際空港、高級ホテル、カジノ施設などとは雰囲気がまるで違う。表を五分でも歩いていたら、顎に拳を叩き込んで金歯を奪いに来そうな連中ばかりが集まっているような区画だ。

「……もう一度聞くぞ。どうなっている？」

『簡単なもんだ。北極圏の「第六の軍隊」騒ぎに、ギガントハスラーの哀れな惨敗。ま、戦況を引っ掻き回して挑発するために、わざと「正統王国」の第一世代の足元で地下水脈を掘り当てたり、色々努力はしてきたがね』

運転手の声は一転して、嘲るようなものに変わっていた。

『しかし、それを置いておいてもどうかと思うぞ、CEO。これはそういう訓練なんです。そう伝えておけば国家元首並の権力者を簡単にさらえる。トップのわがままで計画が変更されました、詳細は話せませんと言っておけばシークレットサービスも道をあけてくれる。ワンマン経営っていうのも善し悪しだよな、会長？』

「お前は……？」

エイカーの声には疑問の色があったが、それは相手の正体を訝しむものではない。
何故、その声の持ち主が生きているのか。そういう疑問だ。
そもそも、ここまで鮮やかな誘拐劇は、下手人が口で語るほど簡単なものではない。その実現のためには、数々の障害を乗り越えなくてはならないはずだ。それは単純にエイカーの周辺の警備状況だけの話に留まらない。ギガントハスラーという一つの戦争が、下手人の望んだ通りに進んでくれなければエイカーはここまで焦らなかった。いいや、ギガントハスラーを行うきっかけとなった、負の心理戦たる『第六の軍隊』の台頭がなければ……。つまり、それらが全て成功しなければ、エイカーは最初のステップさえ誘導されなかったはずなのだから。
そこまでの、たった一つの目的のため、掛け値なしに世界規模の綱渡りを軽々とこなしてみせる人間を、エイカーは一人しか知らない。
対して、運転手の男は続けざまにこう告げた。

『一つ、セイレム・ロジスティクスの新サービス「銀の鍵」に呑み込まれた哀れな男』

『二つ、すでに引退してパナマ運河近郊のソベラニア方面で小さな家庭を作って第二の人生を送っていたが、お前達の金にまみれた戦争で全てを奪われた虚弱な元諜報員』

『三つ、俺がニャルラトホテプって名乗っても、まぁーだ自分が殺される理由が分からねえのかよ、アザトゥース大先輩？』

ここからが本番。

合同軍事演習の枠を超えた、クリーンでもなければ管理もされていない戦争が幕を開ける。

『資本企業』の『本国』。

直轄管理を行う七つの巨大企業体、７ｔｈコアの一角、その頂点。

『正統王国』換算ならば国王クラスの重鎮。

ＣＥＯの命を中心に据えた、世界を焼き尽くす狂乱が。

第三章　咲き誇る第六の軍隊　〉〉ソベラニア方面動乱介入

1

世界の海洋交通の玄関、パナマ運河の鍵を握るとされるソベラニア動乱。その『小奇麗な大義名分』はこんなものだった。

中米、ソベラニア方面には反オブジェクト勢力の隠れ家がある。

彼らは『安全国』の大都市に対する破壊工作……いわゆる大規模テロを専門とする特殊コマンド部隊を秘密裡に養成している。

ソベラニア方面から陸なりに北上すれば、すぐそこは『資本企業』の『本国』である北米大陸西側となる。

洗剤やガスボンベなど身近にあるものから殺人兵器をいくらでも作り出す特殊コマンド部隊は高度な密入国技術も有しており、何より幽霊のように掴みどころがない。都市警備を担当する警官隊ではどうにもならず、秘密裡に動く諜報機関が動いても捕捉できるかは五分五分。

一度入り込まれたら『安全国』のブランドは崩壊する。いくつの街が瓦礫の中に沈んでいくかは想像もできない。

だから、その前に叩け。

北上作戦が決行される前に、先んじて殺せ。

「……特殊コマンド部隊なんて、どこにもいなかった。訓練キャンプの正体は、お前達『資本企業』のツアー会社が用意した、大自然の中でのネット断ちコースに過ぎなかった。自前で若者達を用意して、彼らの知らない所で悪者としての体裁を整える。大したやり口だよ、大仰な報告書と加工された写真を使って、いかにも恐ろしい戦闘集団として登録していった訳だ」

吐き捨てるように、その男は言った。

鋼鉄の壁に囲まれた四角い空間は、全てが闇に塗り潰されていた。

「パナマ運河が欲しいからお前ら皆殺しにする、じゃ大国の看板に傷がつくからな。国際社会と折り合いをつけるっていうのも大変だ」

「……、」

「だがその茶番劇のせいで、俺の家族は死んだよ」

その声はあくまで平坦で、怒りに染まった叫びとは全く違った凄みがあった。

一〇〇の顔を持つとされるその男にとって、定型の表情など何の意味も持たないのだろう。

「なお笑えるのが、俺にはニャルラトホテプとしての技術があったのに、そいつをすっかり忘

れて目の前で家族を殺されたってトコだ。小さな家庭に殺しの技術を持ち込むのが怖くてな、自己暗示をかけて奇麗サッパリ封印していた。分かるか、なあおい？　俺はな、ニャルラトホテプの封印を、家族を殺されたショックで思い出しちまったって訳だ。ほんの数分、いや数十秒……。解けるのが早ければ、全ては変わっていたかもしれなかったのに」

ドロドロとしたコールタールのようなその声は、男の感情や表情に直結したものなのだろう。数々の整形手術を繰り返し、人として正しい、生まれ持った顔の形を完全に忘れた男。暗闇の中で彼の顔は溶け、表情は床一面に飛び散っているのかもしれなかった。

「笑えよ」

安全なはずのゴムの刃が、それでも明確に体の中へ突き刺さるまでゆっくりと力を込めるような、その言葉。

ただの鋭い刃物よりなお苦痛と恐怖をもたらす、最悪の使い方。

「こういう時は笑うもんだぜ、ＣＥＯ。アザトゥース大先輩って呼んだ方が良いか？」

「な、ぜ」

たった、一言。

それだけ返すのに寿命を一年は搾っていそうな声色で、老人の言葉があった。

「すぐに、殺さない？」

「殺しってのは付加価値で色が変わる。路地裏で倒れれば被害者だが、戦場なら名誉の戦死、

刑場なら唾棄すべき重犯罪者って寸法でな。だから、アンタを殺すには相応しい場所が必要だ。一体どこに連れてこられたのかはもう分かっているだろう？」

「ま、さか」

「ウェルカムトゥザホーム。ようこそ、地獄と化したソベラニア方面へ」

ぎぃ、と鉄の扉が錆臭い匂いを振りまいて大きく開かれた。

そこで初めて、老人はここが船に積まれたコンテナの中だというのを知った。

そして外に広がっていたのは、一面の赤と黒。

まるで空全体が夕焼けに染まっているようだが、違う。これは全部戦火だ。地上で無慈悲に積み上げられて燃やされていく家屋の残骸が、歴史的な遺構が、広大な自然が、何よりそこで暮らす人々が、紅蓮の炎を作る薪にされているのだ。

クリーンな戦争。

そんなお題目が一切通用しない、文字通りの地獄。

セイレム・ロジスティクスとそのＣＥＯエイカー＝キスオブローズが作り出してしまった、この世の終わりの景色。

「舞台には到着した」

赤と黒に彩られた世界に、それでも『帰ってきた』という表情で全身を弛緩させるその男、ニャルラトホテプはそう言った。

ごとり、という重たい音が響く。
彼が掌を押し付けているのは、テーブルとは違う。何か……とてつもなく重たいものが敷き詰められた、木でできた巨大な樽だ。
「では始めるか。お前が喉から手が出るほどに欲しがった、パナマ運河。そこでお前を殺してやる。だからたっぷり味わってくれよ、アザトゥース大先輩？」

2

「……頭の痛い事態よ」
言葉の割に、フローレイティアはビーチチェアの上に寝そべり、大空を見上げたまま緩やかに長い足を組み直していた。
彼女はいつもの堅苦しい軍服を脱ぎ捨て、派手な色のビキニの上から真っ白なブラウスだけを身に着けている。ボトムサイドの紐の縛りが緩いのか、足をもぞもぞと動かすだけで今にも蝶結びが崩壊してしまいそうだった。
「例のギガントハスラーの真っ最中に、『資本企業』の『本国』を直轄管理する七つの巨大企業体、いわゆる7thコアの一角……セイレム・ロジスティクスのCEOエイカー＝キスオブローズが誘拐された。敵国の重鎮なんぞどうでも良いと言ってやりたいが、良くも悪くも影

響力が強すぎる。変な波が私達『正統王国』の方にまで押し寄せつつあるという訳よ」

もちろんクウェンサーとヘイヴィアの馬鹿二人は銀髪爆乳の上官の言葉なんぞ上の空である。見た目は神妙に耳を傾けているふりをしながら、その実、がっつりと真正面からワイシャツの裾（いや正確にはその中）を覗き込もうとしている。

「（……怖いよ何でフローレイティアさん急にこんなサービス精神旺盛になっちゃってるの？　大災害の前に虫の群れがどっさり移動するような感じじゃないの）」

「（……だったらテメェはどけよつーか屈んで見るな露骨すぎる‼　罠だろうが何だろうが俺はこの流れに乗っかるぜ？　ほーどっけろ、ほーどっけろ‼‼‼）」

「（……これ絶対なんかあるよ。俺達の意識を横に逸らしておかなきゃいけないような何かが待ってるって）」

とか何とか言いながらも、結局二人してフローレイティアの腰元の蝶結びに得体のしれない念を送り続ける事しかできない下っ端達。

そして彼女もさっさと話を先へ進めてしまう。

「さらったのは同じ『資本企業』の工作員らしいが、問題はヤツらが向かった先だ。空白地帯ソベラニア方面。……世界の名だたる海の玄関口、パナマ運河に隣接する、今一番ホットな戦場だ。お前達も、適当な検索エンジンを開けばトップワードにソベラニア動乱と出てくるのを目にした事くらいあるはずだが」

「？　あれ、ソベラニア方面で秘密裡に養成されていた『安全国』攻撃型の特殊コマンドを排除するために、『資本企業』が大部隊を差し向けているって話じゃありませんでしたっけ」

「コマンドの実在はかなり怪しいがね」

フローレイティアは足の指を閉じたり開いたりしながら、

「貴重なパナマ運河を挟んで、北は『資本企業』のアスエロ方面、南は空白地帯のソベラニア方面。……この二つの激突っていうのが表向きだけど、実際には『資本企業』の足を引っ張るため、『正統王国』はソベラニア方面へかなりの数の軍事顧問を送り込んでいる。『正規軍が嫌がる事』を徹底的に指導するためにね。もしも、ここにさっきのＣＥＯが連れ込まれて殺害された場合、どこに火の粉が降り注ぐと思う？」

「……一応確認しますけど、マジでやったのは『資本企業』のスパイなんですよね？」

「だけど、それを国際社会が信じるかな」

フローレイティアは生理の朝のように憂鬱な口調で、

「『資本企業』としても、とてつもないハリケーンで家を吹き飛ばされた後は、せめて瓦礫の中から他人のヘソクリが出てきてほしいと願っているはず。つまりこれをきっかけに戦争が起こる可能性があるのよ。７ｔｈコアのＣＥＯを直接攻撃したと冤罪を差し向けられれば、どの規模の狂乱がどこまで広がるかは想像がつかん。……最悪、『安全国』と『戦争国』の垣根が消失した世界大戦の始まりかもしれない。七つの企業のトップの殺害が、ヤツらの『本国』を

傷つけたと曲解されたりしたら、あながち笑ってもいられなくなるぞ」

「……、」

「……、」

クウェンサーとヘイヴィアの二人も流石に黙り込んだ。

ビキニ蝶結び効果（？）のおかげで下半身に血液が集中していなければ、今すぐシャベルを奪い合って自前のシェルターを掘り始めていたかもしれなかった。

「だから、今回の仕事は要人救出となる。……要人と言っても敵側の親玉だがね。ハルマゲドンが起こる前にソベラニア方面へ潜ったスパイと、ヤツが捕らえたＣＥＯエイカーを確保しなくてはならない。事情は大体分かっていただけたかしら？」

「ヤバい状況だってのは、まあ。でも何で俺達が……？　そんなヤバい状況だったら、それこそ頭からマスク被って胸には勲章だらけの特殊部隊でも投入するのが筋なんじゃあ？」

「誰も彼もが正しく危機を認識している訳じゃないのよ」

もう一度足を組む……と見せかけて、フローレイティアはビーチチェアの上で仰向けから横倒しに姿勢全体を変えた。さらにビキニの蝶結びに負荷がかかる。

「位置関係を説明するぞ。北は『資本企業』のアスエロ方面、南は『正統王国』が肩入れしているソベラニア方面、そして間にあるのが全長八〇キロのパナマ運河だ。こいつは南北挟んだ非武装地帯で、両軍共に足を踏み入れる事は許されない。……パナマ運河っていうのはただの

水路と違って大がかりな仕掛けがあるんだが、そいつについては分かっているか？」

「……確か、高さが一定じゃないんですよね。複数の水門とポンプを使って、水を使ったエレベーターみたいに段階的に船を上げたり下ろしたりする仕組みがある」

「それをぶっ壊してしまったらパナマ運河を奪っても意味はない訳ね。だからパナマ運河には軍人は入れない。立入を許されているのは、水門やポンプの整備保全のために働いている、国際平和団体の青十字くらいのものだ」

「まさか……」

「問題のスパイはその非武装地帯の奥深くに入り込んでいる。もちろんそれを追う私達も踏み込まなくてはならないが、バレたら国際問題は確定。民間の青十字に見つかってはならないし、見つかった場合は相当シビアな『非常措置』を取る必要も出てくる。……黒覆面の英雄サマは、トラップカメラで盗撮されて世界中に話の種を提供したり、民間人を容赦なく射殺して『見えない経歴』に泥を塗るリスクを恐れて動きたがらないって訳」

「任務拒否って、この状況で……？」

「ま、この辺りは『特殊部隊』の性質の問題ね。元々ベストコンディションで針の穴を通す仕事をこなすよう求められているから、普通の部隊よりも任務拒否の権限は高く設定されているのよ。生理だの兄妹喧嘩だの、そんな理由で後ろへ下がる事が許されているくらいにね」

爆乳の上官の言葉に、クウェンサー達は思わず呻いた。

特殊部隊なんて名乗る割に甘ったれと思うかもしれないが、どれだけ経験を積んだ兵士だって『同じ人間』である事までは変えられない。様々なマインドスイッチで人を殺す恐怖や罪悪感を断ち切る術は構築していても、そこからはみ出た事態までは耐えられない。
例えば、敵の兵士が無残に虐殺した一般人を死体袋に収めていく事ならできるだろう。
例えば、人質の救出に失敗し、その亡骸と向かい合う事だってできるだろう。
だが。
最初の最初から、自分自身の手で何の罪もない民間人の急所へ銃口を突き付けて引き金を引く……という行為は、なかなかできるものではない。
まして、それが『自分のミスのせいで民間人を殺さなくてはならない状況を作ってしまった』としたら……。
手を汚してでも時代を守る。そう決意するほどに揺るぎない正義は、その一度の失敗で粉々に砕け散る。
ただし、
「マジかよ……。冗談抜きに、ドジッ娘メイドがデカいケツで押して床に叩きつけちまった花瓶みてえに地球がバラバラになるかもしれねえ瀬戸際なんだろ。特殊な状況下で動けねえで何が特殊部隊なんだっつの……」
「それについては同意見だが、折悪く、例の誘拐劇は私達が大活躍したギガントハスラーの真

っ最中に発生した。誰もやりたがらないクソ仕事に責任を持って手を突っ込むように、とのお達しよ。呑気な准将サマの顎を叩き割らなかった私の胆力に驚いてもらえたか？」

「……時代遅れの第一世代が総勢八機も入り乱れたギガントハスラーを制したのが面白くなくて、嫌がらせでもしているんじゃないだろうな……」

クウェンサーは吐き捨てるように呟いたが、フローレイティアは肯定も否定もしなかった。

彼女はもう一度、横倒しから仰向けに体勢を変えて、

「表向きは『ベイビーマグナム』を南側のソベラニア方面へ派遣して、北側の第二世代『エクストラアーク』を長距離砲撃で牽制すると宣伝しておく。お姫様が舞台の上でスポットライトを浴びている間に、お前達には薄暗いキャットウォークを歩いて害虫を潰してもらう。暗殺と救出作戦を実行する影の主役はうちの諜報部門だが、足は引っ張るな。持てる技術を全て使って、できるだけ協力してやれ。以上よ」

告げながら、フローレイティアはほっそりとした白い足を一度大きく真上へ立てた。そのまま振り子のように揺らし、勢いをつけてビーチチェアから一気に起き上がる。ビキニサイドの蝶々は解けそうでやっぱり解けない。

そこは高級リゾートの砂浜でも、豪華客船の甲板でもなかった。

一辺二キロ四方の正方形に整えられた人工浮揚島。

戦火に包まれたソベラニア方面、その大きく弧を描いたパナマ湾に隣接する形で浮かんでい

るメガフロート式橋頭堡『ガーデンゲート』の強化ステンレスでできた地面の上に、彼女は裸足のまま仁王立ちする。

わずか数キロ先、地上どころか大空まで含めた景色いっぱいを埋め尽くす紅蓮の炎と漆黒の煙を見やりながら、コキリと首を鳴らしてこう言った。

「さて、今日も仕事が待っているぞ。盤の上に駒を並べて、紳士淑女のゲームを始めようじゃないか」

3

そんな訳で、

「……ふざけているよ」

クウェンサーはモゴモゴとくぐもった声を放った。

彼は軍服の上からさらに分厚いレインコートのようなものを頭から被らされていた。感じとしては消防士が纏う耐火服にも似た素材で、普通の迷彩服に慣れているとこのギンギラ具合が滅法心臓に悪い。どうぞ見つけてくださいとメアド付きのプラカードを掲げているようなものだった。

「今の気温何度？　ただでさえ赤道直下で、あっちもこっちもごうごう音を立てて燃えている

じゃないか。汗がすごいよ、こんなの被っていたら銃弾喰らう前に熱中症で死んじゃうよ……」
「摂氏七五度だってよ。絶対脱ぐんじゃねえぞ、外はマジでサウナ状態だ」
「天候兵器で大雨でも降らせてくれれば良いんだ。何のために開発したんだよう」
「馬鹿野郎、湿度が上がって蒸し焼きにされるだけだぜ」
　同じようにギンギラチームの一員と化して、諜報部門と同じ列に加わっているヘイヴィアがうんざりしたように声を返す。
「そもそも例の運河越しに『エクストラアーク』が張ってんだろ。センサー殺しのマント被ってなきゃ即バレで国際問題コースへまっしぐらって訳だ」
「これでまだ風上だっていうから信じられない。……ていうか、本当にこんなの役に立つと思うか？　だったらオブジェクトの時代なんてもっと早くに終わっているって」
「保険の数は多い方が良い。国の税金で賄ってくれんならなおさらだぜ」
　彼らが歩いているのはかつて鉄とコンクリートの大都市が築かれていた辺りだが、今ではもう見る影もない。高層建築は『焼ける』『崩れる』というよりも、『溶ける』といった方が近い。金属やプラスチックではなく、コンクリートをドロドロに溶解させるような事態など滅多にないはずなのに、だ。
　一本の運河を挟んで北と南の双方から、オブジェクトがバカスカ砲を撃ち込んだ爪痕だ。
　あるいはオレンジ色の川を作り、あるいは黒々と冷えて固まり行く手を阻むそれらを見なが

ら、クウェンサーはうんざりしたように言った。
「……今は何世紀だよ。クリーンな戦争はどこへ行った？」
「せめて、青十字の連中が張った難民キャンプのテントにみんな辿り着いたって信じようぜ。こんなトコに取り残されたらまず生き残れねえ。一時間もしねえ内に神様の奇跡だってガス欠になっちまう」
『これ』をやった者がいる。
しかも直接この地を蹂躙する事なく、間に挟んだパナマ運河の向こうから、立て続けに遠距離砲撃を叩き込むだけで。
「『資本企業』の最新第二世代『エクストラアーク』……か」
「信じられねえよな。下位安定式プラズマ砲使うっつってもよ、あまりの光と熱で観測機器がイカれちまうから、決定的な主砲攻撃の瞬間を押さえられねえ、だなんてよ。どんだけ高出力なんだっつの」
幸い、今回の目的はオペラに出てくるようなドラゴンキラーではない。
その目をかいくぐって非武装地帯のパナマ運河へ潜り込み、『資本企業』の重要人物であるエイカー＝キスオブローズを救出。並行して、それを妨害する首謀者のスパイ暗殺となる。
「しかも、『エクストラアーク』は問題のセイレム・ロジスティクス所属のオブジェクトなんだろ？　事がバレたらなりふりなんて構わねえぞ。国際問題なんか無視してボス猿救出のため

に突っ込んでくるかもしれねえ」

「……生き残るための最善策は、さっさとCEOのエイカーを見つけて人質に取って、恩を売りながら橋頭堡まで撤退するってシナリオか。上手くいくと思うか？」

「救出に失敗したらマジで世界大戦だぜ。連中の『本国』のCEOって事は俺らで言えば国王クラスがさらわれて殺されるようなもんだ。そんな事態になったら報復論が沸騰して、クリーンな戦争とかいう失笑モノのお題目が焼き切れちまうぜ。六〇億人大絶滅の時代がやってくる」

「使命感とか正義感とかそういう話は聞いてないよ、現実的な話だよ」

「まああれだ。オブジェクトの性能と、行く手を阻むスパイの腕次第ってトコだな」

「相手は一人で、バックにデカい組織がある訳じゃない……って話だったよね？」

「デカブツ以外は興味なしか？　諜報部門の連中の話、立ち聞きしているだけで頭が痛くなったよ。通称ニャルラトホテプ、本名は不明。あちこちで整形しまくってて過去の資料もあてにならねえときた。推定される活動期間はおよそ二〇年前後で、現在の生死も全くの不明。『正統王国』の諜報部門が急速に発達したのは、そもそもこいつがあちこち引っ掻き回したおかげで体制を強化せざるを得なかった、って訳だ。まさに『伝説的人物』だな」

「潜入スパイゲームにでも出てきそうなヤツだな……」

「知ってるかよ、得意技は『死んだふり作戦』だとさ。公式記録上だけでもすでに三〇回以上くたばっていて、ヤツを殺した報復作戦として銃殺された独裁者のボンボンまでいるって話

だぜ」
「訂正しようかな。オープンワールドのゾンビゲームの方がぴったりだ」
「安心要素が一個もねえぜ。どういうつもりで親玉のＣＥＯに噛み付いたかは知らねえが、鉛弾だの爆弾だので始末したくらいじゃあてにならねえ。おうちに帰るまでが遠足、っつーかおうちに帰るまでに何回びっくり肝試しツアーに付き合わされるか分かったもんじゃねえぞ」
ヘイヴィアの言葉を聞きながら、クウェンサーは右肩にずしりとのしかかる重たい感覚を確かめ直した。今回はいつものプラスチック爆弾ではなく、彼もスリングベルトを使って肩から特殊機材を提げている。
見た目はブルパップ式（……ようは、グリップを前方に、マガジンを後方に取りつけた方式の銃）のアサルトライフルにも似ているが、口径は二五ミリとかなり大きい。かと言って、フルオート散弾銃といった戦争反対論者が目くじらを立てるような人間ミキサーとも違う。
ある意味で、人間に直接向ければそれ以上の大惨事を演出する事もできるが。
「……役に立つのかな、これ？」
「拳銃の撃ち方も知らねえド素人にそんなもん預ける連中の気が知れねえよ。接着爆弾投射機だっけか？」
「『ウォーハンマー』……ジェリー状にした液化爆薬と信管のワンセットを壁や床に叩き込んでから、無線トリガー一つで大爆発だって。逃げ回る車にも人の背中にも貼り付け放題って話

だよ」
「おっかねえ。いつになったら平和な時代ってのはやってくるんだ……？」
「仕方がないだろ。周りがみんな摂氏七〇度だの八〇度だのの地獄なんだ。普通のプラスチック爆弾って熱湯で溶けちゃうんだよ。ここじゃいつもの『ハンドアックス』は使えない」
「あーあー、とんでもねえ理屈だなオイ。それって子供に拳銃は持たせられないから手榴弾持たせましょうって言ってんのと変わんねえぞ」
ヘイヴィアが言ったのは、単純に『ウォーハンマー』のスペックに対してだけではないだろう。レーザーポインターなどのサポートを受けるとはいえ、銃器の素人に背中を預けて『死神さんの生卵』を後頭部に叩きつけられる可能性は決してゼロとは言えない。
無線トリガーを引かない限りは大丈夫だよ、という正論は、実際に爆弾を叩き込まれた側が聞いたところで心臓の鼓動を和らげる効果など生み出さないのだし。
『見ろよ』
一列になったギンギラ軍団の一人、ステルス防護繊維のフードとくぐもった声のせいで男なんだか女なんだかも分からない諜報部門の誰かさんが、わざわざ指を差して注目を集めながら言った。
『ようやくのパナマ運河だ。ここから先は非武装地帯だから、少なくとも爪だの髪だのが焼ける嫌な臭いにこれ以上悩まされる心配はないらしい』

「……なあヘイヴィア。諜報部門のジョークのセンスってどう思う……？」
「俺は顔が見えねえヤツはキホン全員美少女に変換して乗り切る方針だから」
南北のアメリカ大陸を断ち切る全長八〇キロの巨大な運河だが、幅自体はそんなに広くはない。せいぜい五〇メートルのプールよりはちょっと広い、くらいのものだ。服を脱いで飛び込んだら、クウェンサーでも対岸まで泳いでいけそうなほどだった。
その両岸は完全にコンクリートで固められており、運河と並行するように金属製のレールも走っていた。元々は、何かしらの整備機材を運搬するために用意されていたものなのだろう。
……そして、水辺の近くに来たのに全く気温が下がる様子もない。むしろ風の通り道になっているせいか、強烈な熱波はますます勢いを増しているようだった。
大空の色を反映しているのか、運河で波打つ海水は赤と黒に染め上げられていた。夕焼けの海にも似ているが、ずっと禍々しい。心霊写真撮り放題といった感じだ。
「ひでえもんだ。運河の向こうはびっちり薄汚ねえ工業地帯じゃねえか。ソベラニア動乱が傾いちまうと、じきにこっち側にも砂漠みてえに広がってくんのかね」
まず対岸は右から左まで見渡す限り三メートル以上の高さの金属フェンスで遮られていた。しかも時間稼ぎのためか、短い距離を空けて二重に敷設されている。
さらにそのすぐ奥。
その全てが見渡す限り鋼鉄の配管や円筒形のタンク、空へと突き出す煙突の群れなどで埋め

尽くされていた。全体としては石油化学コンビナートのイメージに近い。国際空港みたいなキロ単位の敷地を全てアスファルトで地均しして、その上にコンクリートの箱や銀色の太い管をドカドカとひたすら積み重ねていったような印象か。

ただし、

「……何で向こう側まで真っ赤に燃えてんの？　せっかくの二重フェンスもバッキバキだし」

「知るかよ。泥団子を互いに投げ合っているか、あるいは『資本企業』側が炎の壁でも作ってんだろ。かくれんぼには最適な立地じゃねえか。敵を捜して殺すより、あらかじめ生存不可能領域を作っておいた方が簡単に防衛できるしな」

ともあれ、今は運河の対岸はどうでも良い。

こちら側へとクウェンサーは意識を戻す。

「ニャルラトホテプとかいうヤツの潜伏先ってどこだっけ？」

「ミラフローレス水門のすぐ近くだとさ。ここからざっと二キロもねえよ。……ただ、もういやがるぜ。運河の保全に大忙しの青十字の連中だ」

「……嘘だろ。見つかったら殺すしかなくなるっていう？」

黄色系の消防用耐火服を着た人間がちらほらと見えているのを確認しながら、クウェンサーはうんざりしたように言った。

ヘイヴィアも中腰になりながら、

「背中丸めてコソコソ進もうぜ。こんなトコでPTSD量産して一生悪夢にうなされるなんてのはごめんだぞ」

ギンギラ装備で身を隠すも何もなさそうなものだが、実際にコンクリートの岸に沿って進んでいくと、意外にバレない。もちろん物陰を利用しているのもあるが、辺り一面がオレンジ色で埋め尽くされているため、銀色の表面に映る炎の照り返しが視覚的にも一役買っているようだった。

諜報部門の先導の元、クウェンサー達はさらに運河に沿って歩いていく。

時折センサーを確認しているヘイヴィアの話によると、この辺りは瞬間的に摂氏九〇度を超す事もあるらしい。一般的なサウナが一〇〇度前後である事を考えると、三、四〇分で人が倒れるレベルだ。

「ここは火星か……。人間の生活できる環境じゃないぞ……」

「それより見ろよ、運河の向こうにそびえているデカい山みてえな黒い影。ありゃあ『資本企業』側の『エクストラアーク』じゃねえのか⁉」

オブジェクト絡みという事でクウェンサーの目にわずかな活力が戻る。が、そちらを振り返っている暇はなかった。

ゴッッッ‼‼‼　と。

次の瞬間、視界全体が真っ白に染まったからだ。

「………」

クウェンサーは、しばしの間、時間の経過を忘れていた。
口の中に冷たい液体が流し込まれる感覚が伝わり、ようやくヘイヴィアの手で水筒の飲み口を突っ込まれている事、自分が倒れていて介抱されている事に気づいた。
「うえっ、げほっ！　な、なんだ……何が……？」
「俺らの真上を『エクストラアーク』のプラズマが突き抜けやがったんだ」
ヘイヴィアの声と共に、聴覚が少しずつ元に戻っていく。
ガン！　ゴン!!　と立て続けに爆音が鳴り響いていた。『エクストラアーク』側からだけではない。こちらのソベラニア方面側にいる『ベイビーマグナム』側からも応戦するように、様々な方式の主砲が撃ち込まれていた。
彼らは絶対にパナマ運河そのものには踏み込んでこない。
天文学的な建設費のかかった巨大水門やポンプ施設……いわゆる『水のエレベーター』を破壊したら、どこまで損失を被るか分かったものではないからだ。

「今回ばかりはテメェが軟弱だった訳じゃねえ。あまりの閃光のせいで、諜報部門の連中も何人かぶっ倒れて手足を痙攣させてやがったよ。目が慣れてくると刺激も薄らいでいくみてぇだが、あんまり肉眼で直視して良いもんじゃあねえってのには賛成だ」
「冗談だろ……。いくら何でも、普通の下位安定式プラズマ砲じゃあそこまではいかないはずだ……」
「普通じゃねえ『何か』があるんだろ。何しろ『資本企業』の『本国』を管理する七つの巨大企業体、その一角の『お抱え』ってヤツなんだぜ。……おっかねえ、あんなもん絶対にかち合いたくねえよ。とっととエイカーのクソ野郎を袋に詰めて橋頭堡まで帰ろうぜ」
　カメラやセンサーが光や熱で白く吹っ飛ぶ、というのも今なら頷ける。こうしている今も規格外のプラズマが何発も発射され、クウェンサーの視神経から脳髄までをまとめて苛んでいた。『刺激に慣れる』というヘイヴィアの言は正しいようで、気絶するのだけはギリギリで防げたが……。
「くそ、こんな事なら溶接用の鉄のマスクでも持ってくるんだったな」
「汗まみれで顔面水虫だらけになっちまうよ。無駄口叩けるならもう大丈夫だな、それなら自分の足で立て。俺だってよ、野郎の看護なんて何の実にもならねえ事いつまでも続けてえ訳じゃねえんだ」
　心なしか、先ほどよりさらに周囲の熱波が強まったような気がする。

この状況ではじっくりオブジェクトのテクノロジーを観察する前に失明しかねない。クウェンサー達はふらふらになりながらも、さらに運河をなぞるように歩を進めていく。
先ほどのは『小競り合い』だったのか、やがて圧倒的な撃ち合いもなりを潜めてしまった。
そして、クウェンサー達もようやく重たい息を吐く。
『……見つけた』
言ったのは、どれもこれも同じギンギラ軍団の一人、諜報部門の誰かさんだった。
緩やかな傾斜を二、三〇メートルほど上った先。
小高い丘にある、静かな湖畔の小さな家。
……そう表現すれば聞こえは良いかもしれないが、ここは消防士が使うような耐火装備なしには一時間と生きられない、赤と黒で埋め尽くされた焦熱地獄だ。その『家』も壁の塗装がパリパリに変色していて、何より窓ガラスどころか屋根すらなくなっている。まともな人間が身を隠すような場所ではない。
『炎と黒煙の隙間から撮影した衛星写真の通りだ。あれから状況が動いていないなら、ニャルラトホテプはそこにいる』
「……確認するけどよ、『影』は二つあったんだよな？」
『画像分析では。ただ熱源反応についてはあてにならん、何しろこの地獄のサウナ状態だからな、人の体温なんぞかき消されてしまう』

　要人の生死は不明。だがここで立ち止まっている理由もない。諜報部門達は崩れかけた家へと音も立てずに接近していき、全ての出入り口の前へ速やかに展開していく。クウェンサーやヘイヴィアもそのサポートとして、裏口のドアの横に張り付いていた。

　諜報部門はあちこちのドアの隙間や割れた窓からファイバースコープを通し、出てきた映像を携帯端末へ送信し、まとめてクウェンサーがチェックしていく。

「罠はない。少なくとも、ドア蹴破った瞬間に木っ端微塵に家ごと爆発して、スパイに『死んだふり作戦』をやられる心配はなさそうだ」

　それが突入決定の最終サインとなった。

『家の内部構造はともかく、二人の位置は概算でしかない。CEOを殺害したら元も子もないぞ。誤射に注意して、速やかに全室確認するんだ。カウント3』

　無線越しに三つ数えて、全ての出入り口の錠前を銃弾で破壊し、諜報部門の人間が一斉に家屋へと踏み込んでいった。

　クウェンサーとヘイヴィアの二人も後に続く。

『クリア！』

『クリア!!』

　シュココン!!　というサプレッサーを通して押し殺した銃声が短く連続した。

　慌てたようにヘイヴィアがアサルトライフルを構えて応援に駆け付けると、すでに数人の諜

報部門が一人の男を取り囲んでいた。

銃痕は壁に空いており、ボロボロのテーブルについていた男は両手を上げていた。

青十字が使っていたものと同じ耐火服を着ているが、頭部はさらけ出している。奇麗に分けた七三分けが、どぶ川に浮かぶぬいぐるみのようにＴＰＯを不気味に無視していた。

「エイカーじゃない。ニャルラトホテプか……？」

遅れてやってきたクウェンサーが呻くように呟くと、元はダイニングだったらしいその部屋で椅子に腰かけたまま、七三分けの男はこう返してきた。

「我が家へようこそ、お客人」

「何を、言ってやがるんだ、この野郎……⁉」

「食事に招待したつもりはないが、来客には応じよう。そもそもここは俺が自分でローンを組んで購入した一軒家だ、『正統王国』側は掴んでいなかったのか？」

どうでも良い。

そう言わんばかりの勢いで、諜報部門の一人が七三分けの髪を片手で掴み、壊れかけたテーブルへと顔を叩きつけた。

さらに、その横倒しになった頭へと、ホルスターから抜いた拳銃を押し付ける。

『セイレム・ロジスティクスのＣＥＯ、エイカー＝キスオブローズはどこにいる？』

「彼は疲れて眠っているよ。何しろアフリカからの長旅だったからな」

『早く答えろ。早く‼』
「捜せば見つかる。再び目を覚ますかどうかまでは保証しかねるが。どうして俺が抵抗しなかったか、まだ分からないのか？」
激しい力で頭を押さえつけられながらも、ニャルラトホテプはどこか別の場所を見ているようだった。クウェンサーはその視線の先を目で追い駆けていく。開いたドア、その先にある廊下、別の扉。
「……、」
歩く。
ノブへ、手を伸ばす。
それだけの行為で、すでに指先が小刻みに震えていた。
何故そんな感情が湧き起こっているのか、クウェンサーには自分の心が理解できない。
何か。
安心して幼い我が子に与えていた粉ミルクの『おぞましい正体』を知ってしまった母親のような、とてつもない感情の奔流が彼の指の動きを食い止めようとしていた。
心と体が分離していくような気持ちになる。
まるで夢遊病のようにふらふらとクウェンサーはノブを掴む。
回す。

ぎい……という音を立てて、木のドアが奥に向かって開いていく。
窓のない、真っ暗な部屋だった。いや、人が暮らす部屋というより、元々は倉庫だったのかもしれない。ここだけは部分的に屋根が残っているようだ。雑多に散らばった工具や壊れた飛行機模型などの山とは別に、埃っぽい部屋の真ん中には、ちょっとしたドラム缶程度のサイズの木の樽が置いてあった。
その中に。
目一杯ギリギリまで詰められた膨大な量の小石と。
水面から顔を出すように、宝石箱に収めた卵形のブローチのように、首だけ上へ向けて体を石の中に埋められたじいさんの顔から、長い舌がでろりと伸びていた。
へたり込んで、絶叫していた。
バタバタと諜報部門の人間がやってきて、室内にあるものを眺め、そして踏み込んでいった。木の樽を大きく倒す。石の群れの大半はブロック状に固まっていた。接着剤かコールタール、あるいは溶けたゴムやカラメルなど、とにかく何かしら粘つくものを混ぜているのかもしれない。……つまり、固まるほどに隙間が埋まってギュッと締まり、埋められて身動きを取れなくなった老人を、少しずつ少しずつ時間をかけて圧搾していくために、だ。

下着一丁になった老人は、眼球は落ち窪み、頬が瘦せこけ、真っ白になった髪の毛がボロボロと抜け落ちていた。元から資料にある写真でも老いてはいたが、それどころではない。丁寧に整えられていた格式のある白髪が、風化した絨毯のように剝がれる。肌は赤や紫に変色しているが、もはや痛みを訴える事もない。死後硬直というヤツか、不自然に体を折り曲げたまま、干からびた昆虫のように転がっている。単に大量の石を使った圧搾の影響……『だけ』なのだろうか？　消息不明になってからどれくらいだ。ここに辿り着いたのは。樽に漬け込まれてから何時間？　本当に人を潰し殺すほどの変化は生じるのか。これは、これはひょっとしたら……。

（……物理的な話じゃない。こいつの死因は、心のショックなんじゃ……）

映画やドラマでは、恐怖のあまり頭が白髪になるとか、一気に老け込むとか、そんな表現が使われる事も珍しくない。

だが、半ば伝説めいたものが実際に目の前に出てきた時、ここまで恐怖を覚えるものなのか。

ニャルラトホテプ。

狂騒と精神の変容を司る、破壊工作のエキスパート。その手口。

『照合……確認』

諜報部門の一人が、呆然とした調子で呟いていた。

『7thコアの一角、セイレム・ロジスティクスの最高経営責任者だ。エイカー＝キスオブブローズ……間違いない。こいつだ、パッケージは死亡。繰り返す、パッケージは死亡!!』

クウェンサーは頭の中が真っ白になっていた。
間近の味方の声さえ、耳から入って頭で理解するまで一〇秒以上も必要だった。
単純に、人間の死体を目撃したから、だけではない。
こいつは青十字の人達と違って『ただの人』には収まらないのだ。となると、その死についても余計な付加価値が追加される事になる。
「どう……すんだ？」
ヘイヴィアが、部屋の中を覗き込みながら掠れた声で呟いた。
それはすぐに、今にも泣き出しそうなくらい絶望的な叫びへと切り替わる。
「エイカーのクソ野郎がやられちまったぞ⁉　『資本企業』の『本国』をまとめる七つの巨大企業体、その一角って事は俺らで言えば王族クラスのＶＩＰがだ‼」
敵の大将が死んだのなら、諸手を挙げて喜ぶべきではないか。
そんな意見は通らない。
何故ならば、
「これで、管理された『クリーンな戦争』っていうのもおしまいなのか……？」
クウェンサーは、氷河期を作った巨大隕石を目の当たりにしたような顔で告げた。
ここは『資本企業』と『正統王国』がしのぎを削る戦場。
もしもそこに『資本企業』の大物が連れ込まれ、殺害されたと世界に知れたら、どこの誰に

どんな疑いが向けられる事か……。
「『安全国』も『戦争国』もない、六〇億人を焼き尽くす本気の報復戦争が始まってしまうっていうのかよ⁉」

4

『死体を持ち帰れ。駄目なら穴を掘ってその中で燃やせ。ナパームかアルミの反応……とにかく化学焼夷系の手榴弾があれば完璧ね。「資本企業」側から歯型、指紋、ＤＮＡさえ照合されない状態にしてしまえば、首の皮一枚繋げられるからな』
無線越しに届いたフローレイティアからのお悩み相談・回答編はシビア極まるものだった。ガガーリンの見た青い星が炎で真っ赤に変貌するか否かの瀬戸際だというのだから、無理もないかもしれないが。
『普通のガソリンや軽油では火力が心細い、その場合は加工してナパーム化したものを使えよ。爆弾専門のお前ならそう難しい作業でもないだろう』
「……生き残るために目の前の敵を殺すんじゃない。もう動かない死体を、さらに骨が崩れるくらいに損壊しろですって……？　カニバリズムの一歩手前まで来ているぞ、そんなの」
『まだ生きて命乞いができる人間の頭にガソリンを被せるよりはマシと思うしかないでしょ

うね。あと、勘違いはするな。生き残るため、というお題目自体は一ミリも変わっていないぞ。しかも今回は六〇億人分の大盤振る舞いよ』

通信が切れた。

クウェンサーは胃袋の奥から込み上げる吐き気を必死に抑えつけ、それから折れかけた柱に軍用ブーツの靴底を叩き込んだ。

派手な音と共に、彼はようやく覚悟を決める。

「持ち帰るのは無理なんだろ……」

答えたのはギンギラ装備の諜報部門だった。

『青十字の目を盗んで逃げ帰る事を考えると、どうしてもな。ここで処分して身軽になった方が良い。裏のガレージは潰れていたが、スクラップになった車のタンクにガソリンが残っていた。ナパーム化は任せられるか？』

「クリーニング用品と日曜大工で使う塗料関係をいくつか、後は金属製のボウルとショートケーキを作るのに使う泡立て器があれば何とかなるかな。みんな主婦の味方だ、色々探して見繕うよ」

『なら任せた、私達は裏手で穴でも掘っているよ。行くぞ！』

諜報部門が仲間の何人かを連れて外へ出ていったのを見送ってから、クウェンサーは重たい息を吐いた。

そこから先は、足元がふわふわするくらいに現実感がなかった。
どう考えても辛い作業なのに、一つの作業に没頭する事で心の重圧が和らいでいくという奇怪な状況に陥っていったのだ。
キッチンは半分以上潰れていたので、金属製のボウルはダイニングのテーブルの上に置いて作業を行っていた。当然、そこには諜報部門に銃口を突き付けられて大人しくなっているニャルラトホテプが同席している。
電動式の泡立て器でガソリンをジェリー状に作り替えているクウェンサーに向けて、ニャルラトホテプは奇妙なくらい人間味のない笑みを張り付けたままこう話しかけてきた。
「色々迷惑をかけたようだったな。済まない」
「……アンタ、何で自分のボス猿に弓を引いたんだ。『正統王国』が噛むかどうかはさておいて、地球のどこかで戦争が起こるくらいの混乱は予想できていただろうが」
「このソベラニア動乱はセイレム・ロジスティクスがビジネス開拓のためにパナマ運河を独占しようとして起こされたものだ。そして、ここは俺の家だった。……家族を守る家がこの有り様になったんだ、一緒に住んでいた妻と息子はどうなったと思う？」
「……」
「妻は青十字の活動に参加していて、よそから空白地帯に流れてくるしかなかった人達の名簿を作って、戸籍と保険の登録の手助けをしていた。たった一人の息子はまだ五歳で、初めて通

でな」
う学校を今か今かと楽しみにしていたよ。それを、全て奪われた。拝金主義のクソ野郎のせい
彼の目には、クウェンサーがどう見えていただろう。
ひょっとしたら、我が子の誕生日を祝う時にも使ったケーキを作るための泡立て器で、死体を骨まで燃やすナパームを合成しているクウェンサーを。
彼は間違いなく大きな世界を窮地に立たせた。だが彼の小さな世界を土足で踏みにじっている事実まではなくせない。
「……どうでも良いだろ、そんなもん」
と。
低く、低く。間に割り込むように、恐ろしく低い声がクウェンサーの耳に飛び込んできた。
ヘイヴィア＝ウィンチェルのものだった。
「テメェがどんな人生を送って、どんな絶望を背負い込んだかなんて知らねぇよ。だからって俺らの故郷や家族まで焼き尽くされる道理になんかならねぇよ‼　こんなっ、本当に、こんな理由で世界が終わっちまうっていうのか……？　たった一人のプライベートで、間違いながらも何千年も続いてきた人類の歴史ってのがスッパリ途絶しちまうってのかよ‼」
「おい、ヘイヴィア……？」
「こんな野郎、本当に生きて連れ帰る必要なんかあんのかよ……。稀代の手品師スパイ様はい

つどんな手で縄抜けするかも分からねえんだ！　ここで額に鉛弾ぶち込んだ方が世界のためなんじゃあねえのか⁉」
「駄目だヘイヴィア、ここで撃つな‼」
「理由は何だ、世界を燃やしたこいつを庇う理由は⁉」
「ナパームだ！　ただでさえ周りの空気は摂氏一〇〇度前後でボウルの中身は不安定な状態なんだ。ここで発砲なんかしてみろ、俺達全員揃って七面鳥になっちゃうだろ！」
　チッ、とヘイヴィアは舌打ちした。
　アサルトライフルの照準から目を離す一方で、未だに引き金から人差し指が離れていない。新兵訓練マニュアルの基本さえ完全に無視した、混乱の動きだった。
「俺は逃げない」
　そこで、まさしく火に油を注ぐ勢いでニャルラトホテプなる七三分けの男はこう言った。
　口元に気味の悪い薄ら笑いまで浮かべながら。
「もうやるべき事は全て終わらせた。今さら、『この先』を思い描くほどの夢もない」
「……、」
　ヘイヴィアの両手が動き、金属バットをフルスイングするような音が響いた。
　ライフルのストックでニャルラトホテプの鼻の軟骨が潰される音が後に続く。
　ニャルラトホテプは、呻き声すら発しなかった。

諜報部門の肩を叩き、ヘイヴィアはダイニングの扉へ向かう。

「……このクソ野郎を殺す時は真っ先に俺に呼んでくれ。弾がなけりゃあ噛みついたって殺してやるよ」

「ナパームも完成した。外の空気を吸いたいなら、穴掘りしている連中に届けてくれ。ライターやマッチを使うんじゃなくて、導線と信管で起爆するようにアドバイスもな。じゃないと豪快な火柱で自分の顔を焼く羽目になる」

金属製のボウルをひったくるようにして、ヘイヴィアは今度こそダイニングから消えてしまった。

どろりとしたジェリー状の可燃物を蓄えたままの泡立て器をしばし弄び、それをテーブルの上に置いてから、クウェンサーはどかりと椅子に腰かけた。ちょうど、ニャルラトホテプの対面に位置する場所だった。

いつ何のきっかけで炎を上げるか分かったものじゃないテーブルを挟んで、クウェンサーはニャルラトホテプの顔を睨む。

「言っておくが、俺もお前の味方じゃないからな……」

「分かっているさ」

七三分けの男は、笑いながらもどこか吐き捨てるような調子で応じた。

「もしも世界に味方なんてものがいたのなら、もっと別の道を歩んでいたよ」

クウェンサーだって、こんな野郎は一〇〇回殺せるなら一〇〇回殺してしまいたい。

だが、こいつは重要な『真犯人』だ。

エイカーの死を『資本企業』がどこまで摑むか、世界の混乱がどこまで広がるかは全く予想がつかないが、『真犯人』の存在が消えてしまうのはあまりにもまずい。『正統王国』と『資本企業』がいざ水掛け論を始めてしまったら真実の価値なんて紙くず同然になるかもしれないが、それでも、ニャルラトホテプの『自白』は沸騰した世界を鎮静化させる安全装置として機能するかもしれないのだ。

こいつを殺すのは、ノアの方舟の船底にドリルで穴を空けるようなものだ。

そもそも大洪水が起きないのが最善だが、わざわざ目の前の船を台無しにするのは緩やかな自殺に近い。

「そろそろ穴の中で死体を焼く頃か。お前は参加しなくても構わないのか。見たところ、この手の扱いには一番手慣れていそうな素振りだったが」

「お前には関係ない」

「襲ってくる敵はともかく、無抵抗の死体を焼くのには抵抗があるか。十字架の下に埋める欧州式の発想だな」

「……、」

「俺は、もう妻と息子の顔を思い出す事もできないよ」

ニャルラトホテプは、どこまで本心か分からない言葉を吐き出した。
「家族のために世界を燃やした男の言う事か、と思っているだろう？　だが事実だ。どれだけ温かかった思い出を浮かべようとしても、もう真っ黒に焼け落ちた顔の表面が割り込んできてな。だから、その手が震えている気持ちは良く分かる。あの恐怖は、ビジュアルとして網膜に叩き込むべきものではない。……だが人任せで間に合うかね」
「何が言いたい？」
「『資本企業』も馬鹿じゃない。都合の悪い死体を燃やすなら、一秒でも早く済ませるべきだった。そろそろ来るぞ」
具体的な不安がクウェンサーの背筋を走るより前に、それは起きた。

ドゴッ!!　と。

ただでさえ屋根もなかった小さな家が、凄まじい衝撃を受けて今度こそ崩れ落ちたのだ。
椅子から転げ落ちる。壁が大きく崩れてくる……というより地面に対して水平に、指向性の地雷でも炸裂したかのように建材の破片が迫ってくる。ガラガラと音を立てて壁が倒れてきた。
クウェンサーは強い力で腕を掴まれ、ボロボロのテーブルの下へと引きずり込まれる。
驚くべき事に、恩人はニャルラトホテプだった。

屋根がすでになくなっていたのはプラスに働いた。降り注いだ瓦礫はテーブルを上から叩き潰すほどの量も、生き埋めにするほどの量もなかったのだ。
テーブルと瓦礫の隙間から体を引っ張り出すと、クウェンサーは耳障りな音を耳にした。
扇風機をずっと大きくしたような音。
長距離航続を行う事を前提に、敢えてジェットエンジンではなくレシプロエンジンを搭載した航空機のプロペラが風を切る音だ。
「無人偵察機だ‼」
ヘイヴィアが叫んだ。
「上から撮られた。俺らの位置も、穴の中の死体も全部見られちまったぞ‼」
ボン‼　という派手な音と共に火柱が立ち上った。こちらはクウェンサーの作ったナパームだが、今さらどれほどの効果があるかは分かったものではない。燃やす前の死体を空撮されたのでは、かえって自分達の首を絞める羽目に陥ったとも言えるかもしれない。
「なあおい、ボス猿が死んで戦争は終わると思うか⁉」
「んな訳ねえだろ！　救出作戦が報復作戦に化学変化するだけだ‼　むしろ盾になるもんがなくなっただけ、向こうも肩の力を抜いて撃ち放題だろうぜ‼」
問題の無人偵察機は既存の戦闘機に高度な演算機器を搭載したというよりも、ペーパークラフトのオモチャを巨大化させてエンジンを取り付けたようなデザインだった。それが一機だけ

でなく、秋の空を埋めるトンボの群れのように飛び回っている。いちいち数を数えて確認するのが億劫なほどだ。
「あれはミサイルを搭載している訳じゃない」
瓦礫を掘り返し、何故か諜報部門の人間を引っ張り出しているニャルラトホテプが、そんな事を言った。
「味方にオブジェクトはいるか？　場所が割れた以上、派手な砲撃支援を渋る理由もないだろう。早く対空レーザーで天空の目を全て落とさないと、向こうの『シンシア』の対人、対車両の砲撃で粉々にされるぞ」
今は熱波と黒煙が照準情報に狂いを生ませているようだが、それらもじきに修正されるだろう、と七三分けの男は予言した。
クウェンサーは眉をひそめながら、
「……『シンシア』？　『エクストラアーク』の事か。あいつは無人偵察機とリンクして俺達を間接照準しているっていうのか⁉」
「いや、どちらの呼称も正しくはないな。俺の言葉も混乱させてしまったか」
ニャルラトホテプは素っ気なく答えた。
「『資本企業』の公式書類にも載ってもいない真の正式名称は『ミスカトニック』。エイカー＝キスオブローズ……いいや、そういう身分証を作っていたアザトゥースが肝いりの大規模予算

を通して建造させた、悪趣味極まる第二世代というヤツさ」

5

ミスカトニック。

『資本企業』の第二世代の中でも、さらに非常識と呼べる資金と技術が注ぎ込まれた特別機。彼らの『本国』を直轄管理する七つの巨大企業体、7thコアの一角を代表するオブジェクト。

戦火の空を反映させた紅蓮の湖畔から眺めているだけで、パナマ運河のはるか向こう……崩れ落ちた巨大な工業地帯の奥に佇んでいるはずの威容がくっきりと分かる。

奇怪。

その一言を引き出すのは、『ミスカトニック』の主砲を眺めるだけで十分だった。

機体後部から放射状に広がるように、巨大な機械の花が咲いていた。人の頭に麦わら帽子を引っ掛けたように、やや上方に寄っている。いいや、その花は巨大なリールとそこから伸びた直径二メートルもの太さの特殊なチューブだ。全く同じものが八つ、時計の文字盤のように円形に布陣されたそれらは、まるで胃カメラに使うファイバースコープにも似た動きで自在に身をくねらせている。

まるで蛇か……あるいは、海洋の軟体生物に見られる八本の触手だ。

【エクストラアーク】
EXTRA ARC

全長…200メートル

最高速度…時速540キロ

装甲…2センチ厚×500層(溶接など不純物含む)

用途…超高温制圧兵器

分類…水陸両用第二世代

運用者…『資本企業』7thコア「セイレム・ロジスティクス」

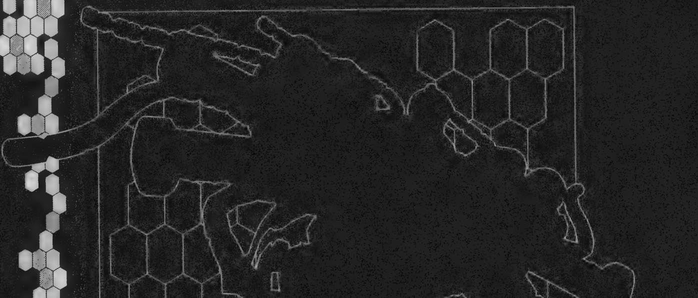
仕様…エアクッション式推進システム

主砲…特殊ファイバー式可変プラズマ砲×8

副砲…多用途レールガン
(対人、対空用の金属砲弾の他、UAVなども発射可能)、
コンテナ式近接焼夷弾散布機など

コードネーム…エクストラアーク(規格外の超高温プラズマから)
『資本企業』書類上の正式名はシンシアだが、
真の名はミスカトニックというらしい。

メインカラーリング…銀



EXTRA ARC

『ミスカトニック』の主砲である高威力のプラズマ砲は、あのチューブを通って発射される。様々な位置と角度とタイミングから、相手の動きを封殺するような格好で。
七本のアームによって支えられ、一点から拡散と集束を使い分けるお姫様の『ベイビーマグナム』とは、似ているようで全く違う。
だが、その機体構成を悠長に分析している暇もなかった。
死の照準が、無人偵察機という形で分離してクウェンサー達を追い駆けている。
「ヤべえ、森だ！　森へ駆け込め、クウェンサー!!」
ヘイヴィアが走りながら、身振りで学生へ指示を飛ばした。
「とにかく空からの視界を遮れる場所まで走れ！　幸い、この熱波と黒煙の中なら熱源サーチは使い物にならねえ。カメラさえ振り切れれば生き残れる見込みだってあるぞ!!」
クウェンサーはとっさに傍らのニャルラトホテプの手首を強く掴んだ。
七三分けの男は意外そうな顔で、
「別に、置いて行ってくれれば良いものを」
「どさくさで『死んだふり作戦』っていうのはナシだ」
生きる意欲を見せない亡霊を引きずるようにして、クウェンサーは走る。
頭上では、いくつもの無人偵察機が焼き切られて爆発したり墜落したりしていた。『ベイビーマグナム』からの対空支援だ。だが生き残ったものが、あるいは墜落しながらでもカメラの

レンズが軋んだ音を立て、逃げ惑う兵士達の位置を『ミスカトニック』へと送信していく。
ツッツドン!!　という爆音があった。
主砲の壮絶なプラズマ砲とは違う。おそらく大小無数のレールガンやコイルガンなどが一斉に天空へ放たれたのだ。
まさしく、それは雨だった。
照準の誤差を無視して標的を叩き潰すために放たれた、死神の雨。
自らが放った無人偵察機の群れすらも食い破りながら、それらが一斉に湖畔を襲う。
「がァァあああ!?」
絶叫があった。
クウェンサーの体が宙を舞った。
ニャルラトホテプの手首を掴んでいた感覚が消えたが、手を離してしまったのか、どちらかの腕が千切れたのか、ぐるぐると回る視界の中では確かめる余裕さえなかった。
背中から地面へ叩きつけられる。
ボトボトという柔らかいものが天から降ってくる。
黒土と一緒に舞い上げられていたのは、えらく赤黒い、鉄の匂いのする塊だった。

パニックで頭を掻き毟ろうとするクウェンサーの腕を、ぐいっと強く掴む力があった。
ニャルラトホテプが、少年を無理矢理に起き上がらせた。
「立てるか」
「何で、お前が……?」
「走れ。半端に終わらせて、死神を迎える覚悟がないのなら」
無我夢中だった。
雨が降ろうが槍が降ろうが、を地でいく状況の中を無理矢理に二本の足を動かして駆け抜けていく。
最後はほとんど滑り込むような格好で、湖畔にあった深い森の中へと身を投じていく。
立て続けに森の中にまで砲弾が降り注ぎ、両手で抱きかかえられないほど太い木々が割り箸のように砕けていく。
それでも精度は格段に落ちたようで、奥へ奥へと走るごとに、砲弾は見当違いの場所ばかりに落ちていく。
やがて。
時間にして、わずか一〇分か、もう少しか。
体感的には永遠に引き延ばされた地獄のような状況が、ようやくピタリと止んだ。
諦めたのか。

お姫様の対空支援が、無人機を片っ端から落とすのに成功したのか。
クウェンサーがそう思い、木の幹に寄り掛かって荒れに荒れた呼吸を整えようとした時だった。
ニャルラトホテプが言った。
「来るぞ」
世界が、真っ白に、消えた。
八本の高出力プラズマが、一瞬にして地形を破壊し尽くしたのだ。
森が溶けた。
木々は燃える事さえ許されず、地面はまとめてオレンジ色に輝く液体と化し、溶岩の川を作っていた。
八つの主砲攻撃には、これまでの天からの雨と違って、大雑把な狙いすらつけていないようだった。
森へ逃げたのだから、森を全て溶かしてしまえ。
地図ごと人間を殺してしまえ。
……そんな考えだけの、それをそのまま実現してしまうほどの、あまりにも桁外れの扇状の

攻撃だった。
「……、」
クウェンサーは。
呆然としたまま、木の幹に背中を預けてずるずると地面にへたりこんでいた。
すぐ目の前にあったはずの景色が、真っ赤な川へと変貌していた。
ニャルラトホテプは頭上へ目をやりながら、何かを嗅ぎ取るような仕草でこう告げた。
「第二波は来ない……。という事は、あれで打ち止めか。あるいは、『正統王国』側のオブジェクトとの戦闘に集中するつもりなのかもな。何にしても、逃げるなら今だろう」
パキパキという音が聞こえていた。
そちらに目をやると、火の粉を踏むようにして、ヘイヴィアがふらふらと近づいてくるところだった。
クウェンサーは眉をひそめて、
「おい、諜報部門の連中はどうしたんだ？」
「……、」
「たくさんいただろう⁉　あいつらはどうなったんだ！」
「……、もう」
ヘイヴィアは、明確に答えなかった。

だが、辺り一面の溶岩の川と、続けて彼が放った言葉が全てを物語っていた。
「もう、こんなヤツ……ここでぶっ殺そうぜ」
不意に、ヘイヴィアのアサルトライフルが跳ね上がった。
クウェンサーは肩に提げていた唯一の火器をとっさに手に取っていた。
ブルバップ式の接着爆弾投射機『ウォーハンマー』。
互いの銃口を突き付け合い、二〇メートルほどの距離を開けて、同じ軍服を着た二人は明確に対峙する。
「駄目だ、ヘイヴィア。こいつは殺せない、それをやったら『資本企業』からの言いがかりに反撃する起点を失ってしまう!!」
「今さら何を晴らして何を止めるってんだ、ふざけんな!!　もう導火線に火が点いている段階じゃねえんだ。でっかいドクロマークのついた真ん丸の爆弾は破裂しちまったんだよ！　それを止めたがっていたお人好しの馬鹿どもは溶岩の中に沈んだぜ。じきにこんな地獄が世界中に広がっていく。そして最初に火を点けた特大の馬鹿だけがのうのうと生き残ってやがる!!」
「ヘイヴィア！」
「何の役にも立たねえなら命張って守る義理もねえ。こんなヤツ処刑しちまえば良い。どうせ

橋頭堡まで連れ帰ったって、『政治の判断』とかいう訳の分かんねえもん挟み込まれるのがオチだ。……お偉方が戦争を止めたがると思うかよ？　『資本企業』が『正統王国』に攻め込みたかったように、『正統王国』だって戦う理由を欲しがっている案件なんざ腐るほど抱えてやがるんだ！　燃え広がったのは恐怖じゃねえ、欲望の炎だから始末に負えねえんだ‼」

「……もう、連れ帰っても駄目だって、世界レベルの戦争は止まらないって、そう言っているのか？」

「そいつはまともな聴取なんてされねえさ。営倉ん中で不自然に首吊ってるトコを発見されて自殺扱いでハイおしまいだ。だったら、何のために守る？　遅かれ早かれくたばるなら、俺らの手で殺しちまっても構わねえだろ‼」

「だったら」

クウェンサーは、一撃で悪友を粉々にできる火力を携えたまま、苦悩のままに呻いていた。

だが言う。言い切る。

「だったら、『正統王国』には預けられない。このまま中立の青十字にでも預けて、国際裁判とかで真実を明らかにするしかない。狭い門だけど、それ以外に世界が燃え尽きるのを止める方法がない！」

「そいつは俺に大義名分を与えるだけだぜクウェンサー……。だったら敵前逃亡と情報漏洩を防ぐためにテメェを撃つ事もできるんだ」

「ヘイヴィア……」
「やめろ、テメェじゃ勝てねえ。同じ場所に立っているとでも思ってんのかよ？　ただの白兵戦で、俺が学生なんぞに負ける訳がねえだろうが」
「……、」
「警告は一度だ。こっちはアサルトライフルだから、手足をぶち抜いたってどっちみち動脈を引き千切っちまうしな。……その『ウォーハンマー』を、下ろせ。俺は言ったぞ、クウェンサー。後はテメェの判断だ」
それでも一〇秒以上、二人の少年は動かなかった。
どちらかの引き金にかかった指が五ミリほど手前に引かれただけで、全てが瓦解する状況。
だが、やがて何かに圧されるように、クウェンサーは照準から目を離した。
ゆっくりと肩に押し当てたストックを離し、銃口を正面から、わずかに下へ逸らす。そのまま両手をだらりと下げる。
「よし、良い子だ。テメェは離れ
ヘイヴィアの言葉は、最後まで続かなかった。

ドスッ!!　と。
クウェンサーは照準も覗かずに、だらりと下げた火器の引き金を引いたからだ。

ちょうど、二人の中間地点、すっかり熱せられた地面の上へと何かが叩きつけられた。それは二、三〇センチ大に広がった、半透明の粘液だった。
ジェリーの中心にあったボタン電池ほどの金属の表面が、チカッと機械的な瞬きを放った。
直後に大爆発があった。
クウェンサーとヘイヴィアの双方が、爆風に押し流されるようにそれぞれ後方へ大きく薙ぎ払われる。
土埃が大きく舞い上がり、両者の視界が遮られる。
いつでも隣にいたはずの少年達の距離が、永遠に開いていく。

6

クウェンサーはニャルラトホテプの手を引いて、オレンジ色に煮えたぎる森の中を走り続けていた。
「あ、ああ」
そうしながら、口を大きく開く。
いつ肺の中まで熱風が焼き焦がすかも分からない中、それでも叫びを止められない。

「あああああああああああああああああ!!　あああ!!」

死んでいないはずだ。

死んでいないはずだ。

あれくらいでは絶対に死んだりしないはずだ。

それだけを祈りながら、しかし背後を振り返るだけの余裕すらなく、ひたすらにクウェンサーは戦場を駆け抜けていく。

終わりかけた世界の中で、ニャルラトホテプを殺してしまう事は許されない。

それは正しい意見のはずなのに、どうしてここまで方法を間違えてしまう？

苦悩が極まるクウェンサーに、ニャルラトホテプはこう尋ねた。

「これからどうするんだ」

その、明日の朝食のためにパンを買っておこうくらいの軽さに、ついにクウェンサーは頭の配線が焼き切れたかと思った。

掴んでいた手を乱暴に離し、接着爆弾投射機『ウォーハンマー』を突き付ける。

至近、一メートル以内から、その腹に向けて容赦なく引き金を引く。

ボンッ!!　というくぐもった音と共に、ニャルラトホテプの体が宙を舞った。折れた木の幹

へとその背中が叩きつけられる。
七三分けの男は咳き込みながら、自分の腹へしばし目を向けていた。
クウェンサーはブルパップ式の『ウォーハンマー』を構えながら、爆破用のトリガーに指を掛けて叫んでいた。
「俺だってな!!　別にお前と仲良しこよしになりたい訳じゃないんだよ!!」
「……、」
「だけどお前がいなくちゃ世界が終わる。だから利用させてもらう！　いいか、俺が無線トリガーを引いたらお前の胴体は真っ二つ、内臓を全部撒き散らして死ぬ!!　俺は今すぐそれができる！　だから黙って従え。お前の行いに正義があったかどうかは関係ない。理由がどこにあろうが、お前は自分の手でやった事に責任を取らなくちゃならないんだ!!」
「道理ではあるな。いいだろう」
ニャルラトホテプは笑って応じた。
「俺は人生を一〇〇回繰り返しても必ずアザトゥースのヤツを殺してみせるが、後に尾を引かせる事までは望んでいない。どこへなりとも連れて行け。俺がしでかした事の責任をきちんと取れる場所までな」
「……まずは青十字だ」
クウェンサーはそう答えた。

「『正統王国』も『資本企業』も、あそこだけは無闇につつこうとしなかった。難民キャンプ、医療用テント病院、食糧支援センター、とにかくどこでも良い。臨時の大使館や領事館と同じ権限があって、オブジェクトでも国際法上主砲を撃ち込めない場所へ駆け込むぞ。それ以外に、あんな怪物達相手に生き残れる方法なんかあるもんか……」

7

そしてヘイヴィアもヘイヴィアで、呻き声を上げながら、灼熱の地面から身を起こしていた。
クウェンサーとニャルラトホテプが消えているのを見て、頭を掻き毟る。
「……状況が分かってんのか、あの馬鹿野郎が」
こうしている今も無線機にはリクエストが集中している。
派遣された諜報部門は全滅した。
『ベイビーマグナム』に乗るお姫様も、メガフロート橋頭堡で大隊全体の指揮を執っているフローレイティアも、一人でも生き残りを見つけて状況を知りたいのだろう。
彼女達が、『これ』を知ったらどうなるか。
クウェンサー＝バーボタージュが最大の鍵であるニャルラトホテプを連れて『正統王国』から離脱し、青十字相手とはいえ『別勢力』へ駆け込もうとしていると判明したら……。

「ここで止まっておけば、終わっていたら、それで丸く収まっていたんだ」
ヘイヴィアは『正統王国』軍の兵士だ。
彼には彼なりの戦争に参加する理由だってきちんとあった。
だから、戦地派遣留学生のクウェンサーと同じ道は進めない。
全てを捨てる事はできない。
それでも。
思わず、ずっと背中を預け合った少年の事を考えて一人、こう叫んでしまう。
「あいつの敵はもう『資本企業』だけじゃねえ。『ベイビーマグナム』からも追われる立場になったってのが分かってんのか、クソ野郎が!!」

二つの軍に、二つのオブジェクト。
その全てが、ただの学生へと殺到する構図ができてしまった。

8

クウェンサーとニャルラトホテプの二人は、もう青十字の民間人から姿を隠す必要もない。

堂々と正面から近づき、拠点となる施設の位置を尋ねていた。

結果、難民キャンプや医療用テント病院は『ベイビーマグナム』が待機している南方五キロ地点より、さらに南下した位置にある事が分かった。冷静になってみれば当然である。摂氏九〇度の大地で人を寝かせる事などできないのだから、熱波や溶岩の届かない所に拠点を作る必要があるだろう。

ただし、

「そうなると……どう考えても『ベイビーマグナム』の横をすり抜けるのは無理そうだな」

「同感だ。何しろ第一世代……オブジェクト同士『以外の』戦闘をまとめて制する事を前提に、無駄な贅肉をとことん増やした機体だ。第二世代との戦闘ならともかく、旧来の対人戦なら誤魔化しのチャンスなど一切ないだろう」

二人がそんな事を言い合っていると、耐火服を纏うボランティアの青年はこう続けた。

「パナマ運河は総延長八〇キロの広大な玄関口です」

「それが？」

「ほぼ中央、四〇キロ地点に水門の整備点検用の拠点があります。国際法でも守られているはず。とりあえず、そこまで辿り着く事ができたのなら……」

ここは運河最西端からおよそ八キロの地点。耐火服なしでは一時間と命が保たない灼熱の地獄を、まだ三〇キロ以上歩かなくてはならない訳だ。

しかし、それ以外には微かな希望もない。
礼を言うついでに、もうパナマ運河にこれまでのセオリーは通じないから早く離れるようにと勧告したが、青十字の青年は笑って首を横に振るだけだった。単に危機感がないのとは違うのだろう。
「運河ばかりが目立っていますが、この辺りにも緑がいっぱいだったんですよ。コーヒーの産地としても有名だったし、貴重な昆虫を調べて薬効成分を探そうって、色んな企業も出入りしていたほどなんです」
「……」
「かつて、まだ国連という組織があった頃は、徹底的に破壊された瓦礫の地を煉瓦の亀裂一つまで再現する事で、復興の証を世界に示した東欧の街もあったそうです。負けていられませんよ。これは、私達の、戦いなんです。銃や爆弾を握るよりも、はるかに難しい。この地に水と緑が溢れて、当たり前の笑顔が当たり前に返ってくるまでは、絶対に抵抗を諦めたりはしませんから」
「……そうか、済まなかった。口を挟むべきではなかったな」
「？」
ニャルラトホテプの奇妙に角の取れた声に、青年は首を傾げていた。
一体どちらが死地に向かっているかも分からないまま、クウェンサー達は互いの目的のため

に背を向ける。
オレンジ色に輝く運河に沿うような格好で、焼きついたコンクリートの岸壁を二人で歩いていく。運河のこちらはオレンジ色の溶岩の世界、向こうは相変わらずバキバキに割れた背の高い二重フェンスと燃え広がる工業地帯ばかり。どこまでも景色が変わらず、眺めているだけで体力を奪われそうだった。
それでも足を動かし続ける。
地味だが確実に命を削る作業。
一体どんな意図があるのか、ニャルラトホテプは黙って歩く事を好まなかった。並んで歩きながら、彼はポツリポツリと言葉を紡いでいく。
「……いろんな事をしてきたよ」
「？」
「目立った仕事と言えば、主に敵国の兵器開発や製造工程の妨害だったがね。戦闘機の生産ラインに忍び込んで狂ったデータを注入して、欠陥品ばかりを量産させたり。サイバー攻撃をわざと誘ってからデコイの動力炉の図面を盗ませたり……。試作実験炉を組み立てた白衣連中は地球の裏側で笑いながら吹っ飛んでいったよ。痛みを感じる暇もなく、な」
「人を騙して生きていくっていうのは、そんなに楽しいものなのか？」
「というより、それしか社会と向き合う方法がなかったと言った方が近いかね。『死んだふり

作戦』が得意なのだって、好きでやっている訳じゃない。いつもいつも失敗ばかりで、帳尻(ちょうじり)を合わせるためにはそんな方法を使うしかなかったというだけだ」

　ニャルラトホテプはプロのスパイだ。

　会話を続ける事で精神的なイニシアチブを取っておきたい、という考えでもあるのか。

　それは具体的なメリットというよりも、リスが木の実を隠したがるような、習性に近いものなのかもしれない。

「エイカー＝キスオブローズ……いいや、そういうＩＤを作って活動していたアザトゥースのヤツとも良く一緒に仕事をしていた」

「……何なんだ、そのニャルとかアザとか。センスが分からん」

「ただのありふれた偽名だ、娯楽(ごらく)を学びたまえよ少年。あいつは元々、俺と同じ『資本企業』のスパイだった。俺達みたいな仕事はなかなか周囲の理解を得られないからな、個人個人にごまをすったり弱みを握るよりも、いっそ誰かを上層部へ送り込んで、俺達みたいなのが活動しやすい『仕組み』を作らせる役を割り当てた方が手っ取り早いんじゃないか。……そんな考えで送り込まれたのがアザトゥースだ」

「一応尋(たず)ねるけど、７ｔｈコアの一角、そのＣＥＯって話だったよな……？」

「それだけ上手(うま)くやったという訳さ。まあ、『スパイらしく』飴(あめ)と鞭(むち)を使い分けて人心を掌握(しょうあく)したのも事実だが」

ニャルラトホテプはいつまでも終わらない旅路の先を見据えながら続けた。
「ところが、あいつは自分の一存でオブジェクトを動かせるようになってから、何かの歯車が外れたようだった。対等な円卓は歪なピラミッドへと地殻変動していった。そこから先は、本当につまらない仕事の連続だったよ」
「だから、エイカー……いいや、アザトゥースを始末したっていうのか？」
「そいつは少しばかり飛躍しているな」
七三分けの男は微かに笑った。
「さんざん心をすり減らした俺は、同じ考えを持つ連中と一緒に例の方法を使った」
「死んだふり作戦？」
「得意と言っただろう、大企業のCEO相手にはなかなか骨は折れたがね」
苦労した、というだけでその綱渡りを成功させた。
端的に、この男の才能と技術を示す言葉だった。
「ともあれ、俺達は一切の足跡を消して、思い思いの場所へ立ち去った。俺が第二の故郷に定めたのは、赤道直下で、水に困らない、のんびりした風土を持った、それでいて一定以上の水準の医療機関が揃った立地。……つまり、この空白地帯ソベラニア方面だった」
「何だ、じゃあソベラニア方面のきっかけっていうのは、アザトゥースの追撃だったのか？」
「いや、どうだろうな。俺は『知らなかった』と踏んでいる」

彼はそう否定した。

「アザトゥースが始めようとしていた新型ネット通販サービス『銀の鍵』……莫大な富を生み出すそれを軌道に乗せるには、やはり莫大な航空燃料がいる。だから連鎖的に数多くのタンカーを安全に運航させる仕組み作りが必要だったって寸法だ。そのために大都市に浸透し身近な洗剤や燃料、台所用品を組み合わせて大規模な破壊工作を行う特殊コマンドの養成などというニュースを捏造して、その掃討作戦と称してパナマ運河を取ろうとした。おそらく、ヤツの狙いはこれだけだったろう。現実なんて、そう何でもかんでも陰謀と計画通りに進んでくれる訳じゃないさ。だったらもっと簡単に先回りできるしな」

それでも、殺した。

故意か過失かなど一切問わずに。

言いながら、ニャルラトホテプは指を一本立て、

「ヤツにとっての悲劇は二つあった。一つは、この地にニャルラトホテプがいるという事実に気づけなかった点」

二本立てた。

「もう一つは、妻と息子の死をきっかけに、スパイの技術を封じるために俺が自らかけていた自己暗示が解けてしまった点だな。……どこかで何かの歯車が少し狂っていたら、俺に殺しのチャンスなんぞ与えなかったろうに」

「……、」

世界に味方がいれば、こんな道は進まなかった。

あのボロボロの廃屋の中で、ニャルラトホテプはそんな風に言っていた。

あれは、こういう意味だったのかもしれない。

もしも、事前に誰かが教えてくれて、逃げ出すチャンスがあったなら。

もしも、目の前に飛び出して家族を助けてくれるヒーローが現れてくれたら。

もしも、殺しの道を決意する時に、軍服の袖(そで)を掴(つか)む小さな手が残っていたのならば。

こんなヤツに、肩入れする必要なんかない。

そう分かっていたが、クウェンサーは思わずぽつりとこぼしていた。

「……悲劇だな」

「ははっ。何だ、二〇年以上第一線で活動し続けたスパイの言葉など信じるのか？」

「信じるよ」

素っ気なく言われて、しかしニャルラトホテプは顔色を変えなかった。

感情の表出を完璧(かんぺき)に防ぐ技術を、投じる必要を感じていたのかもしれない。

「お前は仕事のために、あるいは復讐(ふくしゅう)のために、さんざん人を騙(だま)してきた。……だけど、最後

に残す遺書にまで嘘を書き込む必然性はなさそうだったからな」
「確かに」
「お前は『正統王国』に捕縛されるにせよ、青十字経由で国際裁判に出廷するにせよ、もう未来なんかない。生ける屍だ。そのどっちとも違う……『組織』の都合や体裁に合わせて言葉を曲げる必要のない人間なんて、この先出会えるかどうか分からないんだ。だったら、お前は絶対に残すよ。自分が抱えていた何かをな」
　そんな風に言葉を交わしていた時だった。
　ニャルラトホテプが、不意にクウェンサーの肩を掴んだ。強い力で体を引っ張られる。何かしらの整備に使うものなのか、黒ずんだバナナみたいに元の塗装が分からなくなるほど焦げ付いたフォークリフトの陰へと身を隠す構図になった。
　何から？
　答えは、およそ三〇〇メートルほど先にあった。
　ニャルラトホテプは囁くように告げた。
「『正統王国』だ」
「くそっ！」
　反射的に大きく舌打ちしそうになり、必死にブレーキをかけた。幸い、向こうはまだこちらには気づいていない。それでも、スリングベルトで肩に提げた接着爆弾投射機『ウォーハン

マー』が、ずしりとした不気味な存在感を与えてくる。
「……何で行く手を阻(はば)んでいるんだ。こっちの動きが読まれているっていうのか？」
「無理もない。逃走前に青十字の話を持ち出していたのだしな。万全を期すなら、煙(けむ)に巻くのではなく爆殺(ばくさつ)するべきだった」
たわ言には付き合っていられない。
問題の青十字の水門整備拠点(きょてん)まで、まだ二〇キロ以上。たとえここを潜(くぐ)り抜けたとして、この先どれだけの『正統王国』軍兵士が巡回(じゅんかい)しているかは分かったものではない。
このまま進むか、方針を改めるか。
極限の状況で顔全体から脂汗(あぶらあせ)を噴き出すクウェンサーだったが、そこへさらなる不吉が迫る。
古い戦争映画に出てくるような、プロペラが風を切る、長く太い羽音。
フォークリフトの陰に隠れたまま頭上を見上げ、学生の顔がくしゃくしゃに歪(ゆが)んでいく。
無人偵察機(むじんていさつき)。
『ミスカトニック』の対人照準を司(つかさど)る天空の目が、ゆっくりと赤黒い大空を突き抜けていく。
「なんてこった……」
クウェンサーは吐(は)き捨て、それからフォークリフトの陰で立ち上がった。

耐熱とセンサー殺しを兼ねたフード付きマントのせいで分かりにくかったが、よくよく注意深く観察してみれば、立ち塞がる（そして天空から捕捉された）兵士達は、クウェンサーよりもさらに若い少年少女の集まりでしかなかった。

「ちくしょう、あの連中、第二世代にロックされてしまった！　早く何とかしないと頭の上に槍の雨が降ってくるぞ！」

「助けるのか？　顔を出した途端、眉間に鉛弾をもらうかもしれないぞ」

「悪いが、あいつらは対立していても敵対までした覚えはないんだよ!!」

パパン！　パパパン!!　という派手な銃声が響いてきた。混乱に陥った兵士達が空に向けてアサルトライフルを発砲しているのだ。だが、そんなものが役に立つとも思えない。余計に多くの無人偵察機を呼び寄せるだけだ。

クウェンサーはフォークリフトの傍に積んであった、飛び箱くらいのサイズの小型コンテナを開けていく。中に収まっていたのはどう使うか分からない太い鋼管や安全弁などだったが、注目すべきはそちらではない。

緩衝材として敷き詰められていた、くしゃくしゃの厚紙だ。

ニャルラトホテプは囁くように告げた。

「レシプロとはいえ時速三〇〇から五〇〇キロは出る。爆弾投射機などで落とすのは難しいぞ」

「誰がやるかそんな事。おい、お前も手伝え!!」

「どうして俺が？」

キョトンとするニャルラトホテプに、舌打ちしながらクウェンサーは言う。

今はとにかく時間がない。

「アンタの死んだ子供は男の子だったか、女の子だったか？」

「……、息子だよ。それが何か」

「じゃあ、その子が生きていたとしたら、今は何歳になってる？」

「そいつは少し卑怯じゃないか？」

「あそこで今まさに殺されようとしている連中とはどれくらい違うんだ。答えろよ」

「……、」

「そして今度は助けられる、間に合わなかったアンタの手で。そいつを良く考えろ」

次は、ニャルラトホテプが舌打ちする番だった。

実際には、似ても似つかないのかもしれない。丸っきり見当違いで、思い出の中の死者と目の前の生者の間に、体格も性格も年齢も、重なるものなんて何もなかったのかもしれない。

だが、人の連想は強烈だ。

一度関連付けてしまえば、もうそのイメージからは逃れられない。

「仕方がないな……。何から始める？」

「紐でも針金でも何でも良い、とにかく何か縛るものはないか？　こいつ、この厚紙の塊をっ、

束にする必要がある！」

「それで？」

「一七〇一年、スウェーデン軍が行った渡河作戦！　その時、世界で初めてメジャーデビューした兵器を作る!!」

「……なるほど、そちらの方がまだしも効果はありそうだ」

ニャルラトホテプと二人で厚紙の束を縛り上げ、その中に『ウォーハンマー』の信管を挟み込んでから、クウェンサーはその束を次々とオレンジ色に染まる運河へと投げ込んでいった。

派手に水を割る音と共に『正統王国』軍の少年少女達もこちらに気づいたようだったが、今さら後には退けない。クウェンサーは爆破用のトリガーを引き、厚紙の束の内部で信管を破裂させる。爆竹よりは強烈な衝撃と共に、湿った厚紙に火が回っていく。

七三分けの男は律儀に両手を上げながら、しかし薄く笑ってこう告げた。

「オリジナルは藁の束だったが、さて上手くいくかね」

「不完全燃焼になれば何でも良い。そして『こいつ』が通用するのはミラフローレス水門ですでに証明されている！」

直後だった。

ぶわっ！　と。水面に浮かぶ厚紙の束から、黒々とした煙が立ち上った。身の危険を感じたタコやイカが墨を吐いて海水を濁してしまうように、あっという間に景色の一部が黒く埋まる。

熱風に煽られるように、それはすぐにでも頭上を汚していく。
　クウェンサーは両手を上げながら、今も味方と信じている兵士達に向けて叫んだ。
「撃つのをやめろ、居場所が知れるぞ！　熱と煙があれば天空の目は潰せる。即席の煙幕兵器があれば十分だ！　下手に騒がなければミスカ……『エクストラアーク』の対人砲は狙いをつけられない!!」
　ごごんっ、という鈍い金属音が響いた。
　無数の銃口に睨まれながら、しかしクウェンサーは首だけ動かして音源へ目をやる。
　思ったよりも近い。一、二キロのラインまで迫っている。
『エクストラアーク』……いいや、『ミスカトニック』。
（……あのミラフローレス水門の時はどうだった。無人偵察機で俺達を見失った怪物は、最後の最後で俺達が逃げ込んだ森に向けてどんな手を使ってきた？）
　ツッツボン!!　という轟音と共に対岸、『ミスカトニック』の周辺が紅蓮の炎に包まれる。
　自前のはずの工業地帯がさらに大きく崩れていく。並行して化学焼夷弾でも撒き散らしているのかもしれない。周囲一帯を無秩序に焼き尽くすどころか、自身の表面さえ真っ赤な頭巾を被るようにしながら、そいつは『本題』に入る。
　その球体状本体の後部に取り付けられた八枚の花弁が、大きく蠢く。軟体生物が獲物を捕らえるために使う触手のように、宙をのたくるいくつもの主砲が、ゆっくりとこちらへ向けられ

る。

規格外の出力を持つプラズマ砲。一瞬にして景色をオレンジ色の溶岩に変える、災厄の炎。

ヘイヴィアからの報告で、その破壊力は伝わっているのか。『正統王国』軍の兵士達の腰が引ける。少しでも距離を取ろうと考えるのか、じりじりと運河から後ずさりを始めている。

その背中を逆に叩くように、とっさにクウェンサーは叫んだ。

「いいや、飛び込め!!」

言うなり、実践するようにクウェンサーはパナマ運河へ……『資本企業』が支配するアスエロ方面へ近づく、正確には『ミスカトニック』へ近づくように全力で駆け出した。ニャルラトホテプも薄ら笑いを浮かべながら、後に続く。

『正統王国』軍の兵士達はアサルトライフルの銃口をこちらに突き付けていたが、一発も弾丸は飛んでこなかった。

迷いの気配があり、次いですぐに複数の足音が追従してきた。

オレンジ色の照り返しを受ける水面へと、全員で飛び込んでいく。海の中に入った、という感覚は一切なかった。熱めの風呂よりさらにきつい。魚などとっくの昔に全滅しているかもしれない。

しかし、文句を言ってもいられない。

水量が膨大であった事、水に流れがあったのは幸いだっただろう。気温は平均して六〇から

八〇、瞬間的には九〇度に届く時もある。液体が攪拌されていなければ熱湯同然になっていたはずなのだから。

クウェンサーは水面から顔だけ出しながら、『ミスカトニック』を睨みつけていた。

沈黙の中で待つ。

沈黙の中で待つ。

沈黙の中で待つ。

やがて、ズッ……と『ミスカトニック』の巨体が蠢いた。ゆっくりと後退し、さらに加速をつけて北側へと離脱していく。

「……パナマ運河の水門やポンプは巻き込めない。まだそのルールは生きているみたいだな」

「悠長にも言っていられないぞ」

ニャルラトホテプの言葉に、クウェンサーは吐き捨てるように応じた。

それから、同じ軍服を纏う少年少女達に向けて大声で言う。

「あいつがどうして素直に下がったか分かるか？　対抗策を講じるためだ！　次はもう無人偵察機なんか使わないぞ。即席だろうが何だろうが、本体に直接対人センサーをくくりつけて潮干狩りを再開させるだけだ。そうなったら煙幕も効かない、一発でロックオンされて吹っ飛ばされる。そうなる前に早くここを離れるんだ、早く!!」

「あ、うあ……？」

呆然とする少年を無視して、ニャルラトホテプがこう尋ねた。

「人の心配をするのも結構だが、俺達はどうする？　真っ先に命を狙われそうなものだがな」

「……方針変更だ」

　クウェンサーはうんざりした声で、

「このまま泳いで対岸、北側のアスエロ方面へ向かう。連中がない知恵を絞って対人センサーを考案するより前に整備基地に潜り込んで妨害する。……そういうの得意だって言っていたよな？」

「途中で三回くらい『死ぬ』覚悟さえあればの話だが」

「何だって良い、もう股に毛が生えているんだかどうだかも怪しい連中のお守りなんてこりごりだ。元凶ぶっ壊して安全にゴールを目指すとしよう」

　それだけ決めると、クウェンサーとニャルラトホテプの二人は幅五〇メートル程度の運河をばしゃばしゃと泳いでいった。

　背後には銃を持った兵士達がいたはずだが、彼らから発砲はこなかった。

　ここで安易に引き金を引けば、巡り巡って自分達の身に何が降り注ぐのかを実感したからかもしれない。

9

ピリピリと肌にひりつくような、嫌（いや）な緊張があった。
運河を挟（はさ）んで対岸、『資本企業』が支配しているアスエロ方面に身を乗り出した瞬間（しゅんかん）からだった。明確に『敵国』の地を踏んだ。その事が関係しているのかもしれない。
三メートル近い二重の金網（かなあみ）フェンスが行く手を阻（はば）んだが、所々バキバキ倒れていて、内部への進入は容易だった。銃座（じゅうざ）つきの監視塔も、そもそも根元から折れている。
景色は一変していた。
どちらかというとリゾート街や森林の火災に近かったソベラニア方面側とは違い、こちらのアスエロ方面側はアスファルトで固められ、あちこちにコンクリート製の巨大な箱や金属製の円筒タンクなどがひしめき合う、いかにも体に悪そうな工業地帯だった。
こちらもこちらで、赤と黒の灼熱地獄（しゃくねつじごく）と化し、あちこち建物の屋根を掠（かす）めるように溶岩状の変質があったが。
金属パイプで作った脳みそみたいにあちこちのたくる管（くだ）の群れ。歩道橋のように頭上さえ飛び越えて敷設（ふせつ）されるそれらを眺めながら、クウェンサーは口を開いた。
「……にしても、国境沿いだろ。何の工場なんだ、これ」
「黒ずんでいて読みにくいが、タンクの表面にLiquid-Nとあるのが分かるだろう」
「液体窒素（ちっそ）？」

「表向きは人道医療目的だが、実際には新型の夜襲砲の研究開発用の資材調達だろうな」
「……それ、確か整備基地ベースゾーンを無音で砲撃してさっさと立ち去る、ってコンセプトの兵器だったよな」
「ベースとなるのは迫撃砲や多連装ロケット。これらは初速が微妙でな、着弾まで数秒かかるから、発射音を聞いてタコツボに飛び込んだり身を伏せたりするだけでも殺傷率はかなり変わる。だから火薬を使わないで砲弾を発射する方法が求められている訳だ」
「うちの諜報部門も圧縮空気使って野球のボールを飛ばす自由研究やっていたけど……あれ、ユニットが重たい割に飛距離が出ないって問題作じゃなかったか？」
「砲身の中で液体窒素を瞬間気化させる事でもっと強い力を手に入れようとしたんだ。扱いが難しそうに聞こえるが、あんなものは魔法瓶に入れておけば安全に保管できる程度だしな」
「『とにかく高火力頼み』のオブジェクト信仰とは噛み合わない気もするけど？」
「本当に重要な研究なら、空白地帯とはいえ国境沿いに工場なんか造らないさ。実際は『本国』警備の中で不始末やらかした連中の左遷先といったところかね」
　ごうごうと音を立てて燃える工業地帯を、クウェンサーとニャルラトホテプの二人は歩いていく。
　見渡す限りの空は黒煙で覆い尽くされていたが、おそらく煙突から出たものではないだろう。設備が稼働している音は一切聞こえてこない。

同様に、人の気配もなかった。

「それにしても、ミラフローレス水門のあれ、とんでもない出力の主砲だったよな……」

広い敷地の割にたくさんの施設が詰め込まれているため、視界は悪い。クウェンサーはあちこち目をやるが、あれだけ巨大なオブジェクトがここからでは見えなかった。

「ただの下位安定式プラズマ砲じゃない。一体どうやったらあんな出力になるんだ。よっぽど大量の触媒を圧縮させているのか、高い電流をかけているのか、それとも円形加速器みたいなものでも搭載しているっていうのか……？」

「もっと単純に考えれば良い。あれはプラズマだが、下位安定式プラズマ砲の枠からはみ出たものだった。だから今まで見た事がない出力になったのだ、と」

「……？」

クウェンサーは最初、意味が分からないといった顔だったが、

「いや、嘘だろ。……そんなのってありなのか？」

「JPlevelMHD動力炉。その中で渦巻いていた膨大なエネルギーを『直接取り出して』チューブの先から吐き出した。……だから、あれはもう『下位安定式』なんて冠のついたプラズマじゃない。二〇万トンの巨重を常時時速五〇〇キロ超で高速戦闘させるほどの圧倒的熱量だ。惑星をオレンジ色に削り取るくらいの破壊力はあってしかるべきじゃないのか？」

「根拠は」

「ない。だがもうそれ以外に、あんな現象を起こせる仮説にも心当たりはないがね」
もちろん敵国のスパイの話なので完全に鵜呑みにはしないが、参考としてクウェンサーも頭の隅に留めておく。
ただ、もしもその仮説が正しいとすると……、
(試作実験炉の爆発は、オブジェクトを行動不能に陥らせるほどの力を持つ。それをまとめて直接叩き込んだら、お姫様だって一撃で蒸発するかもしれない。しかも、そんなのを一回限りじゃなくて、八発ワンセットで何度でも連射できるだって……?)
恐るべきスペックだが、しかし一方で疑問もあった。
……そうなると、オブジェクトの構造上『とある問題』の発生を食い止められないはずなのだが……?
ニャルラトホテプが、前方を指差しながら言った。
「疑問があるなら、自分の目で確かめるべきだな。虚実入り乱れる環境で自分を保つのにはそれが一番の薬なんだ」
崩れかけた巨大工場の角を曲がったところで、クウェンサーは慌てて来た道を引き返した。
『ミスカトニック』。
動力炉から直接エネルギーを取り出し、八本の触手で自在に撃ち込む悪夢のオブジェクトの威容が隠れていたからだ。

「何でだ!? メンテ中なら周りに警備くらいつけるものだろう!?」
「摂氏九〇度の環境では、耐火服があっても生身の兵士を常設させるのは無理だ。かといって、安全な後方までオブジェクトが下がれば、『正統王国』は一気に陣取りゲームを進めてしまう。よって最低限必要な機材だけ灼熱の現場に送って、できるだけ兵士がサウナにいる時間を縮めようとしているんだろう。……何しろ、オブジェクトはこそこそ近づいてきた雑兵ごときの奇襲で傷がつくような兵器でもない。『そう信じられて』いるからな」
これまでの経験から、おそらく『ミスカトニック』は対オブジェクト以外の照準は無人偵察機任せにしている節がある。そして現在は、その天空の目を信じずに別の対人センサーを組み立ててくくりつけようとしている最中。信用をなくした無人偵察機を飛ばすとは思えない。
クウェンサーとニャルラトホテプはそう判断し、改めて巨大工場の壁から体を出した。中腰のまま小走りでオブジェクトへ近づいていく。
足回りはエアクッション式推進装置。#を斜めに倒し、前方中心へ合流する二本の直線を長く伸ばして、全体的に両刃の剣のようなシルエットを形作っていた。端々は外側へ若干はみ出しており、そちらについては空母の着艦デッキのような印象がある。
「すごいな……。道路一面森みたいに鉄骨がびっしり。一体どれだけあるんだ、鉄骨の森の上にオブジェクトが載っかっているぞ」
「重量分散の一環だろう。造船所のやり方と一緒だ、向こうは七万トンクラスの巡洋艦を組

み立てる過程で、水に浮かべる前は無数の木の柱で支えていたような気もするが」

周囲の工場や円筒タンクからは無数の太いワイヤーが延びており、ガリバーのようにオブジェクトの各所と連結している。そのワイヤーを伝うように、耐火服を纏う整備兵が行き交っていた。主な作業は頭上で行われている。クウェンサー達は見つからないよう、鉄骨の森へと飛び込んだ。つまり二〇万トンもの重量を持つ『ミスカトニック』の真下だ。

おっかなびっくり頭上を見ながら、クウェンサーは呻くように言う。

「それにしても、剣みたいっていうか……随分と縦に長いフロートだよな。実際には半分、いや三分の一くらいでも支えられるんじゃないのか？」

「それだけ主砲の威力が凄まじいという事なのかもしれないぞ。反動を抑えるためにこれだけ広大なフロートを用意しているとかな」

鉄骨の森の最後端まで進み、オブジェクトの屋根から顔を出す。

最大の特徴である、球体状本体の真後ろに取り付けられている、八枚の花弁。巨大なリールに束ねられた八本の触手が、これまでにないほど近くに迫っていた。

「……基本的には胃カメラ。プラズマの制御方法はやっぱり電磁石かな」

「それ以外には考えられないだろう。何しろ小さな太陽を閉じ込めているようなものなんだ。単純に壁を厚くしても、プラズマの熱が素材を溶かしてしまうだろうし」

トカマク式だかトーラス式だかは知らないが、あのチューブの内側には極めて高出力の電磁

石の帯がびっしりと巻きつけてあるはずだ。その膨大な磁力線でもってプラズマを抑え込み、任意の方向へ『逃がす』事で発射させているのだ。
顔を引っ込め、再びオブジェクトの屋根に身を隠しながら、クウェンサーはこう呟いた。
「疑問がある。照準関係についてだ」
「例えば？」
「『ミスカトニック』は対オブジェクトの照準は本体で、対人その他諸々は無人偵察機任せにしているって仮説だったよな」
クウェンサーは鉄骨の一つに背中を預けながら、
「……でも、どうやって？『ミスカトニック』の主砲は圧倒的だ。『正統王国』の観測機器も発射の瞬間は数値が真っ白に飛んで何の参考にもならなかったって言われていたし。だとしたら、こいつ自身はあのプラズマの渦の中で、どんな方法を使って敵のオブジェクトを捕捉し続けているんだ？」
「言われてみれば、不思議ではあるか」
「光学照準、熱源探知なんかはもちろん駄目。あの爆音の中じゃ集音や超音波も使い物にならない」
「……同様に、あれだけのプラズマでは電磁波も駄目だろうな。レーダーは使えない」
ニャルラトホテプの言葉に続き、ついクウェンサーは人間の感覚でアイデアを出す。

「匂いや味は？」

「毒ガスなんかの化学兵器がどうやって処理されるか知っているか。大抵の場合はアルミやナパームなんかの高温で焼却する。あのプラズマの中じゃ匂いの粒子なんてあてにならんよ」

「でも粒子が消滅した訳じゃない。それじゃ質量保存の法則に引っかかる。ようは、無毒化されて目に見えなくなっただけで、漂っているのは同じだろ？　極端な熱処理で化学式が組み替えられて、安全な別の物質に変わったってだけなんだから」

「……つまり、指示薬が酸化物になるのを織り込み済みで検知する嗅覚センサー……微粒子粘着装置が存在する、と？　風向きに気をつけてみるべきだったな」

「ヤツが何かを撃ち込んでいる様子はない。きっと、ターゲットが元々撒き散らしているもの……静電気式なら反発剤、エアクッション式ならタービン用の潤滑油。そんな感じのものを『参考』にして、光と熱の地獄の中でも正確にロックオンを続けられる仕組みがあるんだ」

逆に言えば、オブジェクト本体の照準装置では、ミラフローレス水門近くの森へ逃げたクウェンサー達を細かく狙う事はできなかったのだ。人間は息を吸って吐くだけでそんなものを大量に撒き散らしたりはしないのだから。

だから、大雑把に地形ごと攻撃し、溶岩の川を作るしかなかった。

『殺したとみなす』事しかできなかった。

ニャルラトホテプは納得した上で、

「しかし、具体的に何の役に立つ？　別のオブジェクトが狙われた際、チャフやフレアのように照準を逸らすくらいにしか使えないだろう」
「……いや、そうでもないんじゃないか。これを逆手に取れば、相手が必ず一〇〇%の精度で主砲を撃ち込んでくれるようこっちから指示を出せるんだ。そして『ミスカトニック』が使うのは莫大なプラズマ砲。こいつはもしかすると……」
「敵と敵で同士討ちでもさせるつもりか？」
「……、」
クウェンサーはしばし黙った。
やがて、彼はこう告げる。
「いや、欲張るのは後回しにしよう。今は対人センサー潰しだ。向こうが何を組み立ててどこにくくりつけようとしているのかを特定しないと」
「やれやれ。今度は頭上のワイヤーを伝って綱渡りか？　流石に見つからずに進むのは困難だぞ。連中の使っている、頭からすっぽり被る耐火服を調達して着替えた方が楽ではないか」
「まだ取り付け作業が完了していない事だけ分かれば他は良い」
言いながら、クウェンサーはスリングベルトで肩から提げていた接着爆弾投射機『ウォーハンマー』を両手で掴み直しながら、
「クレーンゲームの先っぽなり根元なりに撃ち込めば、作業の中断くらいできるだろ」

「爆破に異論はないが、逃げ道を確保してからだ。そいつは無線トリガーで遠隔起爆もできたんだったよな」
　そんな風に言い合っていた時だった。
　頭上から、甲高い笛のような音が響いてきた。
　ヒュイイイイイイイ!!　という大型旅客機の主翼からぶら下がったプロップエンジンにも似た爆音。思わず頭上を見上げたクウェンサーは、まだ自分の体には汗を噴き出すほどの水分が残っていたのかと驚いていた。
「まずい、エアクッションが動き出しているぞ!　出ろ、早く、圧縮空気に押し潰される!!」
『資本企業』側の整備兵などにバレる危険性など、いちいち気を配っている余裕もない。クウェンサーとニャルラトホテプの二人は、とにかく鉄骨の森を走り抜け、『ミスカトニック』の屋根から表へ飛び出していく。
　直後に、凄まじい空気の壁が吹き荒れた。
　二〇万トンの巨重がぶわりと浮かび上がると同時、その余剰空気が一挙に四方へ撒き散らされる。二人の体が重力を忘れた。爪先が灼熱のアスファルトから浮かび上がる。悲鳴を押し殺し、とにかく舌を噛むのを防ぐ事だけに必死で専念するクウェンサーは、そのまま優に五メートル以上も空中遊泳を楽しむ羽目になった。
　バランスを崩して路上に激突してから、さらに二〇メートルは転がされる。

「あっ、がぁ！　ごっ⁉　ぼうがっ……‼」
時折ニュースを騒がせる、大型車が人を引きずったまま走るという事件は、こういう感じなのだろうか。耐火とセンサー殺しを兼ねた分厚いマントを頭から被っていなければ、今頃真っ赤な紅葉おろしにされていたかもしれない。
同じく、消防士の耐火服に命を救われたニャルラトホテプは、ふらふらになりながらもゆっくりと立ち上がった。未だに口をパクパクさせるクウェンサーの腕を掴んで、強引に起き上がらせる。
そうしなくてはならない理由があった。

ゴッ‼　と。
突如として、凄まじい閃光が燃え盛る工業地帯をまとめて切り裂いたからだ。

オレンジ色の太い残像と、着弾点には溶接にも似た凄まじい白の閃光があった。
コンクリートでできた巨大工場が焼き切られる。『ミスカトニック』は緊急回避のため、あちこちに張り巡らされた無数のワイヤーを引き千切るようにしながら、大きく右手側へ跳ね飛ぶ。高所作業中だった整備兵達は蒸発したり火だるまになったり墜落していったりした。
そう、『ミスカトニック』は避けた。

あれは別の場所から飛んできた砲撃だった。

つまり、

「レーザービーム⁉　お姫様か‼」

「……向こうも向こうで一線を越えたか。まさか、最初に非武装地帯を乗り越えたのが『正統王国』の方になるとはな」

10

ただでさえ瓦礫撤去の土木作業は汗だくになるというのに、それが摂氏八〇度オーバーのサウナの中ではなおさらだ。冗談抜きに熱中症という言葉が兵器としてヘイヴィアの頭にちらついていた。

周辺警戒を行う彼のすぐ横を、ガリガリガリガリ‼　という轟音が通り過ぎていく。軍用トラクターの前面に取り付けられた金属製のバケットが、アスファルトの表面ごと削り取る形で、一面の瓦礫を除雪機のように押しのけている音だ。

彼らの後をなぞり、路上の異物の有無をレベル単位で確認していったヘイヴィア達歩兵部隊は、やがて無線に向けてこう報告した。

「地均し完了を確認、繰り返す、地均し完了を確認！　これでパンクしやがったらよっぽどの

イズだ。

都合三二個もの車輪を有する巨大車両は複数、ソベラニア方面とアスエロ方面を奇麗に区切るパナマ運河のほとりへと向かっていく。

クレーン車のような固定脚で車体全体を浮かばせると、油圧シリンダーの軋んだ音が鳴り響いた。

まるでアコーディオンのように、ただでさえ巨大極まる車体が大きく伸びていく。タンカーの通行すら想定されるパナマ運河を、ゆっくりと、丸々横断してしまうほどに。

「……すんげえ話だ。戦場に渡す橋がものの一〇分もしねえ内に完成しちまう」

つい癖のように呟いてから、傍らにいつもの腐れ縁がいない事を思い出して咳払いするヘイヴィア。

そうこうしている間にも、大型架橋車は蛇腹状に折り畳んでいた本体を大きく広げていた。山と谷を作る形で束ねられていた本体は、先へ先へと伸び上がる事で凹凸をなくし、水平に均

されていった。
対岸に辿り着く。
ガスンッ!!　と、杭のようなものが打ち込まれるのが見えた。
お姫様から質問が届く。
『もう行っていい？』
「まだだ。橋の途中に等間隔で浮き輪をつけて浮力を確保しねえと、途中でボッキリ折れちまう。女の尻と一緒だよ、デカすぎるってのも問題だ」
軽口に、お姫様は答えなかった。
見知らぬ他人とエレベーターに乗り合わせたような気まずい沈黙の中、彼女は待ち時間を使ってこんな事を呟いていた。
『クウェンサーは、こうなることが分かっていなかったのかな？』
「知るかよ、とにかく今は『正統王国』の敵に回った。黒幕のオヤジを庇うためにな。人類の命運だの大戦の引き金だのを自分一人で握って勃起してやがるんだろ」
『……はあ』
いわゆる『また聞き』のお姫様は、クウェンサーとヘイヴィアが真っ向から銃口を突き付け合った『本当の経緯』を、完全な形では把握していないだろう。
分かっているのは、状況に応じてクウェンサーを殺害してでも事態を終息させろ、という命

令だけ。

『どうあがいたって、「ベイビーマグナム」にはかてるはずがないのに』

それは単なる過信ではない。クウェンサー達が生身で最新鋭の第二世代を吹き飛ばしていく光景だって何度も目撃している。

だが、その上でお姫様はそう断言できるのだ。

彼女の『ベイビーマグナム』は時代遅れと評される第一世代。つまり、オブジェクト対オブジェクトだけでなく、核ミサイルを含むあらゆる兵器を圧倒する事を目的に建造されたものだ。平たく言えば、他よりも対人センサーや対人兵器をしこたま抱え込んでいる。

第二世代を屠る事が、第一世代に勝てる事の証明にはならないのだ。

『……しかも庇ったあいてはおっさんだってはなしだし。もはや女の子でなくてもかまわないのか……!?』

「何言ってんだ、仲間内の報告じゃあいつ、味方の若輩部隊をオブジェクトから庇うために飛び出したんだとさ。あの変態自殺志願者め、守備範囲の広さに戦々恐々だぜ」

11

「『ベイビーマグナム』、大型架橋車を用いて非武装のパナマ運河を突破。『資本企業』側のア

スエロ方面へ侵攻を開始。予定通り『エクストラアーク』との接触を確認しました」
パナマ湾に接岸している巨大な正方形のメガフロート橋頭堡の作戦指令室で、若い女性オペレーターは淡々と報告を続けていた。
少々効き過ぎな冷房で満たされた薄暗い一室で、そのオペレーターは一度だけチラリとフローレイティアの方へ目をやった。
「……本当によろしかったのですか？」
「これが許されてしまうくらい状況は切迫しているという訳よ」
細長い煙管の先端をオレンジ色に輝かせながら、銀髪爆乳の女性将校はうんざりしたように答えた。
彼女は彼女で、傍らに置いたノートパソコンから遠く離れた『安全国』でのんびりくつろいでいる老人とコンタクトを取っている。
『何とかなりそうかね？　こちらはニヤニヤ笑いを隠しきれずに金切り声を上げている強硬派を抑えるのに手一杯だよ。貴重な人命を守るためには今すぐ予防攻撃を実施し、こちらから先んじて敵側の主要な兵器生産施設と資源採掘所を攻撃しろとな。……なんとびっくり、印がつけられたのはどいつもこいつも一〇〇万都市ばっかりだ。連中、地図の読み方が分かっていないのかね』
「仮にニャルラトホテプを我々の手で捕らえたとして、『安全国』まで護送して軍法裁判で証

言する前に口を封じられる可能性は？」

『もちろんある。無事に証言を取れたとしても、どうせ拷問で強要された自白だなんだと難癖をつけて時間を引き延ばしてくるだろう。平和主義が間延びし過ぎて戦争の恐怖を忘れたバーサーカーどもめ。ああいう馬鹿が歴史の教科書に間抜けな顔写真を残すんだ』

「……対策を講じていただかなければ、地球全土は石器時代まで逆戻りです」

『「信心組織」辺りなら人類は一度滅んでリセットするべき時なのかもしれない、とか涙を浮かべたかもしれんな。だが私達は違う。なあ、君がいるのはいつもの整備基地ではなく橋頭堡だ。分類が変わっている理由は分かるかね？』

「いや、まさか……」

『第三ハンガーの片隅にある、秘匿扱いのコンテナを開けてみなさい。そのでっかい浮き輪の上には、軍法裁判を直接開廷するのに必要な体裁が全て整えてある。一分でも三〇秒でも良い、ニャルラトホテプとやらが届いたらさっさと裁判を始めて終わらせろ。一連の出来事は彼の単独犯であり、「正統王国」は関与していなかったと結論が出た。……その「判決文」さえ手に入れば、この太陽系に二つ目の恒星ができずに済む』

「つまり、ニャルラトホテプの『その後』については関与しない、という訳ですか」

『被告がくたばれば上告のリスクもなくなる。年単位で粘られている間に勝手に戦争が始まってしまう事も、優秀な弁護士サマに状況をひっくり返される恐れもなくなる。世界平和に尽

力(りょく)する者にとっては願ったり叶(かな)ったりさ。強硬派が回してくれる暗殺者にはチップでも弾(はず)んでやってくれたまえ』

笑顔のまま通信が切れた。

フローレイティアは口から甘い煙を吐(は)きながら、気味の悪い虫を潰(つぶ)すような顔でポツリと呟(つぶや)いた。

「……人類っていうのは、そろそろ一度滅んでリセットするべき時なのかもしれないな」

12

全身擦(す)り傷だらけでズキズキと痛むが、文句を言ってもいられない。

目的は『ミスカトニック』に搭載(とうさい)予定の対人センサーの破壊。それでもって『正統王国』軍側の兵士達の犠牲(ぎせい)を減らす事……だったのだが、状況が変わってきた。

オブジェクト同士の激突だ。

クウェンサーはニャルラトホテプに先導される形で、とにかく『ミスカトニック』から距離を取るために走る。縦横無尽(じゅうおうむじん)な回避(かいひ)挙動と、後追いするように放たれる『ベイビーマグナム』からの主砲(しゅほう)が、まるで何かの災害のようにオレンジ色の廃墟(はいきょ)を叩(たた)き崩していく。

走りながら、ニャルラトホテプはこう告げた。

「どこかでマスクを調達しよう。専門の工場なら必ずあるはずだ」
「マスク？」
「タンクに充填されているのは液体窒素だろう。破れて中身が漏出したら、あっという間に気化していくぞ。酸素を吸って二酸化炭素を吐き出す人間に耐えられる環境ではなくなる」
「この期に及んで、まだまだ火星にでも近づいていくっていうのか、この辺りは⁉」
接着爆弾投射機『ウォーハンマー』を両手で抱えたまま、クウェンサーは恐怖で叫ぶ。
ほんの少し離れた場所では、襲撃から立ち直った『ミスカトニック』が反撃を始めていた。化学焼夷弾を周囲に撒き散らし、八本の触手のような主砲が蠢いていく。様々な角度から純白極まる閃光を解き放つ。
オレンジ色に染まりながらもかろうじて黒ずんだ原形を保っていた工業地帯が、あっという間に溶岩の中に溶けていく。
当初は目で見ただけで気を失うほどの衝撃だったが、慣れが進むというのは果たしてメリットなのか。戦争が終わったら眼科に通って目の検査をしよう、とクウェンサーは心に誓った。
灼熱の熱波と、足元からの凄まじい震動が彼らを襲う。
いくつもの壁が倒れ、大型トラックからオブジェクトの機体整備用資材がバラバラと崩れていく。しまいには十字路状の作業路を横切るように、直径数メートルもの金属製の球体まで転がってきた。

「うわあ⁉」
危うく押し潰されそうになったクウェンサーだったが、彼が本当に驚いたのは命の危機にさらされたからではない。
その正体が、ビルの解体などに使う単なる巨大鉄球とは大きく異なるものだったからだ。
「……試作実験炉⁉　連中、こんなものまで予備部品として持ち込んでいたのか！」
「臨界状態に持ち込んで起爆させれば、足元から『ミスカトニック』を吹き飛ばせるか？」
「そんな簡単な訳がないだろう。下手に近づこうとしても、ランダムで撒き散らされる化学焼夷弾が怖すぎる。とにかく先に進もう！」
だが、すぐに巨大な壁に行く手を阻まれた。その正体は辺り一面をのたくっている、直径二メートル以上もの太さのチューブだった。おそらくは『ミスカトニック』の主砲の予備部品だ。
舌打ちし、あちこちを見回して迂回路を探すクウェンサー。
二機の怪物の激突が、少し離れた所で展開されていた。
「劣勢だな」
ニャルラトホテプは一言でお姫様を評価した。
「単純に主砲の威力もあるが、地形の溶岩化は静電気式の足を止める。その上、センサー系も真っ白に飛ぶ。挙げ句に俺達の仮説が正しければ、高度な嗅覚センサーを持った『ミスカトニック』はこの状況でもお構いなしの精密照準を維持できるときた。……これじゃあ正面から

やり合ったって勝ち目はない」
「幸い、新手の対人センサーは導入前だ。お姫様はともかくとして、俺達が『ミスカトニック』に捕捉される心配はない」
「……今の説明を聞いて、なお突撃を選ぶお前は銅像でも建ててもらうべきだ。いつも付き合わされているであろう相棒には同情するよ」
接着爆弾投射機『ウォーハンマー』を両手で抱え直しながら、クウェンサーはニャルラトホテプを伴って方向転換を行う。『ミスカトニック』を大きく迂回する格好で、工場設備の間を中腰で走り抜けていく。
「『正統王国』からも撃たれる事を忘れるなよ少年。ほら見ろ、オブジェクトの他に周りには歩兵達も展開されているぞ。どうやって切り抜ける？」
「分かってる。そもそも第一世代の『ベイビーマグナム』のセンサー群からは……」
言いかけた時だった。
クウェンサー達の真後ろで、バガンッ!! という破裂音が炸裂した。慌てて振り返れば、来た道の途中で配管が破れている。
(高温でパイプの内圧が膨張でもしたのか……!?)
しかも爆発は一回に留まらない。ドカッ！ バン!! と何度も何度も鳴り響き、少しずつこちらへ近づいてきている。

「呑まれるぞ」
「だけどここから飛び出したら……!!」
大通りのような作業路を挟んで向かいには、やはり同じように大きな建物がある。そこまで走る事ができれば新しい、安全な遮蔽物は得られるのだが……。
不用意にクウェンサーが顔を出そうとした直後、間近の壁にオレンジ色の火花が散った。身をすくめて首を引っ込める。
サバイバルキットのナイフの刃だけ出して改めて確認すると、はるか遠方……それこそ七〇〇メートルは先から、何者かがこちらへアサルトライフルを構えているのが分かった。
見知った少年の名を、歯噛みしてクウェンサーが叫ぶ。
「ヘイヴィア……!!」
「進退窮まったか。サイレンサーを取り付けているようだが、向こうが仲間に敵の位置を伝えない理由は特にない」
「そんなのはどうでも良い」
バガン！　ドン!!　と後ろから爆発が迫る。
「狙撃可能な補助センサー群を持ったライフルがなければ、近づいて撃つしかないんだ。今なら飛び出せる。あの馬鹿さえ凌げれば」
「だが相手の腕は確かだろう。不用意に出れば一〇歩も進まない内に背骨を抜かれるぞ」

「考えがある」
「もったいぶらなくて良い」
「向こうからこっちを狙っているって事は、こっちから向こうにも射線は開いているはずだ」
「だが銃がない。拳銃はもちろん、ご自慢の『ウォーハンマー』も七〇〇は届かない」
「手持ちはそれだけとは限らない」
言いながら、クウェンサーはブルパップ式接着爆弾投射機の『ウォーハンマー』に手を掛ける。
ガキリという硬い音と共に、その一部を分解していく。

摂氏一〇〇度近い炎熱地獄の中では、迂闊にアスファルトの地面へ寝そべって姿勢を安定させる事も叶わない。
ヘイヴィア＝ウィンチェルは立ったままアサルトライフルを構えながら、密かに舌打ちしていた。
（……くそっ、教本通りに撃てりゃあ一発だったものを）
傍らにいた若い兵士が、頭から銀色のマントをすっぽり覆ったまま呟いていた。
「どうしたヘイヴィア、無駄撃ちは控えろ。『資本企業』側の放棄された工場だからって、テ

レビゲームみたいにバカスカ燃料タンクを爆破して良いって訳じゃない。戦争にはルールっていうものがあるんだ」

「馬鹿野郎、そんな話じゃ……!!」

ヘイヴィアがスコープから目を離して怒鳴り返そうとした時だった。

無線から連絡が入った。

とっくの昔に周波数や暗号方式は変更されているが、同時に、クウェンサーが使っていた帯域についても『傍受』だけはできるように設定している。理由までいちいち説明する必要はないだろう。『軍において、情報はそれ自体が兵器である』からだ。

「……クウェンサーか？」

『ああ、ああ、まさにその通り。お前がそんなに薄情なヤツとは知らなかったよ』

「何を言ってやがる、爆弾で人の事吹っ飛ばしやがって！　そもそもだな、俺はテメェに二〇〇ユーロも貸してんだぞ!?　この前一緒に女湯を覗きに行った時もだな、まんまとテメェ一人だけ逃げやがって……!!」

『そんなヘイヴィアに提案がある。……ちなみにその時の写真ってどうなったと思う？』

「あん？　……写真だと？」

やたらシリアスな顔になるヘイヴィア。

そしてはるか遠方、壁の端。そこからすすすと小さな紙切れが顔を出した。

フローレイティア＝カピストラーノの入浴シーンであった。
『手を打とうヘイヴィア。これは俺とお前だけの秘密だ』
「ちぃぃッッッ‼‼‼」
ヘイヴィア＝ウィンチェルの中で理性と本能が本格的なケンカを始めた。
殺すのは容易い。だがクウェンサーが写真を手放せば、すぐにでも熱風にさらわれてどこぞの火の海の中にでも迷い込んでしまうだろう。確実に手に入れたければ条件を呑むしかない。
鼻血が出るほど頭に血液を集中させた上等兵は、やがてこう結論付けた。

（よし、今、目に焼きつけてあいつを殺そう）

どうしようもないヤツはどうしようもない答えしか出せないのだ。
そんなこんなで、狙撃用のスコープ越しに眼球の毛細血管が破れそうな勢いでガン見を続けるヘイヴィア。
（しかしおっかねえ。写真だって分かっているのに目ん玉から赤光でも放っているかのように見えるぜ。知らねえ間に随分とあの爆乳に教育されてやがったんだな、俺も……）
と、そう思っていた馬鹿だったが、
「いや、違う……」

パチパチと瞬きをする。

魅惑の入浴シーン。その一枚を写した写真には、小さな小さな、針を通したような穴が空いていた。フローレイティアの瞳の部分に。

そして写真の裏から、つまりヘイヴィアの視界から隠すようにこちらへ向けられていたのは……、

「レーザー照準器か⁉　くそっ、マナーのなってねえ観戦客かよテメェは‼」

右手に写真、左手に『ウォーハンマー』のセンサーを手にしたクウェンサーは、つまり両手が塞がっている。

代わりにニャルラトホテプがサバイバルキットのナイフの刃を鏡代わりに、状況を観察していた。

「狙撃手が目を逸らした。瞳を潰されるのを嫌ったんだろう」

「今しかない、行くぞ‼」

クウェンサーとニャルラトホテプは揃って物陰から飛び出す。

ドガンッ‼　という配管の爆発が、彼らの隠れていた場所まで呑み込む。

躍り出た二つの人影を認め、辺りの兵士達が銃弾をばらまいてくる。だが届くと当たるは

違う。中距離狙撃用のユニットがなければ、アサルトライフルの平均射程は三〇〇から四〇〇だ。クウェンサー達にまでは当たらない。

広い作業路を走ってまたぎ、次の遮蔽物たる建物の壁へと身を寄せる。

「今ので確定だ、気づかれた。じきに人海戦術がやってくるぞ」

「どっちみち、オブジェクトの対人センサーからは逃げ切れない、お姫様は第一世代だぞ。それに仲間の数が多ければ多いだけ、こっちにはやりようってものがあるんだ」

言いながら、クウェンサーは『ウォーハンマー』本体へレーザー照準器を取り付け直す。

改めて角から顔を出す。

即座にいくつかの銃口がこちらを向いたが、その前に少年は『ウォーハンマー』を適当に発射する。

『ミスカトニック』と交戦中の『ベイビーマグナム』も、小さな砲に取り付けてあるレンズをいくつか軋ませる。

……ジェリー状の爆薬が飛びかかったのは人間ではなく、液体窒素を充填させた巨大な円筒タンクだったのだ。

クウェンサーはアサルトライフルを無視して無線機に口を寄せた。

「平和的な交渉といこうじゃないか、お姫様！　兵を下がらせろ。ここでタンクが破裂したら、溶岩の熱であっという間に窒素の雲が広がっていくぞ。そしたらガス室みたいに全滅だ」

『……ぶっころされたいの？』

「まさに今デブ猫の前脚で殺されそうな籠の小鳥が何を言っているんだ。それともここで俺を撃つか？　オブジェクトの砲はどんなに小さいものでも大破壊をもたらす。ははっはあ！　タンクを破らずに俺を殺せると良いな？」

その時だった。

っっっぼん!!　というくぐもった炸裂音と共に、物質的な壁を連想させるほど強烈な熱波が地表をまとめて舐めた。

『ミスカトニック』が高速移動を繰り返しながら、またもや化学焼夷弾を辺り一面へ撒き散らしたのだ。

とっさに口元を片手で覆い、うずくまってやり過ごす。

パリパリに乾いた上下の唇を引き剝がすようにしながら、無線機に向かって叫ぶ。

「とにかく下がらせろ馬鹿野郎!!　可愛いお仲間が喉押さえて悶え苦しむのを見てから決めたって遅いんだ!!」

『……、』

わずかな間があり、こちらにライフルを突き付けている連中が一斉に怪訝な顔になった。

背は向けず、じりじりと後退しながら、誰も彼もがこちらを睨んでいる。

連中と一緒にいたヘイヴィアが、正確にこちらの胸の中央を照準したまま叫んだ。

「クウェンサー‼　どういうつもりだテメェ⁉」
「俺と同じ舞台に立ちたければ、もう少し良い男になるべきだったな貴族サマ‼」
『ウォーハンマー』の無線トリガーを指でなぞりながらクウェンサーは叫び返す。
たとえ少年を射殺しても、即死でなければ液体窒素のタンクは吹き飛ぶ。
「その無線、まだ使う気はあんのか⁉」
「だったら⁉」
「……ヤバくなったらその周波数でこっちに連絡よこせ。燃えたぎるアスファルトの上で地面にキスしやがったら命乞いを聞いてやる！」
舌打ちし、ヘイヴィアは他の歩兵達と共に撤退していった。
お姫様は無線機越しにこう言葉を突き付けてくる。
『それで、あなたはどうするの？　ひとじちがいなくなれば、タンクをたてにしたっておかまいなしなんだけど』
「なら、別の交渉条件を持ち出す」
『たとえば？』
「お姫様の『匂い』を寄越せ。それでミスカ……『エクストラアーク』の突破口が全部揃う」
『……やっぱりへんたいはぶっころそうかな……？』
「静電気式推進装置で使われている反発剤の事だ‼　『詰まり』のトラブル回避のため、小

分けした容器を切り離す機能があるだろ。さっさとイジェクトして容器を一つ足元に落とせ!!」

13

実際のところ、『ミスカトニック』は決して扱いやすい機体ではない。
コックピットに収まっている操縦士エリートは、素直にそう認めていた。
何しろ、動力炉からダイレクトにエネルギーを抜き取って放たれる主砲の威力が高過ぎる。極めて高い反動の制御に、光、熱、音、電磁波……様々なセンサーを真っ白に飛ばすほどの凄まじい奔流。その輻射熱だけで同僚の兵士達を火柱に変えてしまうリスクもあるし、高度な嗅覚センサーで敵の位置は分かると言っても、それ以外、例えば地形の情報などは分からない。ビルや岩壁に本体をぶつけるのは日常茶飯事、酷くなると自分で作った溶岩の川に自分で突っ込みそうになる、なんて間抜けな展開にも事欠かない。
リスクは覚悟の上。
それにも増して膨大なメリットが、この機体に多くの人を引き寄せているだけ。
「……、」
自らの主砲によって自らの目を潰した怪物が、匂いを頼りに敵を追う。

ここは視野なき世界。
そして目が潰れる事にあらかじめ慣れている側の方が、多少のスペックやオリジナリティなど無視して有利になれる灼熱(しゃくねつ)の地獄(じごく)。
こうしている今も、真っ白に埋まった画面の先には蛍光色(けいこうしょく)のラインがいくつも描かれていた。敵機が使っている静電気式推進装置を補助するための反発剤の軌跡だ。その先端に、倒すべき獲物がいる。照準情報をなぞって自動的に蠢(うごめ)く八本の触手を八つのトラックボールで手綱(たづな)を握り、高速移動の切り返しのタイミング……つまり慣性制御(かんせいせいぎょ)のため動きの止まる『一瞬』を待つ。
その時だった。
いきなり『匂い』の先端が消失した。
一瞬にして二〇メートルほど左側に新たな光点が生じる。
それでも、オブジェクトのサイズから考えれば『半歩』の距離。
（「はんぱつざい」の反応がとんだ？　ほじょのブースターでもつかったか、あるいはついに匂いのセンサーまで狂いはじめたか……？）
歯噛(はが)みし、即座に主砲を解き放った。
機能を切ってあるはずなのに、周囲のスピーカーから凄まじいノイズの奔流が殺到してくる。
ともあれ、これで終わり。
正確に『匂いの元』へ高威力のプラズマが突き刺さり、地球の表面ごとオレンジ色に溶かし

て削り取っていく。

その。

はずだった。

カッッッ!!!!!!　と、直後に意味の分からない現象が起きた。

『ミスカトニック』の中心が圧倒的熱量に貫かれ、オレンジ色に溶解してしまったのだ。

14

クウェンサーとニャルラトホテプが取った戦術は単純なものだった。

『ミスカトニック』整備用として、あちこちに散らばっていた予備部品。その中から主砲に使われている触手状のチューブを束ねた巨大なリールと、直径数メートル大の球体……試作動力炉を引っ張り出したのだ。

ちなみに、重機の鍵を壊して運転したのはニャルラトホテプだった。

「布陣は簡単だ！　うちのお姫様が戦っている辺りで、大きくUの字を描くように配置してくれれば良い!!　砲口の具体的な角度は、『ウォーハンマー』のレーザーポインターで大体合わせてみる!!」

「本当に上手くいくと思うか？」

「試作実験炉が冷えているのが怖いが、まあ何とかなるだろう。システム全体を動かすんじゃなくて、主砲内部の電磁石の帯を稼働させるだけなら、完全な臨界状態じゃなくてもエネルギーは間に合うはずだ!!」

こうして、二機のオブジェクトが激戦を繰り広げる最中、二人はコソコソと作業を続けていた。

普通であれば、対オブジェクトに特化した第二世代であっても見逃す事はなかっただろう。だが、『ミスカトニック』は自分の主砲の閃光で自分の目を焼いてしまうほどの機体だ。そして対人センサーの改良は間に合わなかった。今なら全裸で目の前を横切ったって気づかれる事はない。

全ての準備が終わると、最後にクウェンサーは静電気推進装置とセットで用意されている反発剤の容器を触手状の主砲の先端付近に転がした。

『ウォーハンマー』のジェリー状爆薬を容器の側面に撃ち込み、距離を取る。

無線機に向かって叫ぶ。

「合図と共に目の前を横切って推進装置を切れ！　こっちは容器を吹き飛ばして反発剤を撒き散らす！　向こうからは高速反転したように表示されるはずだ!!」

果たして、決戦の時はきた。

『ミスカトニック』から伸びた軟体動物の触手のような主砲から、凄まじい閃光が解き放たれた。それはクウェンサー達がU字に敷設した予備部品の中に吸い込まれると、光ファイバーの中を走る信号のようにお行儀良くトンネルの中を突き進んでいく。糸巻きのように束ねられたリールの中を何百何千何万とループし、そのままの勢いで反対側の出口から飛び出していく。

そう。

まるで、巨大な鏡で光を反射させるかのように。

後に起きた結果は明白だった。

『ミスカトニック』の球体状本体が、自らの主砲によって貫かれた。

核にも耐える膨大な装甲が、一瞬にしてオレンジ色に溶ける。下部のエアクッションや麦わら帽子を頭に引っ掛けたように後部上方に取り付けられた巨大な花に似た八門の主砲などが、まだ溶けていない外側の部品や残骸が溶けかけたアイスクリームのてっぺんに爆竹でも刺して破裂させるのにも似て、四方八方へと散らばっていく。さらに少し遅れて、何かを思い出す格好で別の爆発もあった。動力炉そのものが溶けて大爆発を巻き起こしたのだ。

十分に離れて観察していたはずのクウェンサー達の体が、勢い良く宙を舞った。

背中から地面に叩きつけられ、湿った咳を連発させる少年だったが、それでも全身を安堵が

包んでいた。

最大の敵は葬った。

まだ『正統王国』から逃げ出す必要があるが、それでもハードルは随分下がったと見るべきだ。クウェンサーは傍らで同じように倒れていたニャルラトホテプの肩を掴み、揺さぶる。

「……おい、『死んだふり作戦』で行こう。あの爆発なら『ベイビーマグナム』のセンサーも少しの間は真っ白に飛んでいる。どうやったら足取りを消せ……」

言いかけた、その時だった。

さらなる恐怖がやってきた。

いいや、厳密にはまだ戦争は終わっていなかった、と見るべきか。

……クウェンサー＝バーボタージュは失念していたのだ。

『ミスカトニック』は動力炉からダイレクトにエネルギーを取り出して外へ解き放つ事で、主砲を構成していた。

だが、それは言い換えれば動力炉の中に溜め込んでいた熱を不定期に逃がしてしまう事も意味する。言うまでもないが、それは機体全体のエネルギー供給に極端な『むら』を作る羽目に陥る。普通であれば、主砲を放つたびに機体がガクンガクンと失速するはずだし、最悪、安定した臨界状態が崩れてエンストに似た状態に陥るかもしれない。

実際には、そんな気配は微塵もなかった。

つまり、クウェンサーの『読み』は半分正解で半分外れだった。
平たく言えば、動力炉は二つあった。
八枚の花弁を持つ大きな時計の文字盤。そこから伸びた八本の触手が大地を踏み締め、内一本が『ベイビーマグナム』へ恐るべき主砲を解き放っていた。

15

「『ベイビーマグナム』中破！　繰り返します、『ベイビーマグナム』中破‼　回避挙動に失敗しました。動力炉は安定していますが、推進装置の出力は推定で七〇％以上低下。機体を浮かばせるのが精一杯で、次の一撃を回避できるとは思えません‼」
「くそっ‼」
若い女性オペレーターの悲鳴のような報告を受けて、フローレイティアは思わず吐き捨てた。
「……なんて野郎だ。核にも耐える装甲がありながら、コックピットをその外側に作るだと。ほとんど自殺志願まがいのブラフじゃない……」
だが、どんな奇策だろうがはまってしまった以上はどうしようもない。
今なら戦車や爆撃機などでも『エクストラアーク』にとどめを刺す事はできるが、現場で展

開されているヘイヴィア達に、机上の空論を実現させろと迫るのは酷だ。どう考えたって、八本の主砲が辺り一面を溶岩だらけの地獄に変える方が早い。

そして、世界規模の狂乱の発生を食い止められる唯一の『真犯人』、ニャルラトホテプに証言させる事ができなくなればどうなるか。

人類の終わり。そのカウントダウンが明確に始まった。

16

呆然と。

立ち尽くしたまま、クウェンサーはこの世の終わりを眺めていた。

『ミスカトニック』の動力炉は二つあった。いいや、あるいは二機あった、とでも表現すべきか。まるで得体のしれないエイリアンが人の後頭部に張り付いて操っていたかのように、コックピットはタマネギ装甲の外側に装着されていたのだ。

「……気づくべきだった」

『ベイビーマグナム』は右手側の半身を溶けたアイスクリームのように変貌させていた。砲も、装甲も、みんなまとめてオレンジ色に輝かせている。得体のしれない巨大な花か、円盤型の巨大UFOから触手を伸ばして無理矢理立たせたような格好の『ミスカトニック』だが、今のお

姫様にはあれを撃ち抜くのは難しいだろう。
　ニャルラトホテプもまた、顔に薄く笑みを張り付けたままこう告げた。
「無理もない。試作実験炉が出てきた時点では俺も見逃していた。あれは予備部品ではなく、カートリッジの可能性を考慮してみるべきだった。何しろ7thコアの一角、アザトゥースが肝いりの特大予算を組んで造らせた企業の顔だ。動力炉が複数あったって不思議じゃない事くらい、分かってしかるべきだったのに」
「そうじゃない」
「なに？」
「気づくべきだった。ああ、最初の最初に気づくべきだった‼　どこまで馬鹿だったんだ、俺は。本当に喰ったものの栄養が頭に回ってんのか⁉　全部おっぱいに回せる訳じゃないんだ、一体どこへ消えやがった‼」
「何を言っている。この状況で、着目している点が違うとでも言うのか？」
「そうだ‼　パナマ運河の対岸、『正統王国』が肩入れしているソベラニア方面が溶岩の川になるのは分かる。だが、何で『ミスカトニック』はこっち側……自分達の領地まで火の海に変えている⁉　どう考えたって不自然だったろう‼」
「……それは、対人センサーを信用していない『ミスカトニック』が、見えない歩兵に張り付かれるのを嫌って不定期に化学焼夷弾を撒いていたからでは」

「張り付いてどうする？　二〇万トンの塊相手に拳で殴り合うのか？　あいつはそんなもんにビビったりしないさ。たとえコックピットがタマネギ装甲の外側に造られていたとしてもだ」

「なら、何なんだ……？」

　ニャルラトホテプは、初めて『疑問』そのものとぶち当たった顔をした。

「何のために、あいつは化学焼夷弾を使っているんだ」

「摂氏九〇度……いいや、殺傷圏ならそんな次元じゃないか。とにかく、一〇〇〇度を超す炎熱地獄を作り出す事」

「？」

「そして、動力炉の内部と外気の温度差をほんの少しでも縮める事。……アンタ、前に言っていただろう。プラズマを制御するのに分厚い壁はいらない。そんな風にしたって、壁を溶かされるのがオチだ。だから極めて強力な磁力線を使うんだって」

「そうか……コーヒーサイフォンと同じなんだな」

「そういう事。できるだけ外と中の温度差を広げたくなかった、そのための焼夷弾だ。……でも逆に言えば液体窒素で空気を急速に冷やす事で内外の温度差が広がり過ぎると、チューブ状のトンネルの根元にある弁を開いた途端に熱の高い方から低い方、圧力の高い方から低い方へ高威力のプラズマが引きずり出されてしまう。……主砲として管理されたレベルをはるかに超えた、制御不能のレベルでな。下手をすれば、弁そのものがぶっ壊れて二度と閉じなくなる」

コーヒーサイフォンは密閉容器の中で圧力を変動させる事で動かしているが、別に気圧の変動は密閉容器内部のみで起こるとは限らない。例えば天候兵器の中には、ドライアイスや液体窒素などを使って空気を冷やし、竜巻やダウンバーストを誘発させるものもある。

「動力炉が二つあった万全な状態でも、機体全体を溶かされるリスクが出る。まして、一つしかない今の状況なら……」

「内部は冷やされ、臨界状態は維持できずにエンストを起こす。いいや、最悪、ヤツ自身が自分で撒き散らしたゲロの海に沈んで溺死するかもな!!」

叫ぶなり、クウェンサーは『ウォーハンマー』を構え直した。

ちょうど、『ミスカトニック』が『ベイビーマグナム』へ触手状の主砲を向け直したところだった。

やたらと太い、二五ミリ用のマガジンに残っていた全ての砲弾を撃ち尽くす。ジェリー状の爆薬を『ミスカトニック』の周辺にあった円筒タンクへと次々に貼り付けていく。

躊躇う必要はなかった。

無線トリガーを引き、一気にまとめて起爆させる。

ドガドガドガッッッ!!!!!! と立て続けに炸裂が起こり、決して薄くはないタンクの表面が食い破られるように風穴を空けていく。すぐに、爆薬の想定を超えた大きな破裂によって、タンクが丸ごと吹き飛ばされた。魔法瓶の外から膨大な溶岩の熱が入り込み、瞬間気化した窒

素が金属タンクを内側から破壊したのだ。
あっという間に、液体窒素の湖が広がっていく。
それらが派手な中華料理のような音を立てる。瞬間気化が広がっていく。
周囲一帯の炎熱地獄を、一瞬にして氷の地獄へと変貌させながら。
幸運だったのは、『ミスカトニック』側もギリギリの状態で、周囲を細かく走査するだけの設備が残っていなかった事か。
目下最大の脅威を排除するため、その触手のような主砲から強烈な光が解き放たれた。
直後の出来事だった。

全てが白い光の中に呑み込まれた。
今度の今度こそ、『ミスカトニック』はこの惑星から跡形もなく消え去ってしまった。
爆発の威力に目を焼かれそうになったクウェンサーは、へたりこんだまま、ニャルラトホテプに手を引かれた。
「まだ終わりじゃない」
七三分けのスパイはそう言った。
「俺を罰して、世界の崩壊とやらを防ぐんだろう。『正統王国』が混乱から回復する前に行方

及び腰になる可能性は高い。今なら逃げ切れる公算もある」

クウェンサーは、ゆっくりと立ち上がろうとした。

だが、その前に別の声があった。

「いいや、ここで終わりだぜ。虫けら野郎」

ゴンッ!! と、クウェンサーの後頭部と首の後ろの中間辺りに、重たい衝撃が走り抜けた。立ち上がりかけた状態から膝の力が抜け、そのままますとんと灼熱の地面へ崩れ落ちていく。

アサルトライフルのストックで殴られた、と気づくのに少し必要だった。

「ヘイ……ヴィア……?」

返事はなかった。

自分の頭をまたぐようにして軍用ブーツを履いた足が進み、さらにニャルラトホテプに向かっていく影を、目で追い駆けるのが精一杯だった。

これが、戦争の終わり。

公式記録では、『正統王国』の勝利で幕引きとなった戦争の、本当の終わりだった。

終章

命令違反、交戦区域の無断離脱、無許可での支給火器の使用及び破壊行為、第三七機動整備大隊と『正統王国』全体の国益を危険にさらした事実を考慮し、戦地派遣留学生である事を鑑みても、クウェンサー＝バーボタージュの営倉送りは避けられないものと、ここに結論付ける。

「……わおー。ついにぶち込まれましたよブタ箱ツアー。臭いメシってのは消しゴムみたいなレーションよりもきついのかなあ？」

独房。一辺五メートルほどの四角いサイコロの中、主な明かりは天井からぶら下がった裸電球だけ。あるものと言えば携帯トイレと毛布が一枚という悲劇。鉄の扉には食事用のスリット以外に何もなく、そもそもこちら側からはドアノブすら取り付けられていなかった。おそらく、ノブに布と首を引っ掛けて座り込む事で自殺したがるヤツを防止するための措置だろう。

鋼のドアの向こうでは、ご丁寧にここまで案内してくださった腐れ縁のクソ野郎サマ、ヘイヴィア＝ウィンチェルがこんな風に言っていた。

「命があっただけでもありがたく思えよ。テメェが『信心組織』のカミサマにお祈りするっつっても今なら止めねえ。それくらいの奇跡なんだぜ」

「悪いんだけどさ、反省する気全くないよ。どう考えたって俺の選択が正しかったに決まっているし」

「どの口が言ってやがるんだ⁉」

「良いか悪いかなんて知らないよ。だけど正しいか正しくないかは結果がきちんと教えてくれる。ヘイヴィア、『こう』なったのはお前の努力のおかげじゃない。あの崩れ落ちた小屋で捕虜をお前の手に渡していれば、脳天一発の鉛弾と引き換えに世界は炎に包まれていた」

チッ、と舌打ちが返ってきた。

理論武装めいた言い訳が返ってこなかった事を見る限り、それを認める理性くらいは戻ったらしい。

「死んじまえ」

「お互い様」

きっと向こうもそうしていると信用して、クウェンサーはドア越しに中指を立ててみた。ギスギスしているように聞こえるかもしれないが、あの悪友とはこれくらいでちょうど良い。むしろ、奇妙な猫なで声で労をねぎらってきた方が本格的に怖い。銃殺前夜かと脅えるだろう。

ヘイヴィアの足音は去っていく。

一人になって暇なのでパカパカと食事用のスリットを開け閉めしていると、向かいの房の食事用スリットも開いているのに気づいた。
七三分けのニャルラトホテプの目線がこちらを捉えている。
「やあ、引っ越し記念のホームパーティの用意もできず申し訳ない。それにしても、こんな独房でも天国のように感じられるから不思議なものだ。まあ、あれだけの極限環境から生き延びたのだから無理もないだろうが」
「そっちは……軍法裁判、だったよな」
「ああ、開廷から判決まで、わずか三〇秒の驚異的な茶番劇だったがね。とはいえ、これで俺の仕事も一段落といったところか」
「……被告の氏名と判決読んでおしまいじゃないか。法律家が知ったら泣き出しそうだぞ、それ」
「というか、橋頭堡で準備が進められているのなら、無理して青十字を目指す必要もなかったな。最初っから、素直に両手を上げて投降していれば良かったんだ」
「言うなって！　全身の擦り傷と筋肉痛に塩でも塗り込む気か!!」
とはいえ、すっかり理性が焼き切れていたあの状況なら、ヘイヴィア達は『正統王国』全体の方針に従わずその場で射殺していた可能性も否定できない。そして『ミスカトニック』を撃破できず、凶悪なプラズマで拠点ごと消滅させられていた可能性も。完全な結果論ではある

が、ここに辿り着くためには『紆余曲折』もまた必要な事だったのだ。
「どういう茶番劇だろうが、軍法裁判は軍法裁判だ。そこでの『判決文』は国際法上の公的な記録としての威力を発揮する。これで、お前が望んでいた通りに世界の破滅を食い止められる道筋が立ってきたという訳だな」
「それだけが救いかもな。銅像建てるくらいなら、それ全部溶かして業者にでも売り飛ばしてやりたい気分だけど」
「……これからどんな未来が待っていようが、お前には頭を下げよう。妻と息子の仇を討つためにアザトゥースを殺さなくてはならなかった。それに恥じる事は何もないと今でも思っている。だが、そのために無関係な『安全国』が瓦礫の中に沈んでいったら、きっと復讐の純度は落ちていただろう。墓に供える花束をクソまみれにするようなものだ。だから、本当に感謝をしている。仕事柄、ずっと人を騙してきた。家族さえもな。だけどこれだけは嘘じゃない」
「おい……一体何を……？」
「それに、茶番劇の裁判や後世の歴史書ではどれだけ歪められようが、こうして一人でも『本当の事』を知ってくれる人間と出会う機会に恵まれた。だから、本当にここだけは嘘を挟まないよ。お前は俺の希望だった。これから起こる事を、気に病む必要はない」
「ちょっと待て！　何の話をしているんだ⁉」
疑問に答える声はなかった。

代わりに、かつん、こつん、という静かな足音が響いてきた。営倉エリアの出入り口が開く時には必ず鳴り響く太いブザーがない。クウェンサーの顔いっぱいに、何かとても嫌な汗が噴き出してきた。やがて食事用のスリットからでも覗ける範囲に『誰か』がやってきた。そいつは明らかに見張りの兵士とは異なり、そして、片手にサイレンサーのついた小型拳銃を握っていた。

「やあ御同類。戦争強硬派の暗殺者かな？　それとも、溶岩の中に放り込まれた諜報部門の仇でもとりに来たか」

向かいの房から聞こえたニャルラトホテプの声は、明らかにこの時を予見していたものだった。

返事はない。

一体どこで手に入れたのか、やはり明らかに正規のものとは思えない、灰色一色ののっぺりとしたカードを扉の前にかざすと、面白いように房の扉が開いてしまう。

『正統王国』の軍服を纏う何者かの背中が、向かいの房へと踏み込んでいく。

「待っ……」

クウェンサーが叫ぶ暇もなかった。

ボシュボシュ!!　というくぐもった銃声が何発か響いた。

そこで終わらなかった。

さらに続けて……。

ッッッドン!!!!!!　という凄まじい爆音と震動が、パナマ湾に隣接していた四角いメガフロート式橋頭堡『ガーデンゲート』を大きく揺さぶった。

「営倉エリアから出火です！　いいや、これは爆発といった方が正しいのかも……」

女性オペレーターからの声に、フローレイティアは頭を抱えた。

部屋のすぐ外を、バタバタという乱暴な足音がいくつも走り抜けていったようだった。

爆破の衝撃でカメラか配線がやられたのか、営倉エリアの映像は出てこない。その内、いくつかのモニターの映像がノイズからぐらぐらと揺れる映像に切り替わった。兵士達のヘルメットについている小型カメラのものを拾っているのだ。

中にはヘイヴィアも混ざっているらしい。

炎というより粉塵まみれで視界が悪い営倉エリアの直線通路だったが、中でも一つの房が酷かった。鋼鉄でできた扉どころか、周囲にあった壁さえ粉々になって一帯に撒き散らされている。

『……ニャルラトホテプの独房だぜ』

ライフルを構えながらじりじりと接近するヘイヴィアの声が聞こえた。

『ヤバいぞ、この破片……内側から破裂してやがる！　くそっくそっくそっ！　ああちくしょう!!　中は一面真っ赤なソースまみれだ！　誰が爆発物なんか持ち込みやがったんだ!?』
フローレイティアはその言葉を耳にしながら、重たい息を吐いた。
たった三〇秒の軍法裁判。世界の危機を止めるための偉業。
そんなものを終わらせた後に何が起こるかなんて、分かっていたはずだった。

混乱したように喚く顔馴染みの言葉をスリット越しに耳にしながら、クウェンサーは営倉の中でそっと息を吐いていた。
このスリットから、彼らの知らない事実を少年は目撃していた。
こいつを起こした『真犯人』の顔だ。
爆破から一〇分前の事だ。
サイレンサーをつけて押し殺した銃声が何発も響いた直後、やたらと耳が痛い静寂が辺りを覆った。やがて、ぎい、と鋼鉄の扉が音を立てて開いた。
その時、見たのだ。
『正統王国』の軍服を纏い、片手にサイレンサーを装着させた小型拳銃を握った男の顔を。
「……ニャル、ラトホテプ……!?」

「ああ済まない。素直にくたばってやるつもりだったが、刺客のヤツが思った以上に弱くてな。向こうの課報部門には、情報ではなく人の心を読むようにと伝えておいてくれたまえ」

言いながら、ニャルラトホテプはウェストポーチに入っていたプラスチック爆弾に信管を突き刺して、空っぽになった……いいや、鉛弾を受けた何者かの死体を残した房の中へと気軽に放り込んだ。

「これから、どうするつもりなんだ……？」

「さあな。だが必要最低限の義務は果たした。俺の口から証言して『判決文』を作ったんだ、これで世界の危機は回避されるだろう。後の人生をどう決めるのかは、俺の仕事だよ」

「本当に逃げ切れるとでも思っているのか？　単に橋頭堡だけの話じゃない、『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』……いくつもの世界的勢力が徹底的に管理する、この惑星からの話だ!!」

「ははっ！　だから何度も言っているだろう」

ニャルラトホテプは起爆に使う無線機を手の中で弄びながら、

「ここでの一回くらいバレたって構わないさ、最終的に足取りさえ消せるなら。だから『得意技』って呼ばれているんだ」

ドガッッッ!!!!!! という凄まじい爆発音が炸裂した。
彼は、偽造されたマスターキーと拳銃を使ってクウェンサーを殺さなかった。
おそらく、露見したって構わないという自信があったのだろう。

「……なんていう話があったんだってねえ。いや、軍人さんもやっぱり大変だよ。『クリーンな戦争』なんて『安全国』で就職に失敗した時の仮の宿だなんて言われているけど、やっぱり銃を握って走り回るお仕事なんだから」
南欧。地中海に浮かぶ小国。『正統王国』と『信心組織』がかち合うための踏み台としても揶揄される高級リゾート地のバーで、まだ四月なのに大きく肩を出してへそも露出させたお姉さんがそんな事を言っていた。
どれだけ優秀なファイアウォールやセキュリティ体制が採用されたところで、戦争の真っ最中に高級リゾート地でトップレスの美女達とごろ寝したいと願う将校達の酔っ払った口だけは止められない。一〇〇年近く続いているスパイ天国だが、危機感の薄い馬鹿というのはいつまで経ってもなくなるものではないのだ。
テレビのニュースでは胡散臭い軍法裁判の直後に被告が爆死した事で、若干ながら世間を騒がせているようだったが、大衆があまり興味を持っていない事にマスコミが気づけば、すぐ

にでも他の話題に差し替えられていくだろう。
カウンターのスツールに腰かけている男は、グラスの底にちょびっとだけウィスキーを注ぎ、なみなみと水で薄めてからレモンまで搾るといった、チキンの道をひたすら突っ走っていた。
頼んでもいない生ハムを勝手にカウンターに置き、自分でも一つまみ摑んで口に放り込みながら、お姉さんは呆れたような顔で言う。
「アンタ、酔っ払うのが怖いなら何で酒場に足を運んできた訳？」
「単なる儀式というか……踏ん切りってヤツなのかな。一つの大きな仕事を終えて、そこで俺の人生は終わると思っていたが、そうでもなかった。身の振り方っていうのをあれこれ考えていた訳さ」
「悩んで呑むヤツはアル中になるわよ。好きで呑むのと、呑まないと不安になるのは全然違うから」
「大丈夫だ、踏ん切りって言っただろう。たった一度あれば良いんだ」
「へえ。大きなお仕事って口走っていたけど、転職でもするつもり？」
「まあ、ああ、ある意味では。元々、できればあんまり使いたくなかった技術ではあったし」
どこか茫洋とした口振りは、何かを思い出しながら語っているからかもしれない。酔っ払いの相手ばかりをするお姉さんとしては、あまり珍しいものでもない。
「本当は、あそこで俺の人生は終わるはずだったんだが、あの少年を見ていると未練が疼いた」

「え、あっ⁉　少年趣味なの、おっさん⁉」
「いいや。……また子供が欲しくなった、そんな気分だ。前の妻と息子の顔が霞むから、あまり褒められた心の動きとも思えないが」
「ははっ‼　良いんじゃないの、人生なんかいくつからやり直したって構わないんだ。長い長い人生の中じゃ、きっと奥さんと別れるのだって神様の思し召しってヤツだったんでしょうよ。いつかどこかで吹っ切って、新しい嫁の腰を抱くのだって悪くないわ」
その男は、小さく笑った。
とびきり薄めたウィスキーを舌で舐めながら、彼はこう言った。
「ここは、良い場所だな。人の根幹を作る風土が良い」
「本気で長居していく？　全体的に家賃が馬鹿高いのがアレだけど、私みたいに下宿から始めてお店を任されるくらい信用されちゃえば、ほとんどタダで屋根のある家を預かる事もできるわよ」
「なるほど、それは良い事を聞いた」
言うだけ言うと、男はグラスを摑んで一気に呷った。
分厚いガラスの底をカウンターに叩きつけ、彼は驚くお姉さんへこう提案した。
「ところで、ものは相談なんだが。このお店……君の新人時代と同じく、まだ新しい下宿人は募集しているのかな？」

一〇〇〇の顔を持つその男は、奇妙な笑顔を張り付けたまま、何度目かの人生を歩んでいく。
彼が再び惑星全体を引っ掻き回すか、あるいはささやかな幸福と共に埋没していくか。
それは、世界の理性とやらにかかっている。

あとがき

一冊ずつのあなたはお久しぶり、まとめ買いのあなたは初めまして。
鎌池(かまち)和馬(かずま)です。
十冊目！　かな？　このシリーズは最初の一冊目の『スターター』以降は順番を無視して構わない、というコンセプトなので、徐々に自分でも通し番号を忘れてしまったり。な、内容さえきちんと把握(はあく)していれば大丈夫なのですよ!!

今回は陸、海、空、海兵隊、宇宙またはサイバー攻撃……以上『五つの軍隊』の先にあるものとして独自に設定した『第六の軍隊』がテーマとなっております。ここでの定義は人間の内的宇宙を徹底的(てっていてき)に破壊する心理戦専門部隊。……ただ、小さな部隊の士気(しき)高揚(こうよう)から大きな国家全体の戦時広報、国際社会への正当化アピールまで、人の心に作用する戦争要因なんてすでに色々あるんですよね。こちらではそれらの役割を各部門から一元化した上で、『いかに大勢を味方につけるか』ではなく『破壊的な情報でもって、敵対者を「直接」叩(たた)き潰(つぶ)して組織集団を

壊滅させるために』実行するもの、とアレンジして『第六の軍隊』と定義づけてみました。
そして、ヨグ＝ソトース、アザトゥース、ミスカトニック、某街のモデルとなったセイレム、銀の鍵、外なる神、おまけにニャルラトホテプ。……ここまで並べれば、モチーフとしているものはもうお分かりのはず。『相手の心を破壊する技術』をテーマにしましたので、クトゥルフ系のものを取り入れてみました。
関連して、ミスカトニックの主砲については『あっちのあれ』らしく八本の触手で即決。ただ、タコを普通に食べちゃう日本人にはあまりおぞましさは伝わらないかもしれませんね。グネグネ動く胃カメラ砲ならレーザービームの方がストレートだったかも……なのですが、『浮上したらおしまい、目撃すると発狂』という例のテーマを踏襲し、『動力炉からダイレクトにエネルギーを取り出して、莫大な光と熱で計器類を真っ白に飛ばす』という形に料理してみました。
また、以前『メガロダイバー』なる深海専門のオブジェクトを登場させましたので、今回はオレンジ色に輝く溶岩の海に君臨するタコ型邪神、という形に。
これもこれで、『世界の終わり』をイメージする超大型兵器としてインパクトのあるビジュアルを組み立てられたかな、と思っているのですが、いかがでしたでしょうか？
今回、特に重要とされるのは『心』。なので、大きな戦争の目的がたった一つの復讐であった

り、いつもの馬鹿二人が互いに銃口を突き付けて対立する羽目に陥ったり、色々好き放題やっています。ひょっとしたら『いつもの』ヘヴィーオブジェクトとは印象の違うシーンもあったかもしれませんが、でも、『バディものにおいて、途中から主人公二人が真っ二つに分かれて対立する』は、いつか絶対にやってみたかった事でした。……ここで『たった一人の少女を巡って』としなくても済ませられる自由度の高さこそが、この作品の素敵な世界観だと思います。
今回出てきたニャルラトホテプは主役になれるようなキャラではありませんが、でも、何でか時折『復讐もの』のお話に走りたがる癖みたいなものがあるんですよね。

イラストの凪良さん、担当の三木さん、小野寺さん、阿南さんには感謝を。……八機のオブジェクトに、半分溶けた溶岩の街。文章では気軽に書いている事全部が大変だったと思います。本当にありがとうございました。
そして読者の皆様にも感謝を。今回はオブジェクトではなく、真に『人』をテーマにした物語でした。その冠に『珍しく』とつけられる事自体、奇跡のようなバランスで成立しているシリーズだと思います。のびのびと羽を伸ばせる環境を提供してくださって、本当にありがとうございます。

それでは、今回はこの辺りで。

この一冊が、あなたにとってほんの小さな糧(かて)となっていただけますように。
ウォーハンマー、ちょっと便利過ぎるかな……

鎌池(かまち)和馬(かずま)

◉鎌池和馬著作リスト

「とある魔術の禁書目録(インデックス)」(電撃文庫)
「とある魔術の禁書目録(インデックス)②」(同)
「とある魔術の禁書目録(インデックス)③」(同)
「とある魔術の禁書目録(インデックス)④」(同)
「とある魔術の禁書目録(インデックス)⑤」(同)
「とある魔術の禁書目録(インデックス)⑥」(同)
「とある魔術の禁書目録(インデックス)⑦」(同)
「とある魔術の禁書目録(インデックス)⑧」(同)

「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑩」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑪」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑫」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑬」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑭」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑮」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑯」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉑」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉒」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）SS」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）SS②」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）

「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)③」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)④」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑤」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑥」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑦」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑧」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑨」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑩」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑪」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑫」(同)
「新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)⑬」(同)
「ヘヴィーオブジェクト」(同)
「ヘヴィーオブジェクト　採用戦争」(同)
「ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影」(同)
「ヘヴィーオブジェクト　電子数学の財宝」(同)
「ヘヴィーオブジェクト　死の祭典」(同)
「ヘヴィーオブジェクト　第三世代への道」(同)
「ヘヴィーオブジェクト　亡霊達の警察」(同)

「ヘヴィーオブジェクト　七〇%の支配者」(同)
「ヘヴィーオブジェクト　氷点下一九五度の救済」(同)
「ヘヴィーオブジェクト　外なる神」(同)
「インテリビレッジの座敷童」(同)
「インテリビレッジの座敷童②」(同)
「インテリビレッジの座敷童③」(同)
「インテリビレッジの座敷童④」(同)
「インテリビレッジの座敷童⑤」(同)
「インテリビレッジの座敷童⑥」(同)
「インテリビレッジの座敷童⑦」(同)
「インテリビレッジの座敷童⑧」(同)
「簡単なアンケートです」(同)
「簡単なモニターです」(同)
「ヴァルトラウテさんの婚活事情」(同)
「未踏召喚：//ブラッドサイン」(同)
「未踏召喚：//ブラッドサイン②」(同)
「未踏召喚：//ブラッドサイン③」(同)
「とある魔術のヘヴィーな座敷童が簡単な殺人妃の婚活事情」(同)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「鎌池和馬先生」係
「凪良先生」係

初出

「地獄の蕾が開く季節 〉〉白海方面北極航路争奪戦」／「電撃文庫MAGAZINE Vol.42」(2015年3月号)
「すくすく育つ陰謀論 〉〉カリバ方面合同軍事演習」／「電撃文庫MAGAZINE Vol.43」(2015年5月号)

文庫収録にあたり、加筆、訂正しています。

「咲き誇る第六の軍隊 〉〉ソベラニア方面動乱介入」は書き下ろしです。

この物語はフィクションです。実在の人物·団体等とは一切関係ありません。

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト　外なる神

鎌池和馬

発　行　　2015年10月10日　初版発行

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
03-3238-1854（営業）
装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）
印刷　株式会社暁印刷
製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークスお問い合わせ窓口あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

©2015 KAZUMA KAMACHI
ISBN978-4-04-865452-4　C0193　Printed in Japan

電撃文庫　http://dengekibunko.jp/
株式会社 KADOKAWA　http://www.kadokawa.co.jp/

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦